
世界のカケラ

viseo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の力ケラ

【NZコード】

N5524M

【作者名】

viseo

【あらすじ】

職場の保育園から帰る途中、逆恨みで車ごと崖から落とされたのは葉山橙子^{ハヤマトウコ}28歳。瀕死の状態で異世界に飛ばされたのは、幸運?それとも不運?

大人の女性の異世界サバイバル。ベタ甘モテモテ逆ハーレムよりは、どちらかといふとチラリズム恋愛至上主義なので、恋愛糖度は低めです。

はじまつの二日月

人生とことんついてない事があるもんだ

葉山 橙子^{ハヤマトコ}はフロントガラス越しに見える景色を、ぼんやりと眺めていた。蜘蛛の巣状にガラスに走る煌きが、二日月の光を受けていつも幻想的で美しい。

今日びの車は壊れることで衝撃を逃がし、中の人間を守ると聞いたことがあるけど、実体験できるとは。何せ私、一〇メートルもある崖から車ごと突き落とされても、まだ生きているよ。

とはいっても、指一本動かせず、意識を体のあちこちにめぐらせれば、体中全体が心臓になつたように脈打っている。上手く瞬きが出来ないのは、どうやら頭から出血しているらしい。他にも耳鳴り、めまい、動悸、etc・・・まあ救心じゃ間に合わないのだけは確かだ。

自虐の趣味は無いので、さつさと痛みから意識をそらし、目の前に広がる人生最後の美しい景色に逃避する。

子供たちを乗せていいなくてよかつた。

否。子供を乗せていないから突き落とされたのだろう。

明らかな殺意を持つて後ろから幾度もぶつかってきたのは、勤めている保育園^{ドウマイコ}でよく見た明るいパステルカラーのタウンカー。遠藤^{エン}麻衣子^{マコト}のものだ。

うちの子供たちったら、橙子先生の大ファンなんですよ。いつも先生の話ばかりしてゐるんです。

脳裏に浮かぶ車の持ち主麻衣子は、こんな田舎では珍しい、垢抜けながらもどこかあどけない、はつと田を引く可愛さのある女性だつた。

しかし先ほどびぶつかつてきた車の運転席にいた女性は、未だかつて見たことが無いような般若のような顔をしていた。

女の嫉妬は怖いって言ひけど、正直ここままでやるか？

罪の無い会話が一体いつから変わつていったのか、わからない。元々体が弱いらしく、麻衣子が小説家の旦那と共に空氣の良いこの町に引っ越してきたのは数年前。

引っ越し案なのか、最愛の家族以外とは中々打ち解けないようだつた。

けれども、保育園に初めて来た時から橙子を非常に頼りにして、橙子もこの可愛らしい女性を気に入っていた。

体が弱く、度々入院する麻衣子の代わりに、近所の橙子が家まで子供たちを送り届けるのは当然の成り行きだつたし、送りにいけば恐縮した父親が迎えに出る。

笑顔で父親に駆け寄る子供たち手を振り、挨拶をしてかえる。

時には母親が不在の寂しさから子供たちに引き止められることも、小説家の父親に小説の題材として色々話を聞かれることがあったが、橙子にとつてはただの日常の一コマに過ぎなかつた。

それは彼らにとつても同じことだつたわ。

しかし体の弱さが心の弱さを呼んだのか。

麻衣子の中では一つ一つが疑心の芽を育てる行為に他ならず、いつしか橙子への憧憬の眼差しが、嫉妬と憎悪の色に塗り替えられていつた。

実際、麻衣子の旦那と浮気のひとつでもしてれば気分も違つたのかもしぬないが、優しげなインテリ男性はまったくもつて趣味でない。

してもいらない不倫関係を疑われた挙句、殺人事件にまで発展つて、どーよ。

そもそも、恋愛対象者以外につきまとつて事件を起こすのも、ストーカー事件つていうのか？

それなりに楽天家だと自負していたが、流石にこれはやりきれない。

氣弱だつたり疲れた感じの男性を保育園で見飽きたせいだろうか。5人兄妹のど真ん中で逞しく育つたせいだろうか。自分でもかなり恋愛願望や結婚願望が薄いのは自覚している。

ここ数年は彼氏もいないが、毎回別れる理由は大抵一緒。

君は僕がいなくて生きていけるんだね。

18才で実家を出て1人暮らし暦10年。

大抵の事は自分ひとりで何とかなるし、薄給1人暮らしのおかげで、自炊の腕もそれなりにある。

性格はサバサバしていて、外見は目立つほどの美女ではないが、別に悪くも無い。

子供は好きだし、自分の下の兄弟が年の離れた双子のせいで、面倒見も悪くない方だと思つ。いや、その前に面倒見の悪い人はこの仕事は無理だし。

でも最終的には、保育士という肩書きに男が抱く幻想と、自分の事は基本的にお互い自分で思つてゐる私の性格と、ギャップが大きくなつて別れていく。

結局、自分の面倒を見てくれる結婚相手を探してるだけだろー！

そんな結婚願望の強い草食系男子とのやり取りに疲れて、ここ数年は気楽な独り身生活を楽しんでいたのに、この仕打ち。ちょっと、頼むよ神様。

だんだん視界がぼやけてくる。

大きく視界が揺れたのは、天を仰ぐようにして枯れ木にからめ取られていた車体が重さに耐えられなくなつたせいだろうか。

まるで万華鏡のように、何重にも見える月と星とガラスの煌きの中、やけにはつきり左右対称の三日月が並んでるの感じながら、橙子の意識は闇に沈んだ。

さむ・・・今何時？

寒氣で目を覚ますと、見慣れた淡いベージュ色の運転席が目に入れる。

先ほどまでの情景を思い出し、飛び起きた。
あわてて体を起こして顔を触つても、もちろん出血なんてしていない。

鏡を見ても、平和そうにバックミラーについた子猫のマスコットがゆれている。ぐーぱーと掌を握つてみると異常なし。

嫌につつかれる夢見たぞ、おい。

盛大にため息をついてハンドルに顔をつづめた。

昔からコタツとホットカーべット、車の運転席で仮眠を取ると夢見が悪いとわかっているのに、うどうとしたらしい。あやうく三十路目前での世行きするところだった。

確かに麻衣子の様子は最近尋常じゃないから、不安が夢に出たのか？夢のお告げか？ストーカーの拳銃殺されないよう気をつけよう。

ハンドルから顔を上げると、汚れてはいるがビビー一つ入つていなイフロントガラスの向こうに薄闇が広がっている。

今日は保育園の運動会の練習でいつもより疲れてるから、駐車場で寝てしまったのかな。

田舎は田舎なりに都会と違つた物騒な事件がある。最近この辺でも変な事件があるから気をつけないと。

気を取り直して、何か夕飯は元氣の出るもん作ろ。

頭を軽く振つて、ひとしきり冷蔵庫の中を思い出す。お気に入りのホウレン草のペネンがあるから、揚げナスのトマトソースでも作ろうか。それとも豚肉とそら豆の中華風炒めもいいかもしない。火をつけてない煙草を口にくわえて、運転席のドアを開け一歩踏み出した。

ちよつと、iji・・・ビijo?

四隅どころか天井もかすんで見渡せないぐらい、広く薄暗いホールのど真ん中に立ちすくむ。スニーカーの下は砂利と草でなく、タイルの感覚。薄暗いアパートの光と思ったものは、宙に浮かぶ幾つものランタンで、まるで螢の光のように柔らかい光をまといながら、どうこう仕組みかゆつくりと動いている。

思わず口から煙草が落ちたが、氣にも留めてられない。

天井まで届く優美な曲線を描く窓からは一條の月の光が差し込んで、壁一面にびっしりと埋つていてる年代ものの本達を照らしている。間違つても保育園の駐車場でも、アパートの駐車場でもない。そもそも日本であるかすら怪しい景色が広がっている。

その前に、何故屋内。

運転席の扉にかけた手に、我知らず力をこめる。そうしないと車

がどこかに消えて無くなってしまった気がしたのだ。海外の美術館でしかお目にかかる事の無いような大理石の石像が、少し離れて自動車を中心ぐるりと囲んでいる。

こんなに幻想的で美しい風景を見たことが無い。けれども真夜中の美術館と言うよりは、真夜中の博物館といつほうが相応しいと感じるのは、何故だらう。

「ハ、ビ」。

思わず、車内から出でいた半身をもう一度運転席に戻す。

おひつけ、おひつけ、おひつけ。

もはや何が夢なのか判らなくなってきたが、パニックして良い事なんて何一つ無い。

深呼吸一つして、基本中の基本、自分の名を思い出す。次に体のどこにも異常が無いことを確認。ちょっと倦怠感とお腹がすいてるぐらいか？記憶・肉体異常なし。

ちょっと考えてから、いつも助手席においてある通勤バッグに手を伸ばし、携帯電話を探す。小気味の良い音を立てて開いた画面の上には、案の定圏外のマーク。

車内の後部座席を見渡し、自分一人である事を確認して、車内をロックする。

これで少なくともこの車内だけは自分の知っている日常になった。カーナビもチェックしてみたいし、ライトもつけてみたいが、大

きい音を立てたくない。夢であったとしても、無意識の警戒心からエンジンをかけるのを最後にしようと決意する。

落ち着く為に、取りあえず一服しよう。

呆然としたまま、味もわからないスポーツ飲料を口に含むと、それでも少しばかり落ち着いたようだ。
さて、田を凝らして車外の様子を見ると、依然として様子が変わったようには感じられない。ビーするよ、私。

えーと、とりあえず五体満足で、早急に身の危険もなさそう。

新人の保育士は、子供のケガを田の当たりにしてパニックする時がある。そくならないように必ず教えておくのが「まずそれ以上ケガをしないような状況であるかを確認」「周りの状況が危なくない場所なら、今度は本人の状態を確認」「いつ・どこで・誰が・何をしたか等の5W1Hをしつかり把握」とにもかくにも、「二次被害を防ぐ」「むやみに騒がない」等の基本事項だ。

無意識に自分でもそれになぞらえて動く。経験は大事だ。
もう一度力バンをあさって携帯をみると、外に月が出てるのに時計は昼間の3時半。車ごと海外にでも持つていかれたのか?誘拐説を出してみる。

無理やり現実っぽい答えを捻出するが、すぐにそれは打消された。何故なら携帯の日付が金曜日のままなのだ。今日の昼間の3時半には運動会の練習の片付けをしていたはず。

- 1 . 記憶が間違っている。
- 2 . 携帯を誰かがいじった。
- 3 . 現実ではない。夢！

・・・取りあえず、希望としては3番。田が覚めたら布団の上にいて欲しい。

そうしてしばらく悶々と考えていたが、一向に田が覚める気配がない。

携帯の事は一旦置いといて、車内から得られる他の情報は無いもんかと外を見渡すと、先ほども見えた大理石の像の足元にガラクタの山が見えた。

もしかしたら、別にガラクタじゃないのかもしれないけれど、こから見るとまるでフリーマーケットの様に色々な物が並んでいる。しかし、2・0の視力があつたところでは、こんなに薄暗くちゃ碌に見えやしない。

意を決して外に出てみようか。

警戒心と、少しばかりの恐怖心を押さえ込み、決意する。待つていても何も起きないなら行動するしかない。車の中をがさごささて、武器になりそうなもの、役に立ちそうなものを通勤バッグに突っ込む。元々色々入ってるせいで、なんだかこれで殴ればそれだけ武器になりそうだ。もう一度ぐるりと車内を見渡す。

うん、車内で出来る事はすべてやった。

車の鍵にじゅうじゅうついているキー ホルダーの一つ、ミニマライトを点燈させて、そつと車外に足を滑り出した。

床に先ほど転がした煙草を回収し、足音を殺して前方に見えたガラクタの山に向かう。

・・・何か悪い事してるみたい。

後ろにまとめた長い髪、オフホワイトのカットソーにジャージ素材の紺のパンツ。足元にはスニーカー。動きやすさ重視の格好が幸いした。何かあつたらダッシュで逃げよう。

いつそこのホールが普通に明るかつたら、声でも張り上げて人を呼んでみるもの、暗くて誰もいないといつこの状況が、否が応でもドロボウ気分してくれる。

時間をかけながら近くによつて見ると、どうやらガラクタの山は肉厚の絨毯の上に並べられているらしい。

らしいというのは、一体何の関連があるのかと突つ込みたくなる品々が、絨毯の所狭しと並べられているからだ。

蓋を閉めたグランドピアノの横に博多人形のケース
その横には籠でできたカゴ
招き猫の前にネイルアートをほどこしたネイルチップがおいてある。

こつちは日の丸マークのはちまき。
人を殴り殺せそうなサイズの大昔の電卓。
他にも鍵束だの虫眼鏡だの。
スワロフスキービーズで作った世界で一番有名なネズミのキャラクターの横に、昔の電車の切符切りと国鉄時代の切符。

本物と思われる豪奢なネックレスがアヒルのおまると並んでるのは、どんなセンスだ。

昔海外旅行でみたガラクタ蚤市でも、もう少しマシだった気がする。

適正な場所に収められていれば価値のある物も、こう無秩序に集められると壊れてなくともガラクタに見えるんだから不思議だ。

ライトの届かないピアノの奥にももつとありそうだけど、絨毯に乗せきれなかつたらしい、猫足のビロード張りのソファーが邪魔で光が奥に届かない。

天井に無数にある星空のようなランタンは、真の暗闇にしない為だけのじくじく弱い光源で淡く光っているだけだ。

ソファーの上にちよこんと乗つていて、洋服を着た可愛らしい猫のぬいぐるみと黒い剣を退せば、奥に何が置いてあるか見えるけれど、そこまでしなくても対した物は無さそう。

しかしどんなにガラクタに見えても、目の前のものは馴染みのあるものである。

それに比べてこの建物は、何なんだ。窓から円は一つも見えるし、5階分は在るうかという、ぶち抜きのホールの壁・・・といふか本棚を独りでに梯子が滑つていく。

宙に浮くランタンはゆつくりと動きながら、時々隣のランタンとぶつかり、鈴のような綺麗な音を立てる。

あの大理石の像の間を通りた時は、実は動き出すんじゃないかなと本気で身構えてしまった。

さつき見た悪夢が現実で、ここはあの世の入り口なの？

心の中に浮かぶ煙のよつだつた疑惑が、ゆづくじと形を成していく。

でもそれにしては、おかしそうである。これではまるで、受験に遅刻しそうになつて会場の裏口から入つたら迷子になつた生徒のよう。間違えて創立記念日に学校来てしまつた感じのよつな、何とも言えない所在の無さのほうが近いかもしれない。

それに普通あの世つてこのまゝ単身で来るんじゃないの？車と共にあの世つてどーよ。

もし死ぬときに持つているものと一緒に来るなら、次に死ぬときに役に立ちそうなもん握り締めて死のつ。

変な決意をしながら、無意識に手に持つていた車のワイヤレスキーのボタンを押す。

軽やかな電子音と共にヘッドライトとテールランプが点滅し、鍵がかかつた。

「今のは何ですか？」

「うおー！」

いきなり背後から声がかけられ、[冗談抜きに飛び上がる。

が、慌てて振り向いても誰もいない。

相変わらず薄闇の中、ガラクタがお行儀良く並んでいるだけ。ホラーは苦手なんだよー？」

「誰ー？」

「体の具合は如何ですか？大分回復したようですが・・・」

もう一度声がかかる。どうやら、どれらく私好みの低いバリトンの声がするのは、ソファーにおいて可愛い猫のヌイグルミから。なんだマイクとカメラでも仕込んであるのか？この猫ちゃん。

「申し訳ありませんが、姿を見せてください。隠れている方の質問には答えられません！」

声を張り上げながら、しゃがみこんで素早く椅子の下に配線が走つていなか見る。見当たらない。今流行りのワイヤレスか？

「・・・先ほどからずっと田の前にいるのですが・・・」

少し苦笑したような声と共に、四つん這いになつて私の目の前で

なんとヌイグルミが立ち上がった。

きれいな薄茶の縞の毛並みの上に、茶色いベストに大きめの黒いズボン。赤茶のブーツと同色のマントを翻し、一本足で椅子からおりた猫は優雅にお辞儀をした。

「初めてお目にかかります、私はレジデ・スタウト。いじはファンデール魔術学院所属の【時の館】です」

向かい合つて立つても、胸の所位までしか背丈はないが、椅子に座つてた時に思ったより、ずっと大きく見える。

ロボットが動いているのではない、知性を宿した目と低いバリト

ンの声は、その可愛らしさと外見と結びつかない。はつやつと言えば、声優ミス。

色々あつすきて最早脳がついてないらしい。聞いてる」と
がまつたく頭に入つてこなかつたが

「あの・・・」

戸惑いつぶつに小首をかしげる姿にあわてて、姿勢を正す。

「すみません、色々混乱していく・・・」

混乱しているなんてもんじやない。夢であつたが無からつが、「魔法」なんていう単語が出て喜べるのは、中高生までじやないのか?
?小学生までか?

少なくとも、もつこれ以上自分の知らないものを見たくない気持ちでいっぱいだつたし、この声じやなれば、この可愛らしい物体を抱き上げてガクガク揺すぶつていたに違ひない。途方に暮れるつてこののは、こういう事なのかと心の底から思つ。

「大丈夫ですか?」

少し心配そうな琥珀の瞳と見詰め合つ。ぱたんぱたんと柔らかな尻尾が揺れている。

つまりここには夢の中か異世界か。夢だとしたら、それの崖から突き落とされる夢と、どちらがマシ?

その瞳に警戒の色は見えなかつたが、ぴんと張られたヒゲ、尻尾の動きから実家の猫を思い出す。どうやら私は彼に緊張を持つて観察されていたらしく。

「何故あのような大怪我を?」

わわやくよつて問われた言葉が、静けさを何とか保つていた精神

の水面に落とされた、小さな石になる。立てられた波がゆっくりと体中に駆け巡り、消えてゆく。

それは一つの確信。

「ここは異世界で、怪我と車を、あなたに治して貰つたんですね

そう。これは現実だ。

どんなに不可思議、不条理であるいつも現実ならば、待つていても何も進まない。

幸い言葉が通じる相手が目の前にいる。それが一足歩行をする猫のヌイグルミだとしても、充分ありがたい。

園児の方が考えようによつてはよつぽど宇宙人みたいなものだし。

「私の名前は葉山橙子^{ハヤマトコ}、車で事故にあって崖から落ちました。」

レジデは『くるま・・』と少しづれたイントネーションで復唱しながら、車を振り返る。

声というのは不思議でどんなに可愛らしい外見をしていても、この落ち着いた声をしている猫ちゃんを、外見通りに扱うことを良しとしない雰囲気を与えてくれる。

そしてそれは私を落ち着かせ、必要以上に取り乱す事を許さない。

「随分長い名前ですね・・・ファヤマト?」

それでもチヨコンと首をかしげる仕草は凄まじく可愛らしく。

「トウコです。トウコ」

「トウコ。トウコ。トウコ」

何度か練習をしてくる。簡単な名前だと想うんだけどな・・・

「トウコ、車というのはあの乗り物のことですよね」

車を指差すレジデに頷きながら、その幾分改まった声に無意識に腹に力をこめる。何を言われてもいいよつて。

「私達がトウコを見つけたとき、トウコは仮死状態でした。逆を言えば仮死状態だからトウコはこひらの世界にクルマと召還されて

しましたのです。」

彼の話をまとめると「アーティスト」と「アーチー」。

テツラと呼ばれる異世界がある。

誰も行った事の無い、こちらの世界とまったく文明の異なる世界。テツラの落し物は「世界のカケラ」と呼ばれ、いつ・どこで、どのように現れるかはわかつていなが、その歴史は古い。

すべての「カケラ」は世界中に散らばる魔術ギルドを使い魔術学院に集め、この時の館に納められる。あまりに違う文明の技術はこちらの世界のバランスを崩してしまいかねないからだ。

しかし集めたカケラが呼び水になつたのか、ある時、この時の館で「カケラ」の召還に成功してしまつ。ただ落ちてくるのを待つのではなく、目的のものをこちらの世界に引き寄せる「召還」。

もちろん無尽蔵に呼び出せるわけでは無い。制約はある。

召還が成功する日は数年に一度、最もテツラとこちらの世界が近くなると言われている日のみだし、命あるものは小鳥一匹たりとも召還できない。基本的に無機物のみ。

他に、強くイメージできない物も召還できない。

こちらの世界の石を見て、非常に似た色形の石を召還することは出来ても「こちらの世界に無い宝石」等、抽象的なものは召還は出来ない。イメージがつかないからだ。

逆に言えば「世界のカケラ」と同じものを召還する事は出来るらしい。田の前にあるものと同じものをイメージすればいいわけだから。

そして彼は自動車を召還した。

「でも車は「ひびき」の世界に無いんでしょ？おかしくありませんか。」

レジデは田の動きで同意する。

「テッラには非常に写実的な絵画の技術がありますよね。」

ベルトにつけた赤い皮のポシェットを「そ」と探すと、目の前に一枚の薄汚れたパンフレットを差し出した。あちこち切れてしまが、数年前に発売された私の乗ってる車のパンフレットだ。

おしゃれな街中を背景に、滲刺とした女性タレントが運転する薄い藤色のタウンカーが写っている。裏は運転席の写真やスペックなど。

もう中古で買つて5年になる車のパンフレットを見るとは思わなかつた。

「私は今回初めて、カケラから情報を得たうえで、新たな種類のカケラを召還することを試したのです」

確かにこの写真を見れば、イメージはつきやすいだらう。つまりこの車種を召還しようとして、私は偶然巻き込まれてしまったわけ？

「偶然といえば偶然ですが、何かお気づきになりませんか？」

覗き込んでしつぽで写真をしめす。具体的には車ではなく女性の部分を

「・・・・もしかして・・・似てる？」

全体的な雰囲気と何よりもその服装。

ゆるくウェーブのかかった長い髪を一つにまとめ、当時流行の白いカツターシャツに紺のパンツ姿。野菜や林檎が覗いているクリー

ム色のエコバッグを助手席に置き、健康そうに笑う写真。イメージは郊外のオシャレタウンに住む女性、子供が幼稚園に行つてゐる間にちょっとしたお買い物、あたりだらうか。いかにも女性向の広告だ。

それに対して今日の自分の格好は、オフホワイトのカットソーに使い古しの紺のパンツ、握り締めているのは、いつも助手席にしている淡いベージュの通勤カバン。

もちろん長い髪は邪魔にならないように、いつでも一つに結わいでる。

「トーローが選ばれたのは偶然であり、必然だったのだと思ひます
なんてこつたい。

「じゃあ、魔王がいてお姫様をわらって、異世界から勇者を呼び出すんだー！みたいな王道パターンじゃないわけね」

思わずつぶやいた咳きに、レジデがマオウとふきだす。

「や、だつてここまでなんか魔法とか王道異世界！だから、もういつそそんな感じなのかと・・・」

段々声が小さくなる。なんだか無性に恥ずかしい。2人の間にあつた緊張感がいつの間にか吹き飛ばされる。

「トーゴの世界には魔法が無いんですね。そして多分私のような獣人族もいないのでしょうか？」

相変わらず丁寧な言葉遣いだけまだ微妙に声が笑つてる。

そりゃー可愛い猫のヌイグルミだと思つてたのが、いきなり立ち上がつたら腰もぬかすわよ。

まあでも取りあえず、自分が何故ここにいるのかがわかつただけでも、地に足が着いた感じでずつと落ち着ける。

「こっちの世界だと魔法で仮死状態の傷も直せるんですか？」

今更ながら、自分と車の傷がすっぱり治つてしまつたことが気になつた。もしかして死んでも生き返られる世界なのかな？

そして王様に死んでしまうとは情けないとか言われたり？

「いいえ。魔法というのはそこまで万能じゃありません。トーゴが助かつたのはこの館だからです」

長くなりますがからと促されて先ほどのソファーに座ると、大雑把な説明になりますが前置きしてから猫の先生はこの世界の魔法について話始めた。

「こちらの世界には火・水・風・土の4大魔法と、4大魔法を補助する役割の時魔法の5つの魔法があります。基本的に魔法は自然

から逸脱したことは出来ません。」

例えば、と腰につけたポシェットのような皮袋から小さな平べつたい石を取り出して、右手の指輪とぶつけと、指輪の上で小さな火の玉が揺らめいた。

「小さい火種にいる火精に頼んで自在に火力を変える事は出来ますが、何も無い空中に火の玉を出すことは出来ません。」

小さくなにか唱えるごとに、その火は色々な形にダンスする。こちらからは良く見えないが、小さく何か文様の書いてあるおはじきの様な石は魔法加工をしてある火打石らしい。

あれオイル要らずのライターになりそう。究極のエコ。

「他にも農作物の為に土を改善したり、山に道を作ったり等魔法は人々の生活に無くてはならないものですが、このように万能ではないです。たとえば軽く指を切つてしまつた場合、放つておいても治りますが、そこに時魔法を使つと治りが早くなります。」

い、意外としょぼい？

魔法つて言うのはもつと劇的に病気が治つたり、竜とか倒しちゃつたりするものじゃないの？

「瞬時で治しきつちゃうことつて出来ないんですか？」

「出来ますよ。それは魔術師のさじ加減ですね。局地的に時間を進める感覚でしようか。」

どんな感覚だか全くわからないけど、なんとなーく言いたい事はわかる。

「逆に言えば通常だつたら自己回復能力で治せない怪我・・・そ�ですね、腱や筋を切つてしまつた場合の治療は、時間を逆行させて元の状態に戻すので、かなり大掛かりになります。何人も魔術師がついたり、治療院の様に魔方陣をあらかじめ組み込んでおいた場所で治療をします。」

つまり死んでたのが生き返る~とか、腕を切られてもその場で魔法一つで戻つてるとか、そういうスペシャルなことはないのね。

放つておけば死んでしまう怪我でも、医療施設の整つている所で手術すれば助かることがあるのと同じ感覚なのかな。

「そして今トーコーがいる時の館は、時間をコントロールするという意味では世界で一番重厚な結界が張られています。王室付きの治療院でしか使えないような治療魔法をトーコーに使うことが出来たはこの館だからです。」

話しながら羊皮紙の上に、筆記体のような文字をぐるっと円状に書き始める。そして古びた皮紐を羊皮紙の中央に置くと、先ほどの文字を指でなぞるように一周した。

するとセピア色の文字がとろりと溶けるように中央に集まり、皮紐の下で淡く消える。

残されたのは、先ほど飴色に古ぼけた柔らかな皮紐でなく、まだ硬いなめしたばかりの皮紐。

すごいぞ~これ。壊したものだけでなく、アンチエイジングとかそっちに活用できないものだろうか。

思わず拍手すると、ちょっと新しくし過ぎました、と笑って皮紐をポーチに戻した。どうやらポーチの口を閉めていた皮紐らしい。

「この館の結界内だと結界の外よりもずっと簡単に物質の状態をコントロールできるのですが、それでもトーコーの状態はかなり悪かつたので・・・実はまだ治療は終わっていません。」

医者の脅しも怖いが、魔術師の脅しもちょっと怖い。

「自覚症状は無いんですが、もしかして副作用で老けるとか、あとから凄い痛みが出るとかですか。」

なまじ痛みの記憶が生々しくある分、それは勘弁して欲しい。思

い出してぶるりと体を震わせる。

「いやいや、そんなことはありませんよ」

田をまん丸に見開いて慌てて否定してくれる。ほっとしたのも束

の間

「ただこの館を出ると死ぬだけです。」

・・・それ、軟禁とか監禁って言いません?

殺されかけて、異世界に飛ばされて、次は死にたくなればこの館から出るなつて、人生最悪の局面にいることは間違いないらしい。疑問を持たず受け入れられるほど幼く無く、権利を振りかざすほど若くも無い。かといって、絶望するほど歳もとつていなかつたのは幸いした。

「終わってない・・・終わることがあるんですね?で、終わつたら「」を出る」とは可能ですよね。」

前向きとは財産と思おつ。

確かにいつまでも見ていたくなるくらい、綺麗な館だ。極上の景色だけれど、でもそれとこれは違う。

「今急に結界の外に出るとあなたの体がこの世界の時間になじめず、リバウンド・・・元の仮死状態に戻る可能性が高いです。少なくともこの中で3ヶ月、確定を求めるなら一年間はここで生活をした方がいい。」

い――ち――ね――ん――・・・

思わず座っていたソファーに沈み込む。

広大と思われるこの館から長期間出られないかもしけないという事より、向こうの世界に一年も戻れなかつたら、完全に仕事ないであらう事実にショックを受ける。30才目前で無職は痛い。

「3ヶ月と1年つて大分違うんですけど・・・」

腹の中で貯金の残高を計算し始める。

職場に未練はあるが、流石に職場の関係で起きた事件で殺されかけたわけだし、命と引き換えに殉じたいわけではない。

それにしても下手すりや一年。

この間更新したばかりだし、家賃は振込みだから住むところは大丈夫だろう。でもいきなり仕事場に行かなくなつた場合は失業保険おいるのか？

呆然としている間にレジデはどこから取り出したのか、そばにあつた台の上でお茶の準備を始める。

「トーゴの世界では瀕死の状態から日常生活に戻すまでに、一瞬で治りますか？」

んなわきやない。

気分が落ち着きますよ、ヒレモンのようなさわやかな香りのするお茶を目の前に差し出される。薄い水色の暖かなお茶を口に含むと、意外なことにコーヒーのような味がした。

「私の世界では魔法がない分、外科的な手術や医療が進んでいるけれど・・・言われてみれば多分リハビリも含めてだいぶかかりますね」

向こうの世界で奇跡的に救出され、一命を取り留めたとしても後遺症もなくここまで体が動くようになるとは限らない。そう思えば、瀕死の状態でこちらに来た事、そして早い段階で痛みの自覚症状がない位まで治してもらえたのは、行幸とも言えなくない。

「3ヶ月間は入院期間、それ以降は外の生活になれる期間と考えればきっと長くないと思います。何せここを出たらトーゴはこちらの世界の言葉が全くわからない状態ですし」

「え？」

今なんかさらっと凄いこと言わなかつた？

「今トーコと私が意思疎通できているのは、この館の魔方陣の力を使つてこます。おそらく外に出たら言葉が通じないかと……」

ソフナーに沈没、2回目。

色々なショックを受けたが、すぐに帰れない」とよりも精神的にはこれが一番重いかもしれない。

「つまり……その期間に一から言語を覚えないといけないわけですか……？」

私の英語の成績は思い出したくもない。

今、ホンヤクコンニャク的な何かで意思疎通が出来てるんじゃないのか。

辞書も参考書もないこの世界の言語を日常生活程度習得するというのは、想像を絶する困難だらう。

「3ヶ月たつたら館の外に出ないで、直接元の世界に戻るといふのは出来ないんだと思う。答えを聞く前から3ヶ月で戻れないであろうという事はうつすら覚悟していた。

けれども

「召還する」とはあっても戻すこととは今まで歴史上一度も試したこと�이ありません。それにトーコも仮死状態であちらの世界に戻りたいとは思わないでしょう。」

それまでよどみなく答えていたレジーテが、少し辛そうな顔で、それでもはつきりと答えた。

「戻れないんですか」

意味を理解するのに、時間がかかった。

気がつけば、聞くと言つより、言葉が口からこぼれ出していた。

「試したことがないと言う事は、可能性があると言つ事です。」「いたわるような温かな声が心の上をすべる。

気がつけば手足が氷のように冷たい。

体の中央にブラックホールが現れたように、何かが吸い込まれる感覚がする。その代わりのように、意識の隅に追いやっていた、般若のような女の顔がフラッシュバックする。

脳裏に浮かぶのは、家族の笑顔。

「私も元の世界に戻れるよう最大限模索します。」「
ぼてぼてと近寄ってきて、うつむいた私の背中をなでた。
何故だかその毛並みが揺らいで見える。

天空でランプのぶつかる音がまるで星の降る音に聞こえる。
死体が見つかって家族を泣かせるより、ストーカー被害から逃げていると思われたほうが幾分ましだろうか。背中に置かれた手が暖かい。

少なくとも私はここで生きている。

思わず目じりから落ちた一粒の涙が、大理石の床で跳ねるまでの永遠にも感じる時間、私はこの世界で生きていく覚悟を決めた。

星降る嘘の館 6 (前書き)

7 / 28 大幅修正しました。

3ヶ月の”じちりの世界を学ぼう！研修”がはじまった。

レジデは物腰柔らかで知性的。そして妙に寛げる癒しオーラの持ち主だった。

どことなくおつとりしていると言うか、几帳面なのにどこか抜けている所とかが、とても魅力的。

私自身がサバサバしそぎていて、こういう優しい雰囲気を持つ人に憧れるんだよね。落ち着いた低めの声で、もふもふの可愛らしい外見も慣れてみると、抱きしめたい位可愛い。

一度ぐらいぎゅーっと抱っこして、すりすりしてみたいぞ。・・・しないけどさ。

一度彼に年齢を尋ねた事があつたんだけど、今まであまり見たことのない、悪戯っぽい顔をして、暫くは内緒ですと返された。

「テッラには獣人族がまったくないので、きっと想像がつかないんですね。じゃあクイズにしましょう、私の年齢とその根拠を聞かせてください。」

正直、5歳と言われても500歳と言われても不思議じゃない外見なので、まったくわからない。根拠と言われても難しい。

一度、あまりの知識量に実は150歳くらい？と言つたら吹き出されたので、意外と常識的な年齢らしい。最近では実は私とあまり年が変わらないんじゃないかと思つてているけど、当てずっぽうでは教えてくれないらしい。うーん気になる。

彼は可愛らしい外見で、知識も話題も豊富。軟禁状態の私がストレスを感じないよう手を変え品を変え、じちりの世界の事を毎日面

白おかしく話してくれる。

まさに彼は講師役としてはうってつけの人材で、戦々恐々としていた語学も、思っていたよりずっと簡単に覚えることが出来た。

まあ語学に関して言えば、実は物凄い力技も使つてもらつたけど。語学を習得するのが難しい理由と言つのは、幾つか理由があるけれど、大きく分けると二つ。母国語にない文法ルールや発音があると言つことと、単語や熟語の定着に時間がかかると言つこと。この後者を魔法でサポートしてもらつたのだ。

英語で言つなら、通常はA B C D a b c dとアルファベットの練習からはじめ、何度も「りんご」が「アップル」で「apple」というスペルであることを頭に叩き込むわけだ。

その記憶の定着を魔法で強めてもらう事で、2000～3000の単語や熟語を一週間ほどで暗記することができた。ほんつと深い魔法ビバ。

ただ最初聞いた時は、そんな事が出来るなら語学なんて楽勝！と思つたんだけど、流石に聞き取りや発音、文法ルールはそんな力技はなく、辞書もない状態で手探りで勉強する事になった。考えたら英語だけ辞書を見て良いからと言われても、文章を簡単に作れるわけじゃないもんね。

それでも当初心配してたよりは、ずっと楽に語学習得出来たと思う。

外国語は英語しか知らないので、どこの国の言語に似ているとかはわからないけれど、文字は日本語の漢字よりはアルファベットに似ているし、発音の母音数もアイウエオの5つより3つも多い。

英語だと過去・現在・未来位だった変化形が、大過去・過去・小過去みたいに過去だけで3種類もあるのがわかつた時は泣きそうだったけど、習うより慣れる。まあ何となるだろ。

きっと記憶強化の魔法かけてもらえたから、自力で言語を覚えられず、野たれ死んでる自信があるなあ。

そんな中、なんとか2ヶ月もすると自動翻訳を使わなくても、大分日常会話をできるようになってきた。

簡単な世界地図のようなものを広げてもらつと、この言語で会話が出来るのは中央大陸と呼ばれる地域だけで、西と南の地域では言語が変わつて通じないと説明を受ける。

地図にはその名の通り、中央に大きな大陸が書いてあり、西と南に大小の三日月型の大陸が中央に向かつて書かれている。

良く見ると西と南の大陸の周りには星のようにならに小さな島々が書かれている。まるで満月と話している大小の三日月という子供の絵のような世界地図だ。

へ～おもしろい。

「それでも随分一つの言語が使用できるんですね。テッラでは200前後の国がありますが、言語は確かに1000以上に上る筈ですよ。」

随分旅行が楽そうだ。何気なく言つた言葉にレジテはシップを跳ね上げ驚いた。

「1000以上!？」

「ええ。例えば世界の公用語は英語ですが、たしか英語が母国語として教える国は10%位だったと思いますし、同じ国でも会話が成立しないことも多いですよ。私の住んでいる日本と言つ国は、すべての日本人が日本語を理解できる国でしたが、それでも地域によつては方言が強くてわからない単語も少しありますよ。」

こちらでは測量技術はそこまで進んでいないらしく、人々が移動する距離もずっと小さい。かといって生まれた土地から全く動けないほどではないらしい。

でも本来なら人間の移動する距離が小さければ小さいほど言語は独自性を持ち、バラバラになるんじゃないのかな。なんで殆ど中央大陸では同じ言語が通じるんだろう?

逆に彼は言語の多さにハテナが一杯らしい。

道具や話を聞く限り、機械文明という意味ではあまり発展していないみたいだけれども、魔法で補っている部分もあるだろ? から一概に中世ぐらいの文明レベルと判断するのはどうなのかと言つ気もする。

「取りあえず、トーハは西地域の出身と言つことにします。西大陸とは交流がそこまで盛んではないので、何かあつたら誤魔化せるでしょうし、南出身にしては肌が白すぎます。それでも正直トーハの出自は見る人が見たらおかしいとわかつてしましますから、もつ少し考えないといけませんね。」

どうしたつて田舎から出てきたおのぼりさん位にはなると思つけど、プロフィールを綿密に煮詰めなくてはいけないほど、こいつの世界の人から見たらずれてるんだろうか?

「言語以外にも、そんなに私不審者ですか?」

「中央大陸ではどんな田舎でも獣人族は普通に歩いていますし、魔法を使える人が少なくても魔法器具は日常的に皆使えますね。多分最初のうちトーハは驚くでしょうし、子供でも使える道具が使えないようでは悪目立ちはすると思います。」

へへ、皆が普通に魔法を使えるわけではないんだ。

「じゃあ適当に不審に見えないプロフィールを考えた方がいいんですね。」

何か誤魔化せそうなもの、あるかな?

色々職業を上げて見るけれど、片つ端から首を振られる。

「テツラでは小さい子供の教育に関係する仕事をしていたなんですが、そんな感じの職業は無いんですか？」

「教育だけを行う機関は一般的にはありません。一般的に小さい子供は、魔術、ギルドや商業、ギルドでスキルを磨きながら一般教養も教わるか、女の子なんかは宗教施設で礼拝の後に任意で公開授業に出る事もあります。あとは貴族階級になると家庭教師を専属で何人もつきますが・・・これは少し無理があると思います。」

たしかに職人にも魔法使いにも宗教関係者にも見えないだろうからなあ。貴族階級の家庭教師にしちゃ、一般常識の欠落は酷いだろうし・・・

ううむ。いつぞ記憶喪失で治療中の人とかの方が信憑性があるんじゃない？

あーだこーだ言つても結局結論は出ず、今後の課題となつた。

星降る時の館 7（前書き）

投稿ニスにより、星降る時の館6を大幅修正しました。

じちらの世界から帰れない事を除けば、私は非常に幸運だと思つ。怪我を治してもらった事だけでなく、本来なら唯一のテッラ人として監禁され観察されたつておかしくないわけで。
けれども彼は所属の魔術ギルドにも私の存在を隠して、ひつそりと日本に帰したいと思つてくれている。それは私を召還してしまった责任感からきているらしく、私の健康状態チェックやこれから的生活についても、私より色々悩んでくれていた。

小さい子供じゃないけれど、自分のことを心配してくれる存在というのは何よりありがたい。精神的に自分の居場所を確保してもらつている気がするし、押し隠していてもやつぱり心細さと言うのはある。けれども一緒に傍にいてくれる人がいるだけで、気持ちが大分安定するものだと初めて知つた。

私はどちらかといふと、べつたり人と一緒にいる事が苦手なタイプだから、傍にいてくれるとほつとする存在というのに、ちょっと吃驚もしている。

こんなタイプだから男と長続きしないんだけどね。

もう一つの幸運は、レジデがこちちらの世界でも有数のテッラの研究者だつたと言うこと。

彼の現在の仕事は、時の館に各地から転送されたカケラを分類することで、この仕事は1年毎に1人担当者が決まつてゐるらしい。時の館の結界の出入りは非常に厳重に管理されているらしく、基本的にその年の担当者しか出入り出来ないそうだ。

なので幸いな事に、私の存在は誰にも気づかれてないらしい。

今後の予定としては、体調が安定したらギルドに気づかれないよう

ちにレジデの家に移動。その後は鬼にも角にもひからいの生活に慣れてから考える事にした。

「問題はトーゴがここから出る時ですが、基本的に出入り口の魔方陣でチェックされるのは結界内への不正侵入と、結界からのカケラの持ち出しです。人の目にさえ触れなければ大丈夫だと思います。」

「私自身はカケラに該当しないと言つていいですか？」

「有機物だから？ だとしたらテツラから持つてきた物は下着一枚この結界の外に持つていけない事になるよね。」

「悪目立ちしないためには全部置いていくのが正しいんだろうけど、何一つ持ち出せないと言つのはちょっと寂しいものがある。」

「基本的にカケラはすべて各地から魔方陣で転送されてこの館に搬入されます。その時、結界にそのカケラが記録されますので、トーコと一緒に来た物はすべて未記録になります。逆に言えば入り口の魔方陣もクリア出来るはずです。」

「なんだか万引き防止のゲートみたい。」

「そうそう、あの最初に見たフリーマーケットのようなガラクタの山が、実は各地から送られてきた未整理の「カケラ」達だった。レジデはそれらを判別して、説明文を加え、本の中に閉じ込める。グランドピアノみたいな大きな物が何故本の中に納まるのかは、何度も見ても不思議だし、本にしたカケラが勝手に壁の本棚に滑り込むように飛んで入っていく姿も、蛍の様で美しい。私の乗ってきた車も本の中に閉じ込めてある。」

「大ホールに埋め尽くされている本、一冊一冊にカケラが入ってる」としたら、その量たるや膨大だ。

カケラは元の世界で言つ所の化石とか遺跡みたいな感覚じゃない

だらうか。

そう思つと、レジデはあれか？インティーなんたらジョーンズ博士みたいなもん？

脳裏でレジデの「スープラ姿を思い浮かべ、あまりの可愛さに必死に笑いをかみ殺す。

私につきつきりでレジデの仕事に差しさわりが出ないか心配したんだけど、この説明文を推測するのに通常は時間がかかるらしい。安全なものなのか、用途は何か、関連するものはないか等。それを私がかわりに説明文をつけるので、通常では考えられない速度で処理出来ていいそうだ。

なのでお世話になりっぱなしで申し訳ないという気持ちが、大分和らいた。

働くがざるもの食つべからずですよ。そしてもう一つしている私の仕事は、料理。

最初の内はレジデがご飯を作つてくれていたんだけれども、何と言つか・・・非常に独創的な味だつたので、一度食材を持つてきてもらつて作つてみてから、そのまま私の係りになつた。

野菜のえぐみを充分生かした、苦味たっぷりのリゾット風のものとか、オートミールつぼくて一口食べるとなんとも言えない、じらつ喉越しと、甘さの後からゅつくり感じる塩辛さとか、毎食食べるのに大分勇気のいる味は忘れられない。

ただ単に彼が非常に料理オーナーだつたとわかつて、ほんとーに、心底安心した。あの味がこちらの世界の標準味覚だつたら、一月もしないでダイエット完了しそうな味だつたぞ。

レジデが料理してるのは、ヌイグルミでおままでしてゐみたいで、すごーーーく可愛かつたんだけどね。今後とも是非食事は私を作らせて欲しい。

「トーノが来てくれてから、食生活の質が格段に上がりました。馴染みの無い食材を上手に調理できるのは、ある種の才能ですね。いつもとても美味しいです。」

食材がわからないので、簡単な調理方の物しか作つてないんだけどね。喜んで食べてくれるのはやっぱりうれしいもんだ。

「トーノは明日は何が食べたいですか？お勧めは臭みの無いホクホクとしたポンムという白身魚がそろそろ旬です。あとは小粒の貝は大丈夫ですか？」

帰り際に明日の献立の話をするのが、ここ最近の毎日の日課だ。

「美味しそうですね。もし魚にあうハーブがあれば、それもお願ひしていいですか。お塩は出来たら海の塩で。苦味の少ない旬の野菜・・・根菜ではなく甘みのありそうな果実系の野菜もあつたら嬉しいです。」

トマトやパプリカみたいな野菜があればアクアパッツァ風にしようかな。料理は勉強の合間の良い気分転換にもなる。

じゃあ明日は魚を持つてきますねと何処となく嬉しそうに尻尾を揺らす。やっぱり猫だからお魚好きなのかな。

そんな私の思考を打ち消すように、重厚な古時計の音が聞こえてきた。

「おや、もういい時間ですね。そろそろ今日は帰ります。」

時計を見ると青い針が10時をさしている。もうこんな時間だったのか。

今いるのは私が最初にいた大ホールではなく、窓の無い小さい書斎のような部屋。

小さいと言つても他の部屋と比べての話で、私のアパートの倍もの広さがある。

向かい合つて作業するのに充分なサイズの机や、ベッド代わりに

しているカウチなどを置いても全然狭く感じない。どちらかといふと、これ以上広いと私が逆に落ち着かないぐらいだ。

「それではトーロ、何かあつたらいつでも連絡くださいね。」
おやすみなさいと声をかけると、彼はにっこりと笑い壁にかけて
あるタペストリーの前で、淡く光るようにしていなくなつた。

メガネをはずし、うんと縮こまつっていた体を伸ばす。覚えることが山のようにあって、毎日レジデが帰る頃にはクタクタだ。

1人になった部屋に、コチコチと時計の音が部屋に響く。

こちらも一日が24時間で10進法を利用しているのは助かつた。重厚そうな古時計を見上げると、馴染みのある時計のカタチが見える。

ただ一つだけ違うのは、通常の時間で動く青い針以外に、4倍の早さで動く赤い針がもう一組み付いている事。

彼の説明だと、青いのが結界内の時間、赤いのが結界の外の時間を示しているそうだ。

つまりこの中で、まつたりと一日過ぐすと結界外では4日過ぎているらしい。

未だにどういう仕組みなんだか全くわからない。

何度も時の館は時間をコントロールする強固な結界がはつてありますと言われても、それがどういう事が今一理解しきれてないんだよね。

私にわかっているのは、こちらの世界でこんな大掛かりな時間変化を施した結界が張られているのは、この時の館だけだということ。そして、私は時の館で大掛かりな治療を受けた為、結界内の時間が標準時間として体に組み込まれているということ。

そして夜になるとレジデが結界内からいなくなるという事ぐらい。

こちらの時間の流れにずっと身を置いておくのは、彼にとつては辛いらしいので、私が寝ている間はこの広大な館に一人きりになる。

最初の頃は私が寝ていても彼がいたんだけれど、体に悪いという話を聞いてからはきちんと帰るようにお願いした。

最近では朝起きると、市場で仕入れて来た食べ物や私の洋服などを持つてきてくれて、市場であつた面白い話などを披露してくれる。一般常識の勉強にもなるし、一緒に朝ご飯を食べててくれる人がいるのは嬉しい。

私が寝ているだけであちらでは一日以上過ぎているんだから、彼も大変だろう。

ただ私も疲れきってはいるのに、いつも中々寝れない。

今までは毎日子供たちに囮まれて、夜一人になる時間は何よりも贅沢な至福の時間だつたけれども、今は一人の時間は正直苦痛だ。色々余計なことを考えそうになるから。

日中頭を使つてる割に、体を使つてないから変に目が冴えているんじゃないかと思い、最近ではレジデがいなくなつてから、大ホールを一人でランニングすることもある。
睡眠は大人の自己管理。

充分良くしてくれいる彼の手をこれ以上わざらわせたくないのでも、あまり寝れてないのは言つていない。まあその内何とかなるだろうと、私も深刻に考えてはいないせいもある。

それと最近、新しい娯楽を見つけた。最初に召還された大ホールにあるカケラの本だ。

文字の勉強にと思って読み始めたけれど、こちらの世界の研究者たちが本にしたカケラを読んでみると、思いの他笑える解釈が多い。たとえば昨日読んだ比較的新しい棚にあつた本の題名は『巨大スリゴギ』

発見された場所：ノイン峠

年月日：統一暦209年

推測される使用用途：

持ち手に土類の付着から、主に野外で使われると思われる巨大スリゴギ。

テツラに巨人族がいる説もあるが、非常に軽い金属なので巨人用ではないと考えられる。

形状は一見棍棒のようにも見えるが、武器ではなさそうだ。

軍隊の炊事部隊用か、精密な左右対称の作りなので薬草用なのかかもしれない。

スリゴギの横に呪文が施されている所からも、薬草を煎じるのに使うと思われる。

ハイコレ金属バット。巨人族ってなんだよー。こちにはいるのか！？と心で突っ込む。野球チームのロゴもこちらから見れば不思議な呪文に見えるらしい。他にもサイズや重さ、推測にいたるまでの経緯や発見されたときの状況などのレポートも事細かに書いてある。いやーまだね。

スポーツ関係の品物は推測が難しいらしく大概変な解説がしてあるし、他にも笑える解説は沢山ある。

今夜も笑える本でも読んで、頭を空っぽにしてから寝よう。
タオルケットとノートを引っつかみ、向こうから持ってきたステンレスの魔法瓶にお茶を入れて部屋を出る。

ホテルの隅のソファをガタガタと動かし壁際に向け、小さな机の上に持ってきたお茶を置く。壁に向けて2畳ほどの即席マイスペースが出来上がった。

どーも狭い所に慣れてる日本人なので、プラネタリウムに1人いるような空間を凄いとは思えても、落ち着かないんだよね。ああ庶民。

さて、今日はどのあたりを読もうかな。ぐるりと壁に埋め込まれた本棚の前を歩く。

じつくりカケラの本を読んでいると色々な事がわかつてくれる。面白いのも勿論だけれども、何か帰る為のヒントにならないかと思つてゐるのも本当だ。

気がついたことは忘れない、元から文字で日記にメモする。

どうやら私は書かないと覚えないタイプらしい。

例えば最近気がついた事だと、世界各国の品物がランダムにこちらの世界に飛ばされているのでは無いらしいと言う事。

ランダムにしてはあまりに日本のものが多くすぎるのだ。

もちろん海外の物も多く見られるけれども、日本なんて小さな島国のかケラは本来なら全体の数パーセントの筈なわけで、どう見積もつても多い。

他にもどうやら人工物、もしくは人為的に細工をされた物以外見当たらない。

こちらの世界に来ているけれど、カケラと気がつかれていないのか、それともこちらの世界に来ていないのでかは判らないけれど、基本的にここにあるものは皆人工物ばかり。

こんな事考えて帰るヒントになるかはわからないけど、何もしないよりは良いだろう。

昨日読んでいた棚の隣の棚からランダムに4~5冊本を取り出し、ソファに戻る。

何から読もうか。なんとなく笑いのエッセンスを感じ取り、銀板というタイトルの本を手元に寄せ、ソファにじろりと寝転がる。

そのまま本を開こうとして、目の端に違和感を感じ取った。

なんか、変。

軽く体を緊張させ、体を起こす。あたりを見渡しても、見知ったものばかり。

氣のせいかと、ふと目を上げるとこつもはゆっくり動いている星のよつたランタンが、息を潜めるかのように動きを止めている。

さっき来た時から止まつてたっけ？

思い出してみるが、自信が無い。

脳裏にレジデの顔が一瞬浮かぶ。

いやいや、ただランタンが動いてなかつたからって呼び出すのもおかしいか。子供じゃないんだし、と口に乗せてみるが、なんとなく居心地が悪くなる。

今夜は部屋に戻ろ。つ。

そう決意して、ソファから立ち上がったその瞬間、ひときわ高い鈴の音が鳴り響き

すべてのランタンから光が消えた。

いきなり襲われた暗闇に、本を持って立ちすくむ。いつもは星が降るような音が聞こえるホールに、甲高いアラームのような鈴の音が鳴り響き続ける。

何かあつたんだ。

どんな事かは判らないけれど、異常事態であるのは確かだ。レジデに連絡を取るためには書類に戻らねばならない。

すくんで強張った足を叱咤し、手探りでソファに本を下ろした。月明かりだけを頼りにホールの反対側にある扉を目指す。

ホールの一部は窓からの光がうつすら入るけれど、肝心の扉の周辺は闇が深い。こんなときに限って小型のペンライトを持っていいのが悔やまれる。

目を凝らしながらホールを走り抜けると一瞬、風を切るよつた音が聞こえた。

不思議に思う間もなく、強い衝撃と共に体が投げ出される。

「つ！」

勢い良く顔から落ちた所に、一気に腕を背中にねじりあげられる。みしりと音がして一瞬息が詰まった。

「動くな。」

私の耳元で低い男の声が聞こえた。

「どうやってこの結界内まで入つた。教団の者が？」

答えよつても捻りあげられた腕の痛みと、背中を押さえ込む力が強すぎて息もろくに出来ない。苦しさのあまり身じろぎするが、足すら自由に動かない現状にぞつとする。

首の傍に何かを突き刺すような衝撃を感じた。

「言え」

一体何が起きてるのか全く見当もつかない混乱の中、一つだけ確かのは向けられた殺氣は本物だ。

バックミラー越しに見えた女性の顔がフラッシュバックする。

どこまでも殺しに来るつもりなの。

車への衝撃、駆け上がる恐怖。一瞬、現状も忘れ記憶の海におぼれかける。

それを止めたのは苛立つたような男の声と押し付けられたタイルの感触。

何かを言われたが、完全に混乱している頭では、その言葉が意味を成さない。目を開けても広がるのは暗闇ばかり。

さらに腕を捻りあげられ思わず声が出る。強い耳鳴りがした。

「あ・・・・っ！」

あまりの苦しさに一瞬意識が遠のきかけた。

「女？」

ぽうっと音がして、光が見える。捻りあげられた腕の力が弱まり、背中を抑え込む力が緩むと一気に肺に空気が入つてくれた。むさぼるように息を吸い込み、咳き込む。

涙の向こうに黒い短剣を握り締めた大きな男の手が見えた。

昔レジテに見せてもらったように、男の指輪の上で火の玉が踊っている。

「トー ハー ハー ハー」

眦に溜まつた涙が、聞きなれた声とパタパタと走り寄つてくる声に安堵して滑り落ちる。

「フオリア！止めて下さい。彼女は違います！」

捻りあげられた腕が自由になると、全身の痛みから腕を抱えてそのまま床を転がる。

駆け寄ってきたレジデが、呪文を唱えて肩と顔に手を置くと徐々に痛みがさつていった。

大丈夫ですかと混乱したまま上半身を起こされれば、力が入らずそのままレジデの柔らかな体にすがりつく形になる。呆然としたまま目をやると、両足全体に鞭のような皮紐が絡まっていた。どうやらこのせいで転倒したらしい。

解こうと手を伸ばすと、先程の大きな手が遮つて解き始める。いつの間にか気がつけば、天井のランタンはいつものように淡い光を放ち、ゆっくりと動いていた。

視界が戻る事で、混乱しながらもようやく冷静になつてきた。太ももに絡みつく鞭を解く手の持ち主を見上げると、深い紺色の髪を持つ男と目が合つ。

「で、説明してくれるんだろうな。」

私から目をそらさず少し皮肉気な口調でレジデに問うこの男は、口元は笑っているが全く目が笑っていない。日本ではついぞお目にかかつたことの無い様な野性的な男の雰囲気に圧倒される。視線で人を殺せるなら、確実に今の私は瀕死状態だろう。

「わかりましたから、一度場所を移しましょう。彼女も混乱している。」

レジデが手をかして立ち上がらせてくれると、面白そうに男が片眉を上げた。

そのままいつもの書斎に戻ると促されてソファに座る。

「足は痛みますか？」

レジデは失礼と言つて、ソファの前に座り込みズボンの上から医

者の手つきで足首を触る。

「あ、大丈夫です。」

声はややかすれていけけれど、足首をくるくる回せて見せると、レジテはようやくほつとした顔をした。

タペストリーの前に置いた椅子が横倒しになつてるのは、どうやら急いで来た彼がぶつかって倒したらしい。

落ち着いてみると、鞭が強く絡んだ足の付け根の方が確かに痛むけど、歩けない程の事ではないから大丈夫だろう。

そう思っていた所にいきなり男の大きな手が乗る。

「あれだけ強く締まつたんだから平気なわけ無いだらう。」

言葉と共に軽く太ももを握られると、激痛で一瞬顔がゆがんだ。痛いって判つてゐるならわざわざ痛くするなよー。

思わず睨みつけると、気が強そだなと笑つてさらに手に力をこめる。けれどもさっきまでの激痛ではなく暖かな感触と共に痛みが引いていく。

「俺はフオリア、お嬢ちゃんの名前は？」

お嬢ちゃん！？

いくらなんでも28歳の女性に言つて台詞ではない。

この男本氣で言つてるのかとマジマジ見れば、意外なほど整つた

顔立ちだと気づく。

濃紺の髪に群青の瞳。細身でも鍛えられていくと判る肉体をシンプルな黒い服で包む。

夜と闇を体現したような男だ。

先ほどは造作なんて気にしてられなかつたけど、顔立ちの良い男が凄むと半端無い迫力だと初めて知つた。今は飄々とした体でこちらを覗き込んでいる。

「橙子です。それと残念ながらお嬢ちゃんと呼ばれる年齢ではあ

りません。」

若く見える東洋人とは言え、お肌の曲がり角を何回曲がったと思つてるんだ。

「大人に見られたいのは子供の証拠だが?」

上から目線の余裕のある発言にカチンと来る。

お前もかい。

「そうですか。こちらの世界では28歳が成人女性と扱われないなら、そうかもしませんね。」

成人女性よりやや喧嘩つ早いのは子供の証拠かもしれんけど。

「に・・・じゅうはち?」

案の定、呆然とした感で上から下まで見られる。何か言いたそうにレジデを見れば、レジデはレジデで明後日の方向を向いている。断つておぐが私は日本人女性として童顔な方ではまったく無い。けれども最初にレジデに年齢を言った時も、尻尾の先からひげの先までを使って驚きを表現してくれた。良くて18歳ぐらいに思われていたらしい。18つて10も若いぞ。

どうやら目の前の男性が証明してくれたが、こちらの人間は欧米系の顔立ちをしているらしい。もしかして東洋系の顔立ちの人間がないなら、これからずつとこの対応が続くんじゃないだろうか。だとしたら大分ゲンナリするぞ。

「ええ。どうぞよろしくお願ひいたしますフォリア。それと足の治療ありがとうございました。」

名前を強調するように正面にいる男を見つめて言つて、訳すと、治療終わつてます。

言い換えると、いつまで人の足触つてるんだ、このエロ男。

痛みは無くなつたとは言え、初対面の男にいつまでも太ももを鷲掴みにされているこの現状は好ましくない。距離が近いよ。距離が。その一言で硬直が解けたのか、ようやく足を放してもらえた。

「レジデ、色々聞きたい事はあるんだが、お嬢ちゃん……いや彼女は今”こちらの世界”と言ったか？」

耳ざといな。

「はい。お気付きの通り、彼女はテツラ人です。」

気を取り直したのか、倒れていた椅子をぽてぽて運んでフオリアに渡す。

椅子の背をこちら側に向けて跨るように座ると、夜色の男はようめくように言つた。

「もう何を聞いても驚かないから全部言え、全部。」

その様子に、幾つに見えたんだが逆にこっちが聞きたい気持ちになつた。

星降る時の館 9（後書き）

ようやく登場人物が増えました。
何故か書いても書いても長くなってしまう・・・長編病でしょうか。

句読点修正いたしました。

「ここ2ヶ月の話をフォリアに一通りすると、レジデは私に向かってこう言った。

「改めて紹介いたします、トーコ。彼はフォリア。非常に優秀な魔術師で、前回の時の館の担当者でもあります。そして魔術ギルド所属の者である前に、私の親友です。」

優秀と言われた部分で一瞬顔をしかめたその男は、最後の発言を聞くと呆れた様な顔をした。

「お前、まさかギルドにまで隠し通すつもりか？」

「どう考えてもトーコの事を考えると、秘密裏に事を運んだほうが良い。」

押し殺したような固い口調に、3人分のお茶を入れていた手が思わず止まる。

今のレジデの声だよね。いつもおつとりしているレジデからは想像出来ない、厳しい口調だ。

「ギルド上層部にも隠し通すつもりなら、生半可な事じゃないぞ。そもそも彼女は自分の立場を、一体どこまで把握してるんだ？」

目線で問われる。

「もし国家権力にトーコの存在を認識されれば、一生監視の目が光つてもおかしくない、人権を無視されるであろう事位までは認識しています。」

これは以前レジデと話し合ったことがあった。

例えば元の世界だったとして、過去の人間を突然召還する事が出来たらどうするか。

先進国だったとしても人権は保障されず、保護と言ひ切るの監禁、

ありとあらゆる生態調査を受けるのは確実だと思つ。

それと同時に過去の人間が何故こちらに来られたのか、今後も可能なのか、様々な検証をなされ、出来るのならば他の人物も召還しようとするだろう。

その人間がどんな平凡な人間であつたとしても、そんな常識を超える事が出来るのであれば人の関心を惹きつけずにはいられない。こちらの世界から見て、私の存在はそんな様なものだらう。

しかし

「それだけか？」

ため息と共に吐き出された言葉に、レジ「テ」が一瞬言葉に詰まつた。どういう事？

テーブルにお茶を置きながら2人に目線で問いかける。躊躇している様なレジ「テ」に対して、フォリアは強い双眸でこちらを見つめ返す。

「トーロ、だつたよな。子供じゃないなら自分の事だ、状況を把握しておけ。」

促されて一人の正面に座る。どうやら今夜は長そうだ。

「つまり現状はもっと難しい状況なんですね。」

少し重苦しくなった部屋に、深夜1時になつた事を知らせる鐘が静かに響いた。

「テツラから来たカケラが、この館に世界中から集められているのは聞いただろう。では何故ここまで強固な結界を張つて隔離しているかは聞いたか？」

男が問うた。

「違う世界の文化が、こちらの世界のバランスを崩してしまつのを防ぐ為に集めているんですよね。わざわざ時間をコントロールする結界を張っているのは、カケラの研究の為に経年劣化を防いで保存するため・・・ですか。」

言いながら少し違和感を覚える。

「時の館に集めている理由は確かにそうだな。しかし隔離している理由は違う。通常の人間はカケラを怖れているからだ。」

カケラが怖い？

一番最初に見たガラクタの山のようなカケラを思い出す。アヒルのおまるや虫メガネ、ビーズに電卓、古ぼけた鍵。他にもここ数日読み漁つていた本を思い出すが、有害そうな物なんて見当たらなかつたぞ。

それとも無害な物でもこちらにあると何か人体に有害になるのだろうか。

もしそうだとしたら、わざわざ世界中から集めて管理保管まではなくとも、人が入らない所に隔離したり処分すれば良いだろうに。

「人が怖れるとしたら、カケラ自体が生活や人に何かしらの害を与えるという事ですよね。」

けれどもカケラが日常的に生活を脅かすのなら、カケラを閉じ込めた本にその記述が全く無いのはおかしい気がする。ここ暫くで読んだ本の量はそこまで少くない。それでも何か有害なガスが出るとか、このカケラを触ると体調不良になる等の記述は一切見なかつた。暫く考えて、発想が逆なのかも知れないと気付く。カケラが危険なんじゃなくて、何か危険物や有害物がこちらの世界に来たんじやないのだろうか。

「もしかして過去にこちらの世界を震撼させるほど、危険なカケラが見つかったんじゃないですか。」

こちらを見ていた2人の雰囲気が変わったのが判る。

博多人形、日の丸、国鉄、招き猫・・・古ぼけたカケラ達。レジデは大昔からカケラは見つかっていると言つた。

だとしたら

「・・・50年前から100年前位の間に、何か大きな事件はありませんでしたか。」

世界大戦の影響が無いとは思えない。

「正解だ。」

フォリアは大きく息を吐くと天を仰いだ。

一番最初にソレが現れたのは100年近く前、大陸の北山に囲まれた雪国シユルステイン王国。

まったく火精がない雪が静かに降り積もる山間で、いきなり天を搖るがす大きな爆音と火炎が巻き起こつた。山はえぐれ形が変わり、その衝撃でおきた大雪崩により山間の村が2つ壊滅。死者は300人以上にのぼつた。

これを皮切りに、各地で死者が出るような力ケラが発見され始める。

西の森ではシユルステイン王国の様に火炎による被害だけでなく、火を鎮めた後も次々と木々が枯れ水は腐り、精靈も寄り付かない文字通りの死の土地に変貌した。

「被害にあつた地域では暫くの間精靈達が混乱して、正常に魔法器具が使えなくなつたと言われている。明かりの調節を出来るランタン、堅い岩盤を掘りやすくする掘削用の魔法器具、出血を抑える処置を施してある魔術用の布。簡単な魔術器具は日常世界活に溢れ、大掛かりなものでは風の無い時に走れる船まである。それらが一斉に動かなくなつた。」

話しながらフォリアが手元のランタンに手をかざすと、光は暴走するように強く弱くランダムに光り狂い、最後の一言と共に消えた。その横で、世界地図を広げてくれて場所を指示示していくてくれたレジデがその後を続ける。

「それまでカケラは美しい物や珍しい物は献上され、それ以外は捨てられたり魔術ギルドが研究するだけの対象物でした。しかし事件が起きた後、世界を震撼させたのは、強い殺傷能力を持つたカケラがあらわれた事よりも”魔法器具の制御がきかない”事実でした」

私の世界で言つなら、いきなりコンピューターが暴走状態になつたようなものだろうか。テレビもエレベーターも飛行機も、いきなり制御不可能になつたと思えば世界を震撼させたと言つのは決して誇張ではないのだろう。

「まず最初に問題になつたのは、魔術ギルドが研究の為に集めていたカケラをどうするかと言う事でした。燃やしたり壊そうと強い衝撃を与えたせいで爆発した事件もあつたので、安易に処分する事は出来ません。」

地図の一角を指し示す。そこはある国の首都の街中らしかつた。衝撃で爆発つて、当時なら地雷でもあつたんじやないか。

それから例えば日常用品の水銀体温計でも、恐怖に駆られて手で壊し蒸発した水銀を周囲の人間が吸い込んだら大変な事になる。そんなものが街中に集められていたら心中穏やかではないだろう。

当時の人からしたら、カケラは化石を発見したぐらいの感覚ではなく、猛獸に出会つてしまつた位の恐怖心だったんじやないか。自分が想像していたよりも深刻な状況に、思わずうめいてしまう。

「そこで周りに被害を与えない場所にあつた建物に強固な結界を何重にも張り、そこへ持つっていたカケラを全て移動しました。そしてそれを知つた各地の人々は、我先にと自国のカケラを魔術ギルドを通しその建物へ捨てていつたのです。」

そのまま指を、先ほど西の森の話をしていた時に指し示していた場所へ移動する。そして最後にレジデはトンと机を指で叩きながら

「そしてそれがこの”時の館”になります。」

と
続
け
た。

カチカチと時計の針の音だけが部屋に響く。

何度か口を開いて、何も言えず閉じてと繰り返す。

そして結局言葉にするのを諦めて、目の前に置いてあつたお茶を味もわからず飲み込んだ。

突然全てを奪われ、知らない土地で生きていけと言われ、更にその土地の人間からは恐怖・憎悪の眼差しで見られると。つまりはそういう言い事なのだろうか。

理不尽だと怒るよりも、ずっと強い虚脱感に襲われる。

「じうじするタイプじゃないとは言え、ここまできて何とかなる」と思えるほど能天氣でもない。

じちらに来てから吸わなくなつた煙草を無性に恋しく感じた。

日本は平和な国だと思つ。

もちろん治安の悪化や凄惨な事件は毎日ニュースを騒がしているけれど、ミサイルが降つて来るわけでもなく、日常的に銃におびえる事も無く、当たり前のように識字率は100%に近い。

もちろん今現在紛争中の国が多いのも、アメリカ同時多発テロを第三次世界大戦と呼ぶ人がいる事も知っている。けれども現代の日本と言う国に暮らしていて、戦争を身近に感じられる人は少ないだらう。

じちらの世界の寿命はどの位なのかは知らない。第一次世界大戦の終戦を二十歳の時に迎えたと言う祖父は80半ば。

じちらの世界でも当時の事件は、完全に忘れ去られると云つまど昔の事ではないだらう。

「・・・私の国では世界中を巻き込む戦争が50年以上前に2回

程ありました。自然の摂理を曲げて大規模な爆発を起こす技術や、長い間大地を汚すような技術も当時飛躍的に発展しています。多分、こちらの世界を震撼させた事件は、そんな戦争の道具がこちらに来てしまったからでしょう。」

淡々と言葉を紡ぐ。

心配そうにこちらを見ているレジーテを安心させる為に何と声をかけようかと、妙に冷静な自分がもう一人の自分を觀察している。暫く考えて、自分が今混乱しているんだなと思ったら、何だか少し笑えてきた。

女の厄年は終わつたと思つたけど、関係ないらしい。

思考を遮るように、トーコと呼ばれフォリアに目をやると、一瞬苦いものでも飲み込んだような顔をされる。

けれども直ぐに元の表情に戻つて言葉を続けた。

「誤解の無いように言つておぐが、別に力ケラがあつたからと言つて、いきなり魔法や魔法器具が使えなくなる訳では無い。トーコが指摘した通り、”自然の摂理を曲げた事象”が起こつた場合のみ精靈の暴走がみられる。

それはこちらの研究でも明らかになつてゐるし、最後の事件は50年近く前だ。テツラ人と判つたからと言つて、いきなり殺される様な事は無い。・・・心配するな。」

最後の一言はあまりに小さな声だったので、レジーテが頷かなかつたら聞き間違いかと思つた。

ああ。呆けてる場合じゃないな。

一つ頭を振ると、自分に活を入れる。

事前に貴重な情報が手に入つたんだから、生きて帰る為にもしつかりしないと。

部屋に備え付けのキッチンにつつかつと歩いて行くと、冷やして

あつた水をコップ一杯一気に飲む。本当はリポドでも欲しい所だけど、贅沢は言つてられない。

少し頭がしゃきっとした所で、先ほどのソファに戻る。

「すみません、もう大丈夫です。」

正面の二人の目を見て軽く頭を下げた。安心した様に笑うレジデの顔が愛らしい。

フォリアには立ち直りが早いなど微苦笑された後、ただもう一つだけ覚えておけと、急に真顔で返された。

「確かに一般人はカケラに対して淡い警戒心を持っているが基本的には無害だ。それよりもタチが悪くて警戒するべきなのは、一時は我先にとカケラを時の館に捨てた各地の権力者だ。」

50年前に世界を震撼させた事件は、長い年月が経ち、権力者たちが代替わりすると、その技術力に目が行く様になった。

もしあれだけの殺傷力を持つカケラを自国が操れたら、世界の勢力図を塗り替えるのは簡単だ。そもそも時の館に渡したのは一時的な処置であつて、あれは自分達の物である。

喉元過ぎれば何とやら。ここ数年、そう考え始めた権力者が増え始めカケラに対する関心が日々高まっている。

「特にこちらの世界で最大の宗教団体は相当カケラにご執心だ。そもそもテッラは我らが神が作りたもうたもの。50年前の事件は、神が我々に与えた試練である。真顔でそんな世迷い事を抜かしやがる。」

うんざりした口調で説明した後、実際さつきのホールの一件は、時の館への不正侵入者が原因だと続けた。

「それでフォリアは時の館に来たんですか？」

「そうだ、本来なら担当者以外はここには入れないんだがな。不正侵入のアラームがなった時に丁度コイツが館にいないのは分かつてから、万が一を考えてこちらに来たんだ。」

結局不正侵入は未遂に終わつたらしい。

「トーゴが来る前に、かなり結界の強化をしてあつたので油断しました。私のミスです。申し訳ありません。」

レジデのシッポも耳もしゅんと下を向いている。

「いやいや、大丈夫です。五体満足元氣ですし、現状も把握出来ました。」

殊更元氣そうに手足をひらひら動かしてみる。

あまり落ち込まれると、園児みたいに抱っこしてよしよししたくなるから、そんなしょげかえつた顔をしないで欲しい。

氣を取り直すように、2～3質問良いですかとレジデに問う。

「一般の方の考え方や特定の権力者の考えはわかりました。で、今実際お2人が所属している魔術ギルドの考えはどうなんでしょう。」

自分の身の割り振り方を決めるにしても、切実に情報が不足している。

レジデが教えてくれていない訳ではない。

けれども目まぐるしく語学や生活様式を覚えることにいっぱいっぱいで、私を置つた彼がどうなるかまで意識が行かなかつた。ここまでくれば私にも、わざとレジデが心配かけないよう、大きな問題をオブラーントにくるんでくれていた事が判つている。

隠さないで教えて欲しいと付け加えると、暫く迷つた後、わかりましたと返答がかえつてきた。

軽量・コンパクト・汎用性・信頼性。

これはアウトドア等の野外生活の荷造りの基本。さて問題です。異世界生活の荷造りの基準は何でしょう。

車通勤も長くなれば、色々な物が車に乗っているわけで。あれもこれもと思いつきをぐつと自制して、田の前の机に候補の品々を出してみる。

携帯電話とマニソーラーパネル付きの携帯充電池

細身のステンレスボトル

筆記用具と今までのノート

全部置いていくのが正しいといつのは判っているんだけど、何だからそれが最後の命綱みたいで、少しだけ持つて行かせてもらひことにした。

見慣れた古時計を見ると朝の6時前。

現実味が無いまま、あと半刻もすればフォリアが迎えに来る。

時の館から私を連れ出す為に。

3ヶ月と思っていたレジデとの平穏な時間は、昨夜の事件をきっかけに、突如終わりを告げる事になつた。

「お前らが思つてこむよリースを隠し通すのは難しいと思つだ。

レジデから魔術ギルドのカケラに対する考え方は一枚岩ではなく、それぞれの派閥があると説明を受けていた最中の一言だった。

揶揄するわけでも、皮肉でもなく、ただ事実を述べているだけの重い一言。

その一言に、思わず2人とも声を失った。

私に話しかけていたのを一度中断して、レジデが倍近くの背丈の親友を見上げた。

「結界から出る時に見つかる危険性が高い」という事ですか？」

「いや、それもあるが、もっと根本的な問題だ。トーロはこちら

世界の人間にしては胡散臭すぎる。」

う、胡散臭い。

あまりの言い様に一瞬絶句した私の傍に近寄ると、フォリアは私の髪をまとめていたシュシュをいきなり抜き取った。

「実年齢と外見年齢の相違から始まって、貴族階級には見えないが労働者にしては手や髪の状態が良過ぎる。それに歯の状態が平民階級では有得ないだろ。」

その大きな手が髪の中をすべり、一房指に絡める。

どう考へてもトリートメント不足だし、枝毛もあると思つんですが！？

眉をしかめる私を面白そうに軽く笑う。

「年を誤魔化して、このイントネーションが少しずれているのも、こちらの文化に馴染んでないのも無理やり時間が解決するとしてだ。今度はお前がそんな結婚適齢前の少女と住んでる事がますます胡散臭い。」

うむと唸るレジデの横で、私も別意味、頭を抱える。

友人には「心はいつでも18歳」などと、のたまつてゐのがい

るが、個人的にあまり若く見られる事に喜びも感動も見出せない。

若々しいのと若い事は違うし、実年齢に見られないというのは、人間として幼いとも取れるわけで。

少女と呼ばれるような年を過ぎて早10年。

結婚適齢前の少女と言われる事は、背中が薄らかくなる様な壮絶な拒否感があるぞ。

取り合えずシユシユを取り返して、いつものように後ろでまとめる。

「すみません。そんな事を言つてる場合じゃないのは重々承知の上ですが、どうしたらせめて成人女性に見られますかね。」

我ながらゲンナリした声だ。

「外見もあるが、女は化粧で化けるしな。どちらかというと一人のインポートーションには女性独特の物が無い。それを何とかすれば違うんじやないか?」

女性独特のインポートーションがあるのか。レジデと話したり書籍を読む事では気がつけなかつた。

改善の余地があるなら努力しよう。心新たに誓いを立てる。

考えたら着てるものもレジデが買つてきた服・・・つまりは男物だし、ある程度は仕方ないのかな。

「それともう一つ。さつき言ったる。世界最大の宗教、通称『光明の教団』がここ半年位で時の館にご執心だと。学院内でも結界強化を本格的にする話が出てる。その場合、俺達は確実に結界強化の為にかりだされる。下手をすればトーローがこの館にいる間に決行されるともしれんし、トーローがここを出た後だとしてもコイツはトーローの面倒を見れるような状況じゃないだろ。」

私がこの場にいるのを見られたら、流石に言い訳のしようがないだろうしな。

どうするつもりだ?と、フォリアは目で問いかけてくる。

その拍子に揺れた髪を見て、もしかしたら彼こそ貴族階級なのかも知れないと思う。

容姿が優れているだけではなくて、人を使うのに慣れている感じがするし、レジデとは違った意味で知識が深そうだ。

まあ、貴族階級や労働階級といわれても、日本で育つた私が考えるような簡単なものではないとは思うけれど。

二人の視線を受け、それまで難しい顔をしていたレジデが、意を決したようにフォリアに問いかけた。

「フォリア。あなたは私よりも顔が広い。私がトーコの生活を保障できるまでの暫くの間、上手く隠せる場所の心当たりはありますか。」

「お前が人を頼るのは珍しいな」

揶揄するような口調とは裏腹にその眼差しは真剣そのものだ。少し考えてから

「そうだな・・・ワケありの女性が隠れられて、リバウンドを抑えられる治療結界が張つてある場所の心当たりなら一つだけある。が・・・」

一つ一つかみ締めるように言葉をつむいだ後、私に向き直った。

「トーコ。働く気があるか?」

「私に出来る事ならば。」

即答する。

労働する事に否やはなしし、この一晩で得た知識で、安穩とした生活を夢見る事はレジデに多大な負荷をかけていることも判つた。戻る為の方針を模索してくれている彼の努力を無にしない為にも、私に出来る事はするつもりだ。

「レジデ。外の時間で深夜になるまでにトーコをここから出す準備が出来るか?」

「可能ですが、そこまで急ぐ必要が?」

時計を見れば深夜3時。結界外の時間はまだ日が高いとは言え、あと2時間もすれば向こうつも深夜になるだろう。

「間をあければあけるほど不自然になる。俺がフォローできるとしたらこのタイミングを逃すと難しい。」

一気に進む展開に、緊張が高まる。

穏やかな生活が足元から一気に崩れる予感に、理性では押し殺しきれなかつた恐怖心がじわりじわりと体中を駆けめぐる。

フォリアと慌しく打ち合わせをしているレジデに、この小さな彼に、どれだけ今まで精神的に助けられていたかを心底痛感した。

「とにかく時間が無い。俺は一度外に戻る。お前は彼女の用意を終わらせておけ」

いつの間に話がついたのか、部屋の隅に投げ出してあつたマントを取ると、フォリアはタペストリーの前に立つた。

いけないっ。

「あのっ」

既に淡く光り始めた男に向かつて、これだけはどうしても言わなくてはいけないと、慌てて声をかけた。

「ありがとうございます！」

レジデだけではない。協力すると言つ事は、フォリアも難しい立場に追い込む事になる。

声は届いたのだろうか。

最後まで言い終わるか終わらないかのうちに、淡く光の中に溶けて消えた彼が、少し笑ってくれたような気がした。

あれこれ悩んでようやく荷物の選別に見切りをつけた。

これ以上時間をかけても仕方が無い。

流石に一睡もしないで、目まぐるしく迎えた一夜に肉体的な疲労を感じる。

精神的には・・・疲れているのか、疲れていないのが分からなくなっている。

まあ分からぬって事は、疲れるんだろうな。

なんだか自分の体のことなのに、他人事のように思えるぞ。

さてと。と、最後にいつも使っていた書斎をぐるりと見渡して、自分の形跡が残っていないかを確かめると、レジテの待つ大ホールに移動した。

耳に心地よい鈴の音を聞きながらレジデを探すと、石像の集まる中心、一番最初に私が車と共に現れた所で、何やら蹲つて必死に作業をしていた。

つぶらな瞳で一生懸命、チョークでお絵かきをしているような仕草が可愛らしい。

「荷物の準備、出来ましたよ。」

そつと傍に近寄つてみると、彼が持っていたのはチョークではなく鞘に収めたままの短剣で、床には円を書くように、鈍く光る銀色の文字が浮かび上がつていた。

私を認めると、よいしょっと立ち上がり、こじらも準備終わりましたとにっこり笑う。

けれどもすぐに真顔になると、トー口と改まって名前を呼ばれた。

「私がトー口をこじらへて呼び込んでおいて、こんな事になつて申

し訳ありません。トークを匿ってくれる方はシルヴィアと言つて信
用できる人です。安心してください。」

彼の豊かな低い声が、染み入るように心に響く。

出来る限り早く迎えに行きます。と私を見上げる真剣な眼差しにて、

今まで彼に助けられた事が走馬灯のように押し寄せてきた。

「うん。待ってるね」

無意識にしゃがみこんで、レジデの体を引き寄せて抱きしめる。
慌てたような仕草にかまわず、もふもふの体に顔をうずめると、
わずかな逡巡ののち、おずおずと優しく背中を撫でられた。

「手紙も書きます。トークも頑張りすぎないで、何かあつたら必ず連絡下さい。」

頑張りすぎないでと言つ発言に、彼の人柄と優しさが見える。
ありがとう。と、一つ頷いて、惜しみながら暖かな体を放した。

「ラブシーンは終わつたか？」

石像の傍から声がかかる。いつの間にかに現れたフォリアは、先
ほどとは違つて、シンプルだけど非常に洗練された身なりの良い洋
服に身を包み、足元まであるダークグレーの外套を羽織つていた。
文句の付け所がない美形つているもんだな。いやいや眼福。

感心していると、手に持つていた袋を渡された。

「着替えが入つてゐる。着替えてくれ。」

中を覗いてみると、フォリアと同じく仕立ての良い生地が見える。
どうやらパンツルックらしい。

物陰に隠れて広げてみると、膝丈までのパンツと白い長袖の服、
腰までの長さのマントと黒いブーツが出てきた。他にはベルトのよ
うな装身具と、さらにも奥に入っていた布を広げると、どう見てもさ
らしだ。

えーと、「レは・・・男装になるのか?」といつよりは・・・。

悩みながら、ひとしきり身に着けてみて一人の前に進むと、満足

そうにフォリアが頷いた。

「思つたよりよく似合つ。これならどう見ても少年従者にしか見えんな。」

やつぱり。袖を通した上着も大人の男性が着るには小さいし、女性にしては胸がきつい。

「まあ幼い少女の洋服を着るといわれるのは、違和感無いから良いですが、髪はこのまま良いんですか？」

こちらだと髪の長い少年というのは有りなのだろうか？
するとフォリアは、外套の装飾だつた深緑色の房付きの飾り紐を取り、横でまとめる様にして私の髪を結んだ。

「いれでいいだろ？』

背中を押して、先ほどレジデが書いていた魔法陣の中央に立たされる。

そのままフォリアはレジデと私の直線上、円の反対側に移動する
と、腰から剣を取り出した。

「これから、こここの結界を出ても大丈夫なよう」、リバウンド防
止の術をトーゴの体にかけます。けれどもこれは補完的なものな
で、現地に行つてもなるべく治療結界内から長時間出ないで下さい。

』

本来ならまだこの結界内から出るのは危険な時期だと、何度も説
明を受けている。

リバウンド防止の術というのは、あくまで現地に向かうまでの間
の為のものなのだろう。

「大丈夫。現地に着くまではフォリアから離れないし、現地でも
ここにいた時みたいに、結界内から出ないで過ごします。」

折角助かった命だ。ここまで来てリバウンドで重症・重体という
のは避けたい。

私が一つ頷くのを確かめて、はじめます。と目を伏せたレジデの

声がホールに響き渡った。

以前皮紐を新しくするのを見せてもらったように、指で魔方陣を辿つていくのかと無意識に思つていたけれど、二人は手にした剣を両手で持ち、目を伏せて何かを小さく唱えはじめた。

レジーデはそのまま手に持つていた艶消しの黒い刀身を、銀色の魔方陣の上にあてると、まるで重力が変わったかのように私の体に何か「圧」が掛かり始める。

痛みは無いけれど、どんどん強くなるソレに、立っているのが辛くなつてくる。

しまつた！ 痛みがあるのかだけでも、事前に聞いておけばよかつた。

体験した事のない感覚に、本能が恐怖を訴える。

ついに耐え切れず、その場に膝をつくと同時に、鈍く光ついていた文字が波紋が広がるように波打ち始め、徐々に光を増しあげ始めた。気が付けばレジーデだけでなく、フォリアも同じ姿勢で剣をあてながら何かを唱えている。

どんどん強くなる光に目を開けていられなくなる。

まぶしつ

目を閉じても、強すぎる光が瞼の裏に、意識の中に、入り込んでくる。

必ず迎えに行きますと光の壁の向こうからレジーデの声を最後に

視界も意識もホワイトアウトした。

黒髪の母の館 1-3 (後書き)

区切りが悪くて今回短くなってしまった。
ようやく時の館から脱出です。

拙い作品を読んでくださいありがとうございます。

黙江トボの街 1 (前書き)

少し残酷な描画がありますので、お気をつけてください。

ガタンと言いつ衝撃で、闇に沈んでいた意識が波にたゆつ様にゆりくつと浮上する。

最初に感じたのは、よく知っている雨で湧き立つ土の匂い。そして寒さ。

首筋にあたる冷たい隙間風に体を震わせると、暖かな感触が体を包み込んだ。

無意識に温もりを求めて、より暖かな方向へ擦り寄ると、やれやくような意味を成さない声が聞こえた。

暖かい。

そのままガラガラと響く音をぼんやりとした意識の中で聞き続けていると、今度は「トーコ」という単語がゆっくりと体に響き渡った。

誰かが呼んでる。

よつやく動き出した意識を総動員して、瞼を開けると、もう一度小さな声で名前を呼ばれる。薄闇色の小さな世界を視線だけで見渡すと、首を回して声の主を間近に見つけた。

「トーコ、起きたか。意識は大丈夫か?」

薄闇の中でも輝きを失わない夜色の瞳を見た瞬間、自分の状況が一気に舞い戻ってきた。

斜めになつた体を起こそうとするが、大きな手で、すかさず背中を支えられる。

どうやらフォリアに背中から抱えてもらつていたらしい。立ち上がりにも立ち上がれないのは、先ほどから感じた振動のせいだけ

でなく、物理的に狭いからだ。

「ここは・・・馬車の中？」

断言できないのは、こちらの世界に馬がいるかどうかが、分からなかつたからだ。けれども似たような移動手段なのは確かだ。小さな小窓からうすら入る光が唯一の光源だけれど、その位は分かる。

「ここは？」と無意識に言葉を発してから、もう一度言に直す。

「ここは？」

もう無意識に日本語で話しても、伝わらない世界なんだよね。

「魔術学院を出て、町の外れまで来たところだ。」

見るか？と言われて小窓を覆っている布を少しだけ開ける。雨にけぶる石造りの町並みと、過ぎ行く後方に3本の背の高い塔がかすかに見えた。

「後ろに見えるあの塔が魔術学院だ。」

食い入るよし、初めての異世界の町並みを見る。

夜の闇に加え、雨のカーテンでぼんやりとしか分からなければ、どうやら川沿いを移動しているらしい。川の向こうには森と闇が広がっている。時の館の柔らかで女性的な装飾と違い、無駄の感じられない実直そうな町並みだ。

ずっと眺めていたかつたけれど、冷たい風に負けて窓を離れた。

「思つたよりずっと寒いんですね。」

「冬も近いからな。」

先ほどからずっと、ささやく様に話す彼に気づく。

馬車のようなものと考へれば、外には御者がいるのかもしけない。ジェスチャーを交え小声で聞くと、目だけで頷かれた。

なるほど。ガラガラと響き渡る車輪の音にかき消されていふとは思つけれど、私も小声で話そづ。いくら狭い車内とは言え、恋人のようにぴったり寄り添うような距離にいたのも納得がいった。

さて、いつ到着するのか分からぬけれど、出来るだけ情報収集

はしておいたか。それに私も少し話すことに慣れておいたほうが良い。

「あの後の事、これから的事、差しさわりのない範疇で聞かせてもらえますか？」

「そうだな。とさわやく声が、耳元にかかるすぐつたい。

」の距離で男と話したのはいつぶりだ？ とりあえず男の息を首筋に感じなくてすむように、もぞもぞと角度をえてみる。

「その後、お前を抱えて直ぐに魔術学院に移動し、待機してあつた馬車に乗り込んだ。誰にも見咎められなかつたのは幸いだつたな。本来は馬で現地に行く予定だつたんだが、この雨だしな。」

リバウンドが起きた時に、雨の馬上では対処が出来ない。とフオリアは言葉を続ける。

「ちよいとお兄さん、その前に、私が馬に乗れるか聞いてくれ。

「まさか意識がない内に運ばれているとは思わなかつたから、驚きました。」

ドロボウみたいに魔術学院からいつそり抜け出すんだと思つていつから、ある意味気が抜けたぞ。

それにしても意識がなかつた私を一人で馬車まで運んだと言つ事なのだろうか。

そりやあざざかし重かつたことだらう。

思わず謝罪すると喉の奥で笑われた。

「子どものような重さで音を上げるような男が、お前の周囲にはいたのか？」

あなたと喧嘩して勝てそうな男はあらゆる意味でいませんでしたが。

「いや、人間意識がないと重いじゃないですか。」

抱っこやおんぶで寝てくれる子は、可愛いけれどとにかく重い。

保育士は毎日がウエイトトレーニングでしたよ、ほんと。

「意識がない方が、こちらとしても都合が良かつただけだから気にするな。誰かに見咎められた時に、治療で運び込まれたと言えだからな。」

なるほど。確かに魔術学院には治療院も併設されていてレジデ医言つていた気がする。

「それはともかく体調悪くなつたら直ぐに知らせろよ。」

「今の所、到つて元気ですよ。ただ、どちらかと言つて、この振動じゃ馬車酔いが心配です。移動手段としての馬車は私の・・・生まれた地方には無かつたので。」

私の世界という単語は、今後は使わない方が良いだらう。

「目的地まで大分かかるんですか？」

「馬でとばせば夜明け前、馬車だと明け方になるか。」

思ったよりも遠いらしい。

「寝られるなら寝てしまえ。あれから一睡もしていないだらう？ ああ。そういうえば、意識を失つっていた時間を除けば、もう何時間起きているのか分からない。」

「着く前にまた色々説明してやる。取りあえず顔色が悪い。少し寝ろ。」

大きな手が目の上に置かれる。

流石に疲れていたのか。子どもじゃないんだからとの反論は、口に出る事がないまま、意識を睡魔にゆだねた。

夢を見た。

暗闇の中、指一本も動かせない私が横たわっている。空に浮かぶは様々な般若の面。

不気味に、にたりと笑った般若の口から、無数の蛇が現れた。それらはとめどなく溢れ続け、一体の大蛇と化し、のたりのたりと、近寄ってくる。

逃げようにも逃げられず、気がつけば全身を凄まじい力で締め上げられる。

骨はミシミシと音を上げ、絞めつけられた内臓が苦しさのあまり熱く脈打つ。爪は割れ、碎けた骨が皮膚を裂き、血みどりの肉がむき出しになる。

遊ぶように肉を食いつぶせる大蛇の歯と同じ色の骨が、体のあちこちから突き出す。

いつそ死にたいのに死ぬ事もできず、虚空に向かい叫び続ける私の前に、吸い込まれる様に一枚の面が近寄つて来た。

麻衣子に良く似た、般若の面が。

強く揺すられ、叩き起された。

小声だけれども切実なフオリアの声に応えようと/orして、痛みのあまり声が出ないことに気がつく。痛みで体中があちこち悲鳴を上げている。

体の外の痛みなのか、中からの痛みなのか、全く分からぬ経験したことの無い痛みに襲われる。

リバウンドが始まったのだ。

恐怖で一気に血の気が引く。崖から見た景色と共に、あの時の苦しみを思い出した。

リバウンド防止の術が正常に作動しなかつたのだろうか。

私、死ぬの？

痛みと迫り来る死への恐怖のあまり、目の前に差し出された腕に縋りつく。腹部全体に広がる強い鈍痛に、先程の血みどりの夢を思い出した。

「トーロートーロー」

何度も呼ばれたか分からぬ名前に、なんとか目線で応える。けれども痛みで滲む涙で、あのどこかひんやりとした、けれども包み込むような夜の瞳すら見えない。

意識はあるなどの言葉と共に、いきなり上着の裾から冷たい両手が入ってきた。女の手ではありえない大きな手が素肌を這い回る。

「・・・やめ・・・え・・・つ！」

息も絶え絶えに伝えた言葉は、もはや嫌悪感や拒否感からでは無く、動かされることで強まる痛みと苦しみに耐えかねて、無意識に出ていた。

「辛抱しろ。少しば楽になるはずだ。」

ぐつと鳩尾にあてられた両手から、じんわりとほのかに暖かなものを感じる。まだ体中は痛かったけれど、その感覚に無意識に体をゆだねた。大分弱いけれど、以前足から痛みを取った時の感覚に似ていたからだ。

弱い抵抗をやめて、体を預けてどの位経ったのか。少しずつ薄まる痛みに、ようやく五感が戻ってきた。

「大丈夫か？」

間近にある秀麗な顔に、彼の膝の上に乗っているんだと気がついたが、もはや動く気力も失っていた。

「リバウンド・・・ですよね」

最初の声は上手く音にならず、宙に消えていった。口の中の意味は、無意識に唇をかみ締めたせいだろうか。

「そうだな。思ったより一気に来たな。あまり良い状況では、ない。」

この人は眞実を誤魔化さない。実際、腹部の強い痛みは抑えられているけれども、体全体に感じる強い倦怠感と圧迫感、手足に感じる痛みは依然として無くなっていない。

「こ」のまま現地に向かつのは無理だ。一度休憩を取るぞ。」

するりと「手が鳩尾から離れようとするのを、思わず手をつかんで止める。この手が離れたら、またあの痛みが襲ってくるように思えた。

フォリアは少し驚いたような顔をしたけれど、軽く私の手を振りほどいて天井を強く一度叩く。

「アンバーへ」

そのまま天井に目的地を告げると、何か仕掛けがあるのか、御者に伝わつたらしい。了解と言わんばかりの見えないベルの音が一つ響いた。

「現地に着くのが遅くなつて、大丈夫ですか。」

体をぐつたりと彼に預けたまま、尋ねる。とにかく早く現地に着いて欲しい。現地に着けば安心だと説明したレジデの姿を思い出す。

「このままだと、現地に着くまでお前の体力が持ちそうに無い。これから向かう先に、以前簡易治療結界を敷いた事がある。そこでもう一度術の補強をする。」

すると再び両手が鳩尾に当たられる。

強まる痛みと、彼の手から引いてく苦しみが、まるで波のよじに感じた。

「この世界に麻酔があるなら、今すぐ使いたい。

「お前は大事な預かりものだ。死なせはしない、安心しろ。」

ぐつたりと目を閉じた私の耳に、小さく、届いた。

なんとか痛みと均衡を保っていたフォリアの力が効かなくなつたのは、馬車の止まる半刻ほど前。アンバーへの到着する事には、もう完全に自分で立つていられない位の痛みになつていた。

馬車から降りるといつよりは、馬車から崩れ落ちるように降り、フォリアの手を振り解き、吐けるだけ吐き続けた。体が震え強い寒気を感じるのは、打たれている雨のせいだけでは決して無い。体が砂袋のように重く、象に踏みつけられたかのように体中の関節とう関節が悲鳴を上げていた。

フォリアと女性の声が聞こえたけれど、もうこの世界の言葉を理解する余裕すら無い。

吐けるだけ吐いて、胃液まで吐いた私を何かが包みこんだ。
そのまま抱き上げられて、運ばれる。痛みで揺れる度に体のあちこちが壊れていく気がする。

「あんた、まさか無理やり手篭めにしたんじゃないだろうね。」

「このんな子供に手を出すほど不自由はしていない。それより誰も部屋に近づけるな。」

「はいはい。色男に限つて変な方向に行きやすいからね。詮索好きのうちの子が、そっちに行かないように、注意しておくれよ。」

ガチャガチャという金属音の後、やわらかな場所に横たえられた。

朦朧としたまま目を開けると、薄緑のカーテンの向こう、赤いドレスが扉から出て行くのが見えた。

それが何だか考える間もなく、フォリアがしてくれたみたいに、無意識に両手で鳩尾を押さえる。最早、自分の体が血でぬれていなのが不思議なぐらいだ。

けれど、自分で鳩尾を押されたところで、痛みは一向に去らない。

「もう少し我慢しろ」

「…………」

その言葉が死刑宣告のように聞こえる。

一分一秒が永遠のように感じられる中、体を丸めるようにして、苦しさでのた打ち回る。

痛みは最早嵐の様で、重く体の中を駆け巡ったかと思えば、強く飛沫を上げるように体内に打ちつける。慣れることが出来ない痛みが、内外で吹き荒れる。

どこからか、かすかに聞こえる悲鳴が、自分のものなのか、幻聴なのか、自分の体が上げているものなのか。最早そんな事すらわからぬ。

フォリアはそんな私の両手を一手にまとめる、そのまま手早く頭上に固定した。無理やり伸ばされた体と辛さに、思わず抗議のうめきをあげる。

すると、よつやくフォリアの手が素肌に滑り込んできた。先程と同じように鳩尾に置かれた手が、焼け石に水程度、ほんの少しずつ痛みを抑える。

その鳩尾に置かれた手が背中に回り、胸部を圧迫を取ると、そのまま背中と鳩尾に先程よりもずっと強い熱を感じた。熱さの分だけ、痛みが引いていく。

全部の神経をその痛みを取つてくれる暖かさに向けると、砂漠に滲みこむ水のように、すうっと痛みが和らいでいく。

ガチガチに力の入った体から、徐々に力が抜けていくと、さつき

まで石畳のよじて感じた場所が、上等な柔らかな寝台だと気がついた。

手足こむりくつと温かみが戻り、素肌に触れるシーツが心地良い。痛みはまだ抜けきらないけれど、ずっと閉じたままだった瞼を、ゆっくりと開けた。

緋色。桃色。桜色。

ぽんやりと開けた目に最初に入ってきたのは、優しげな色合いの数々。

天井から垂れ下がる薄絹と、その中心で柔らかな光を放つ照明だと気がつくのに、大分時間がかかった。

見たこともないような大きな寝台を、少しずつ色合いを変えた薄絹達が覆っている。中にいると大きな花びらに包み込まれているようだ。

視界がゆっくつと戻ると同時に、自分の笛を鳴らしたような息遣いが聞こえる。田をつぶつて浅い深呼吸を繰り返しながら、少しづつ呼吸を整えると、助かったんだと言つ実感がわいてきた。

乾いて割れた口を軽く舐め、身じろぎしようとして、自分の手が自由にならない事に気がつく。

え・・・・・つと、なんでだっけ。

ぎしきりと音を立てそうな首を動かし、視線を上げると、私の両手を拘束している深緑色の飾り紐が、壁の装飾に結わかれている。天井から垂れ下がる幾重にも折り重なった薄絹を花びらだとするならば、焦げ茶色で施された壁の装飾はツタを模しているのだろうか。そこに装飾の一部として組み込まれた、小さな鏡を見つけ

別の意味で心臓が止まつた

恐る恐る視線を下げると、緩められたさらし、背中に回された手に突き出されたようにした胸、鳩尾におかれた手の向こうにかすかに揺れる深い紺色の髪、腹部に押し当てられた唇が、一気に飛び込んだ。

羞恥のあまり、残る痛みも忘れ思わず起き上がるうつすると、鳩尾と背中の指にイラつくような力が入る。

よくよく聞いてみれば、先程からずつと小さくフォリアは何かを唱えている。

私が邪魔しては、本末転倒ですよね。と、自制心を総動員して起きるのをやめたけれど、どうしたって体の力は抜けない。

一体いつ上の服を脱がされたのだ。

なりふり構わなかつたさつきと違つて、なまじ意識がはつきりしてきたから、これはつらい。

別に男に体を見せた事のないような年齢じゃあるまいし、と思えないのは、異世界難民生活も長いからだ。

元々そんな「恥じらい」だの「女力」なんてものは期待されても困るような性格だけれども、三十路目前、化粧水から離れて早二ヶ月。ズタボロ状態の半裸を人前に晒すのは、最早犯罪の域に達するんじやないか。迷惑条例ぐらいには確實に引っかかるだろ？

痛みに耐えるために体中に負荷をかけたせいで、筋肉と言う筋肉が悲鳴をあげているけれど、そんなことすっぱり頭から消えうせた。落ち着き無く視線を動かすと、わざと壁の中に角度を変え埋め込まれた、何枚もの小さな鏡の中の自分と目があつてしまつた。

あわてて視線を天井に向ければ、先程気がつかなかつた照明の周りに、全身がうつるサイズの鏡が照明の引き立て訳として、施されていたのに気がつく。

ほんつと勘弁してー！

インテリアとしては非常に趣味が良い。柔らかな薄綿につつむ光と影、さりげなく間接照明のように輝く鏡たち。高級ホテルを思われる光の演出に、通常時ならいつどりする所だけれども、今回ばかりはそう思えない。

目、目を閉じてれば良いんだよね。

問題の半分しか解決しないけれど、問題の半分は解決する。

えいやつとばかりに目を瞑れば、先程は感じなかつた指先の細かな動き、重なり合つてゐる体の重や、素肌にかかる息をより鮮明に感じて、ぶわっと一気に肌が粟立つた。

あいにく唱えられる念仏なんて知らないので、頭を冷やす為に昔覚えた平家物語の書き出しを謳んじる。古文が苦手だつた私には呪文も同じだ。

『祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おこれる人も久しからず、唯春の夜の夢のゝじ。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。』
・・・・・そこまでしか分からない。

そんな馬鹿らしくも非常に切実な精神の葛藤も、手はそのままに、フォリアの唇がゆつくりとわき腹まで進んで背中に回り、うつ伏せにされる頃になると、完全に無意味なものになる。

べその下あたりから始まって、徐々に腰の中心に向かう彼の唇の軌道を考えれば、もう一度仰向けにされるだろつ。けれども、いつの間にか緩められたさらしが、これ以上動くと用を成さなくなりそうだ。

耐え切れず目を開ければ、一瞬、正面の鏡に映る自分の体に、銀色の鎧が巻きついているように見えた。

ちよ・・・と、一体、何これ？

銀の鎖に見えたのは、よくよく見ると小さな文字が連なつたもので、フォリアが何かを呑く度に、所々で一瞬輝いては私の体に吸い込まれるようにして消える。

レジデ？

この文字と色は見覚えがあった。時の館で最後に見た、彼の書いた魔法陣だ。

それはどうやら崖から落ちた際に強く損傷した胸部と腹部のみに現れるらしく、手先や足には全く出ない。フォリアがおいた鳩尾と背中の手が、彼の唇が進むにつれ暖かさを増してゆく。もはや体の痛みは、筋肉疲労ぐらいで、先ほどの発狂しそうな苦しさは、完全におさまっていた。

私の予想を裏切って、彼の唇は、腰の中央から背骨のくぼみを徐々に上がり始める。

その拍子に彼が身につけている衣服の生地が、ざらりと素肌の上をすべった。

ぞわりぞわりとした感覚を、両手を戒めている飾り紐を握り締めることで耐えようとしていたが、完全に過敏になつた素肌にそれは少々刺激が強すぎた。

「・・・っくう・・・」

シーツに押し当てて押し殺した声は、苦痛をこらえていた先程のものは全く意味が違つた。女を忘れて久しいが、女を辞めたつもりは無い。不感症ではないのだ。

自分の体の中に、もう長いこと忘れかけていた小さな炎がともり
そうになるのを、必死に振り払う。

本気で早く終わってくれないと、気が狂いそうだ。

そんな切なる願いが届いたのか、肩甲骨の間まで唇が到達する頃、
ようやく彼の両手が私の体から離れた。
未だに唇は素肌に押し当たられているけれど、もう何も彼も唱え
ておらず、私の体に所々現れる小さな文字列も、どんどんと淡く、
ゆっくりと消えていく。

伸ばされた長い腕が、壁にかけていた紐を外すと、ようやく終わ
るのかと、思わずため息に近い安堵の吐息が口からこぼれた。

色んな意味で、本当に疲れた・・・・。

安心したら、一気に睡魔が襲ってきた。もうこのまま気絶するよ
うに眠りたい。

その気持ちを汲み取ってくれたのか、ようやく離された唇が、耳

元で一言

「眠れ」

と言つ頃には、泥のような深い眠りに落ちていた。

ぱつかりと、深海までたどり着きそうな深い眠りから、途切れるよつこゑが覚めた。

大小様々な形のクッショーンに埋もれるよつこゑして寝ていたらしく、まるでゆつたりと抱きしめられているような感覚で目が覚めたのに、辺りに人の気配がまったくしなかった。

のののろと視線を右に左にと動かすけれど、先程よりも明かりを落とされた巨大な寝台の中に収まっているのは、自分ひとりだ。

「……行つたんだろ。

小さく体を伸ばすと、ここ数ヶ月味わつ事の出来なかつた深い眠りの残滓を、愛おしむ様に一瞬反芻する。

そのままむづくりと起き上がりつてみると、体の上を**すべり**かな感触が伝い降りた。

シルクのガウン？

いつの間にか、てろんとした生地の薄いサーモンピンクのローブを身にまとつていた。

素肌に身にまとつたら、さぞかし着心地が良いであつた。ところが、る様な柔らかな感覚がくすぐつたい。

胸元で緩めてあつたさらしを、ガウンの下で器用に巻きなおすと、体を動かす度に筋肉疲労が体中に響いた。

痛みと共に昨日の一連のことを思い出せば、体を見られたことに対する可愛らしい羞恥心なんてモノでは無く、じえらく醜態を晒してしまつた事に対する申し訳なさと、居たまれなさで悶絶死しそ

うだ。

頭を抱えながら自分の身なりを点検すると、見当たらないのは上に着ていた洋服だけで、膝までのパンツも靴下もそのままだ。折角のガウンの魅力が台無しだけれど、正直ほつとした。これで素肌にガウン一枚で寝てた日には、どんな顔して会えと言うのだ。

すりすりと4畳ほどもある巨大な寝台の上を膝で移動する。

誘うようにめぐり上げられていた 寝台を包む帳の間から顔を出すと、小さな光で浮き上がった部屋の中には、予想通り誰もいなかつた。

随分広いけど、ホテルなのかな？

白い壁に焦げ茶の柱。どことなくオリエンタルな感じの内装に質の高いリネン。シンプルだけれども高級そうなシックな家具。さりげなく置かれた香や、小さな生花。

随所に見られる小さな気遣いが、なんとも言えない癒しの空間を作っている。

雑誌でしか見たことのない海外の高級リゾートホテルがこんな感じだった気がするけれど、ホテルと断言できないのは、当然あるべきはずの窓が無いからだ。

おかげで今が何時だか、全く分からない。この部屋には時計も無いのだ。

間接照明やインテリアのおかげで、圧迫感は全く感じないし、まるでこの部屋が快適な穴蔵のような気さえするけれど、1人で部屋の真ん中で突っ立つて途方に暮れている状況に変わりは無い。

フォリアを探しに部屋を出るような真似はしない方が良いんだろうけど、寝直すわけにもいかないし。

所在なさげにうりうりと部屋の中をひとしきり歩いた後、小さなランプに促されるように、ドアの無い小さい隣の部屋を覗いて見る。そこには大きな鏡台とスツールが置かれ、小机の上にはタオルや見覚えのある白いシャツが綺麗に畳まれてあった。

これ、どう見ても昨日着ていたシャツだよね。

広げてみると、花の香りと共に見覚えのある深緑色の飾り紐が落ちた。

間違いない。どうやら誰かが洗濯しておいてくれたらしい。

フォリアが戻つてくる前にと、ローブを脱いでシャツに手を通す。髪も飾り紐で一つに結わいて鏡を見ると、少年従者にしか見えないと言われた姿が映し出されていた。

流石に瘦せたな。

時の館では自分の姿なんて鏡で見なかつたけれど、ひとしきり鏡の前で回つてみても、自分ではやつぱり男の子には見えない。ただ記憶の自分より幾分ほつそりしているが。

いくらスッピンでさらしを巻いてパンツルックになつたとは言え、そうそう性別不詳にならんだろう。今日び中学生ぐらいの男の子でも見上げるような背丈の子もいるしね。

暫く鏡の前で力こぶを作つてみたり、抜いてない眉やカットしない痛んだ髪に見ないふりをしてから、ガウンを鏡台の上に置いて寝室に戻つと背中を向けた。

その瞬間、間近の空気が動いて、低い笑いを含んだ声が聞こえた。

「調子が良さうで何よりだ。」

肌に感じる暖かな蒸氣に、ぎいいと恐る恐る首だけ振り返れば、小部屋の装飾壁と思っていた透かし彫りの扉を前に、いかにも風呂上りといった風情のフォリアが立っていた。

黒いラフなパンツに、素肌に引っ掛けただけの前開きのシャツ、濡れた髪は首筋に張り付き、文字通り水も滴る良い男といった風情だ。

「・・・おはようございます。」

なんとも間抜けだが、他に何と言えと言つのだ。

元々気まずい所に持ってきて、どうやらこの浴室へ続く扉、向こうからはぱつちつこちらが見えていたらしく。

勘弁してくれよー。

そんな私の葛藤を見抜いているのか、面白そうに頭をぽんぽんと軽く叩かれる。

そのまま小机の上のタオルを取ると無造作に髪を乾かしながら、隣のスツールに長い足を投げ出すようにして腰掛けた。

濡れた髪はいつもよりも深さを増し、何とも言えない艶と色を放つていて。

押し込めておいた昨夜の情景・・・少し動く度に感じた彼の筋肉の動きや体の堅さ、吐息や唇の動き、男の体温に包まれたまま失った意識、それらが一気に脳裏を駆け巡る。

男を知らない訳ではもちろん無いけれど、そんな物は思い出すのも億劫な記憶の彼方。治療の為とは言え、昨夜の事は少々精神的に刺激が強すぎた。

心中でひとしきり呻いてから、ため息一つ。取りあえず、それらを完全に意識の向こうに押しかけた。

「昨晩は大変お世話になりました。おかげ様で無事生還出来ました。」

気持ちを切り替えて深々とお辞儀をすると、気にするなと返答が返ってきた。

「リバウンドの可能性はあつたが、正直俺も流石にここまで一気に出るとは思わなかつたからな。こんな場所しかなかつたのが難点だが、人目にはつかないのが不幸中の幸いか。正直良くあの痛みに耐えたよ。」

労う様な声に、少し吃驚する。

最初が最初だつただけに、皮肉屋で人を食つたような、ひょうひょうとしている割りに、どこか冷たい硬質な印象があつたけれど、先ほどから彼から感じる印象は、何となく・・柔らかい。闇の冷たさと夜の暖かさを両方体現できるのか、この人は。

「いえ、色々ご迷惑をかけまして。」

何となくどうして良いか分からぬ空氣に、つらつらとどうでも良いことを話し続ける。

「ここは治療用の結界が張つてある割には何だかホテルのような風情ですが、宿泊施設なんですか？それかお知り合いの家ですか？」自分で話しながら脳裏に赤いドレスがふわっと浮かんだ。・・・何だろう？

ちょっと引つかかる物を感じていると、彼は少し目線を泳がせた後、わしわしとタオルを動かしながら、扉を顎でしゃくる。

「もし今後、薦の絡まる模様の装飾壁に花や鳥のモチーフが彫りこまれていたら、その周辺に扉の取っ手や魔法器具が埋め込まれていると思っていい。ここに水のようなモチーフが彫りこまれているだろ？」「これはここが浴室であるといつマークだ。」

何か話の持つていき方が強引だつた氣もするけれど、あつという間に興味は例の扉にさらわれた。

確かに言われてみれば、壁一面のこげ茶色のシックな透かし彫りの中には、水が流れるよつたモチーフがある。そして、それをたどつていくと、丁度普通の扉と同じ位のサイズになつた。

つまりこちらの人から見れば、この装飾壁の一部が扉で、その向いが浴室なのは一目瞭然だつたわけか。

「それにしても随分と洒落ているんですね。風呂場の扉はこれが一般的ですか？」

「風呂はどこの家にもあるわけではないからな。自然と凝つた物になるんだらう。」

なんですよ！？

「一般家庭にお風呂が無いんですかー？じゃあお風呂に入りたい時は・・・」

「共同浴場に行くか、日常では体を軽く拭くくらいだらう。もちろん貴族階級ともなれば違つが。・・・アーロンの所は、どうやら違う風習みたいだな。」

何ともつたいない。労働の後のひとつお風呂ほど気持ち良い物は無いだろう。アーロン。

研究機関である【時の館】にお風呂が無いのは納得できただけれど、一般家庭に無いとは思わなかつた。夏はどうするんだ、夏は。

あへ、そんな話をしていたら無性に温泉に入りたくなつてきたぞ。

「私の国では一般家庭に普通に風呂がありますね。特に私の住んでいた所は温泉で有名だったので、しづしづ温泉を利用していましたよ。」

温泉と言つのがフォリアには良く判らなかつた様だけれど、私の
お風呂に入りたいオーラは感じてもらえたらしい。

「どうぞ。今日は日が高い。出発するまで少し時間があるから
トーコも入つて行け。」

高速で頷く。

今まで一番フォリアが素敵に見えた瞬間だつた。

魔力小説街 4 (後書き)

時間が無くて推敲出来ませんでした。暫くおひらくペースでの更新となります。

体もホカホカ、お腹もいっぱい。
幸せだなあ

出発まで楽にしていろと、風呂から上がれば小さなメモが一つ。
そしてその横には軽食と小さな果物が一つ、机の上に並んでいた。

もう言えば最後に食事を取ったのはいつだろ？

風呂上りの体に、カシュッと小さな音と共に甘酸っぱい果実が染
み渡る。まさに甘露。まさに至福。

体を温めて、満腹で、一人になつて、いかに自分がガチガチに力
が入つっていたか痛感した。ふんわりとしたソファに座り、このまま
溶けてしまいたい。

半日。いや1時間で良い。このままこの1人の結界に誰も入つて
こないで欲しい。

瞑つた目の裏にふわふわの毛並みと、ピンとはつたシッポが浮か
ぶ。レジテはどうしているだろ？。きちんと食事をしてるだろ？。
もう少し時間があつたら田持ちのする物でも作ってきたんだけど
な。

そんな事を考えながら少しの間ウトウトしていたんじゃないだろ
うか。カコンという扉の音と、扉の向こうから声が聞こえた。

「フォリア？」

残念ながら1人の時間は終了らしい。惜しみつつ慌てて扉を開け
ようとして一瞬扉の前で戸惑つた。鍵が掛かってるよ、この扉。

えつーと？モチーフを探してどうのって言つてたつけ？

田星をつけて取つ手の近くにある小さな鳥の意匠を触ると、くちばしに咥えていた石の色がうつすら変わって、ゆっくりと内側に扉が開いた。

小さな一つ一つの細工が相変わらず綺麗。

そんな扉のモチーフに夢中になつていたので

「フォリアって呼び捨てにするって事は・・・やっぱりあんた従者なんかじゃないね！？」

扉の裏から伸びた白い手に反応するのが一瞬遅れた。
勢い良くつかまれた肩の痛みもそのままに、手の主をぽかんと見上げる。

微妙に陰影をつけた朱赤の髪。深い紫の瞳につややかな肌。豊満なバストに対し、これでもかといつ位くびれたウエストは、女なら誰でも憧れるラインだ。

燃え上がるよなオーラと共に、そのしなやかな体を若草色のダレスが絡みつくように巻きついている。

美女だ。美女。まわしく美女。

でももしかしたらニコーエーフの美女かもしね。

「ちから世界に来て初めて見た女性は、そう思つてしまつまどい高身長、そして濃いFFロモンの持ち主だった。

「ちよつと何ポカンとしてんのよ」

ちょっと気の強そうな顔を呆れた様にしかめ、軽く首をかしげる
その仕草までもが色っぽくて魅力的だ。

けれども、その言葉が非常に聞き取りにくい。ぼそぼそ話してい
るわけでは無く、私が彼女の発音についてないのが原因だ。
今言われた言葉も、何度か自分の中で反芻して、ようやく意味が
判った位だし。

考えたら私がこちらの世界の言葉に不慣れと知っている男性一人
としか話した事が無いのだから、当然かもしれない。
彼女が話している言葉こそ、ネイティブの会話スピードなのだろ
う。

「す・みません、今フォリアはいません。」

とたんに自分が話している言葉がきちんと通じるのか不安になっ
て、軽く緊張が走る。

ゆっくり発音に意識しながら正確に話すと、寄せられていた赤い
眉が緩んだ。

「あんた珍しいね。言葉が上手く話せないの?
しげしげと見つめられる。

小首をかしげた何気ない動作で、深く切れ込んだドレスの胸元が
己の存在を示すかのように、妖しく揺れた。

こちらの世界にブラジャーは無いのか!?

女同士とは言え、身長差から田のやり場に困る。確実に175cm位はある彼女の胸元は、まさにこう私の顔の前にあるわけで。全くスケ感の無い生地のドレスなのに、彼女の胸の突起の凹凸までしつかり判るのでだ。

色々な意味で微妙におろおろしている私を、さつきまでの剣呑な
雰囲気を脱ぎ捨てた美女が興味津々と迫ってきた。

「フォリアが男に走ったのかと思つたけど、やうじや無いっぽいね。」

ペタペタと私のほつぺたや髪を触りながら、面白そうに話し続ける美女の言葉の半分以上意味が判らんが、どうやら「フォリアが同性愛者になつたか確認しにきて」「色氣無の私を見たら安心した」的な事を言つてゐるようだ。

・・・多分。

まつたくレジットといつこいつ色恋の会話してないから、いつち方面の語彙が無いんだよ~。

どんどん機嫌が良くなるフローロモンたつぱりの美女は、ひとしきりにじり寄つてきた後、私と同じ田線の画そに田を合わせ、フィーナと名乗つた。

「ええと。はじめまして、フィーナ」

両腕をにじりよるフィーナに握られて、微妙に上半身が後ろに反り返つた状態から首だけでぺこりと挨拶をする。

自分の名前を名乗つて良いのだろうか。とつそに返せず逡巡していると、フィーナはきらつたらした田で、ぐこつと体を近づけてきた。

「この顔には覚えがある。物凄く見覚えがあるんだ。

猫好きの子供が猫を見つけたといふ・・・と言つぱな。

「ねえ。良く見ると可愛い顔立つてゐるけど、何歳? 年上にまだ興味ないの?」

やつぱり―――！

自分の年の半分しかいってない某少年アイドルグループのファンをしている保育士の先輩が、こんな風な顔で同じファンのママさんと話してたよ、たしか。

男だと思われて男と女のいざこざに巻き込まれるのも御免だけど、だからと言つて同性に迫られても困るわけですよつ。

と、取りあえず一度お引き取り願おう。微妙に身の危険を感じ決意する。

だつて何か目が爛々としてませんか！？

「フイーナ、すみませんがフォリアがいないので・・・」

そしてこの手の類の女性に共通するのは、このモードに入ると言を聞かなくなる事らしい。

「オロオロしちゃって、可愛いねえ」と言つ声と共に、思つたよりもかなり強い力で引っ張られ、無理矢理頭を抱えられた。ぼふつと言つ音と共に、豊かな弾力と香水の匂いを顔全体で体感する。

あまりの事に全思考が停止。

人生初 女性の胸の谷間に顔をうづめました。

もがもがと抵抗する私の事は意に介さず、綺麗な黒髪だねえと上機嫌な声と共に益々力が強まる。

ちよいとねーさん、大分力強いけどリアル女性ですよね！？こちらに豊胸のシリコン技術とか無いですよね！？実は生まれた時の性別は男性だったりしませんよねえ！？

「俺は誰もこの部屋に近づけるなと言つておいたんだが、どうしてひつなってるんだ。フイー。」

じたばた暴れていると、呆れたようなフォリアの声が聞こえた。

「アンタに頼まれた物が届いたから持つてきたのよ。客が入つてから直ぐに退散するわよ。」

「あれか。丁度良いと言えば丁度良いんだが、・・・取りあえずソレを放してくれないか、一応病みあがりなんだが」

惜しいねえといふ声と共に力が緩む。ふはっと足りてない息を吸い込むと、呆れた顔をしているフォリアの前で、うちゅうと頬にキスをされる。

「具合が悪くて抱き込まれた子がいるってのは本当だったのかい。

「・・・俺は男には走らないと言つているだらう。お前ソレを確かめに来たのが本題だらう。」

「当たり前じゃないのさ。でもこの子氣に入っちゃつた、まだ女も知らないんじゃないかい?」

なでなでと頭を撫でられてから渋々と開放される。恐るべし異世界。元の世界で全く体験出来なそうな事ばかりが起きる。ソファの後ろの安全圏まで逃げると、面白そうに笑われた。

「この子の名前は?」

「・・・アーランだ。」

フォリアが代わりに答えてくれる。どうやら取りあえず私の名前はアーランらしい。

まあマイケルとかよりはシックリ来るか。

改めてペコリと頭を下げると視界の端で何かが光った。

思わずその方向に顔をやると、豊かな胸元を飾っていたネックレスの石が彼女の髪と同じ色にチカチカと光りだした。

扉の石といい、首飾りといいこちらの石は光る加工が簡単に出来るものなのかもしれない。感心して見ていると、フィーナはめんどくさそうに軽く舌打ちをすると、フォリアの手に小さな布袋を押し

付けた。

「御代は次回に上乗せで良いよ。それかこの子を連れてきてくれ
るんでも良い。」

何か取引材料に使われてるし。

体格の良いフォリアと長身美女のフィーナが並ぶと、ハリウッド
俳優もかくやという感じだ。一人が並ぶことで、フォリアの鍛えら
れた体の厚みやフィーナの体の曲線が相乗効果で引き立てられてい
る。

暫く2人で何かを話した後、紅のさされた唇を男の首筋に落とし
て、艶やかにフィーナは去っていった。
花の香りと、また会いましょうといふ言葉を残して。

魔にさぶる街 5（後書き）

時間が取れず久々の更新になってしましました。
今月はもう少し更新を頑張りたいです（^_^；

「随分と呆けているが、生きているか?」

鮮やかな朱赤美女が消えていった扉をぼーぜんと見ていたら、いつの間にかお茶を机に並べたフォリアに声をかけられた。
そういえばさつき帰ってきたとき、何かトレイの様な物を持っていた気がする。

「まだ少し顔が赤いぞ。実はお前こそ同性愛の趣味でもあるのか?面白そうに言いながら、自分用の琥珀色の飲み物を傾ける。
間接照明だけの明かりの落とされた部屋に、強いアルコール独特の甘い香りがした。

随分とアルコール度数の強そうなお酒だけど、外見どおりアルコールにも強いのか。

「同性愛の趣味は無いのですが・・・」こちらに来て初めてお会いした女性としては、幾分・・・刺激が強すぎました。」

グラスを傾けている彼に目線に促されて向かい座ると、ふんわりと優しい香りのするお茶が差し出された。

優美な線を描くカップに口をつけると、動搖していたのが大分おさまってきた。

私の正体が不明だと言つなら、フォリアも充分不審者だ。
フォリアの動きは大雑把な動きなのに、まるで何かの作法のように一つ一つの動作が洗練されていて、自然と目が行ってしまう。
魔術師なのは知っているけれど、レジテと違つてどちらかと言つと「剣を使う人」の様に思えるし、充分な教育を受けて育つたのは間違いないのに、「高貴な方」にあるであろう選民思想や線の細さを

全く感じない。

それにしても、いくら短時間とは言え、何か下手な事を言つて無かつただらうか。

冷静になつた分だけ心配になつてきた。

「短い時間だつたので、あまり変な事はいつていないと想ひのですが、大丈夫でしょうか。」

「あいつならば大丈夫だ。仮に何か思う所があつたとしても、ああ見えて口が堅い。」

ふむ。それを聞いて少し安心した。

確かに旧知の仲つて感じだつたし、問題があるなら彼もこんなに落ち着いていないだらう。

「それよりも良くな髪を乾かしておけ。ここから現地まで船を使つ。冷えるぞ」

船！

と言つことは、この館は川辺にあるのか。すっかりまた馬車に乗るものだと思つていたから、ちょっと意外だつた。確かに馬車の中も寒かつた印象があるし、現地に着きました風邪ひきましたじや仕事どころじゃないもんね。しつかり暖まるう。

残つたお茶に口をつけながら、殆ど乾いている髪にもう一度タオルをあてる。

こつち来てから、痛んだなあ髪。

フォリアには色々聞きたい事はあるけれど、何から聞くべきか。そして最低何を押さえておくべきか。現地にたどり着くまでの時間は無限ではない。

現地の様子、今後の連絡方法、仕事内容、禁忌事項。はてさて、何を聞こうか。

わしわしとタオルを持つ手を動かしながら、ほんやりとそんな事

を考えていると、フォリアから話を切り出された。

「トーコはアラン・タトルの神話を聞いた事はあるか？」

「アランタトル？」

聞きなれない単語に首をかしげる。

するとフォリアは椅子から背を離し、グラスを机に置くと、その長い指を琥珀の中に浸した。

「神話ですか？いえ、神話や物語の話まではレジデとは殆どしていません。」

こちらの世界は充分私にとって神話や物語の世界だけれど、人が住むところに信仰あり。

神話や宗教はこちらにも山ほどあるのだろう。

しかし、一体何故急に？

「アランタトルと言うのは、気まぐれで人間に光を与えて、天空の世界から追放された、永遠の子ども名前だ。」

グラスにくぐらせた指で、机の上にアランタトルとアーランのスペルを綴る。どうやらアーランと言うのは、アランタトルからといった名前らしい。上下に並べてみると類似性がある。

こちらでは有名な神話だが、と前置き一つ。その背をまた椅子に預けると、フォリアは落ち着いた低い声で夜の神話を語り始めた。

その昔、地上にまだ光が無い時代、天空には今よりも星々が光り輝き、双子の月神の元、夜の世界も昼間の様に輝かんばかりだったと言つ。

しかし天空の一族とは言え、まだ子どものアランタトルは全く光が無い地上に、気まぐれで星屑をまきはじめた。

きらきら きらきら

地上にきらめく光が面白くて幾度も繰り返すうち、無数にあつ

た天の星々が少なくなっている事に、アランタルトは気がついた。

慌てて星屑のランプに地上の光を集めたが、時既に遅し。

人々は光を手に入れ文明を築き上げてしまい、神々の逆鱗に触れたアランタルトは、その姿のまま、天空の世界を追われてしまう。地上に落とされたアランタルトは、少年とも少女ともつかない子どもの姿で、地上に落とした星屑を未だに探し続けている。いつか天空に帰れるその日を夢見ながら。

揺らめく光の中、朗々と話す色男の声に一瞬別世界に行きそうになりながら、終わりの合図と共に小さく拍手を返す。いやいや、これで楽器でも弾けたら吟遊詩人とかでも食べてけますぜ、旦那。

「面白いですね。細かい所は違いますがテッラにも人間に火を与えて磔刑になつた神が出てくる神話がありますよ。」

子供向けの絵本には、「ゼウスに怒られる」程度の描写だったけれど、ギリシャ神話のプロメテウスは人間に知恵と火を与えて、かなり手酷い永遠の拷問を受けることになるし、聖書では神の禁止していた知恵の実（林檎）を食べさせた蛇は足を切断されてしまう。

何処の世界も人間に知恵を与える事は、神々の本位ではなかつたのかもしれない。

まあ、アランタルトは神では無かつたのかもしれないけれど、人間に知恵を与えて罪人扱いされているんだから似たようなものだろう。

「他にも、地上に落とされたアランタルトの話は幾つかある。」

遊んでいた子どもが不思議に光る星のカケラを見つけると、何処からとも無く少年が現れた。

その子どもは、星のカケラをどうか譲ってくれと頼まれたが、嫌がつて家に帰る。不治の病の母に見せたら喜ぶと考えたからだ。しかし家に帰ると、先ほどの少年が不思議なランプを持つて現れ、再度講づ。

子どもの母の病を治せば、星のカケラを渡してくれるかと。

「それで病床の母親は治るんですか？ もしそうだとしたら、星の力ケラさえ見つける幸運があれば、アランタルが願いを叶えてくれる・・・なんだか光を与えてくれた事と良い、随分人間に都合が良いですね。それなのにあくまで天界の罪人であるということは、こちらの宗教の主神は別にいるんですね？」

悪さをしたら懲らしめられる、正直者は報われる。

アリとキリギ里斯ではないけれど、神話や昔語りには因果応報の原則が織り込まれているのが常だ。

病床の母にと薬草を探し続ける健気な子供が、雪の中に光り輝く星の力ケラを見つけた・・・というくだりでもあるなら、話は別だけれど。遊んでいた子供が偶然見つけるなら、宗教的には一体何を示唆しているのだろう？

少し不思議に思って聞くと、返事が無い。

髪を拭いていたタオルの下から顔を出してフオリアを見ると、呆然としたような風情でこちらを見ていた。

「何か変な事・・・いました？」

「初めて聞いた神話の意義まで思い至るのが、テッラ人の標準的な思考回路なのか？」

呟くように問われる。

いやいや、また。

「そんなご大層なものでは無いです。職業柄ですかね？ 小さな子供を相手する仕事だったので、物語に触れる機会が多くつたんですよ。

「

口元に軽く手を当てて何か考え込む風に黙り込むフォリアを見ながら、乾いた髪をまた深緑色の飾り紐で結わきなおす。

宗教ネタはNGだつたんかな・・・。

何となく居心地が悪い感じがして、もぞもぞと椅子に座りなおすと、ようやくフォリアが口を開いた。

「すまない、驚かせたな。お前の言つた事は丁度解釈で宗教問題になつてゐるんだ。覚えてゐるか? こちらの世界で最大の宗教集団の名前を。」

「・・・『光の教団』ですか?・・・時の館に侵入をするほど、世界のカケラに強い興味がある。」

今回急いでレジデと離れ離れになつた主因で、フォリアに時の館で侵入者と間違えられた原因。それが何かと言いかけて、ぐるぐると言葉が脳裏を駆け巡る。

アランタル 光を与える 星のカケラ 光の教団 テッラ

もしかして、呴いた私の声に夜色の強い視線が返る。

「そう。まだカケラがテッラと言う一つの世界から来た物ではなく、複数の異世界から来ていると考えられていた頃、世界のカケラは【星のカケラ】と呼ばれていた。」

カラッと氷の踊る音がやけに大きく部屋に響く。

「お前が一番警戒するもの。それはアランタルをあがめる光の教団だ」

どうぞ、久々の更新になりました。
ずっと放置していたこんな拙い話なのに、お気に入りにしててくれた
方々がいらっしゃって本当に驚きました。
ありがとうございます！

花粉症に負けないで、なんとか引き続き頑張りたい、です。

遅くなつましたが、みづやく次に進めねりです。
プロジェクトだけどどんどん進んで、全く文章に起じる作業が進みません。
うへへむ。

文章力、養いたいです。

世界最大の宗教が敵

・・・見つかったら大昔で言つたら魔女狩りみたいな感じ? それとも現代テロの親玉みたいなものだろうか? • • • いやいや逆に、物珍しがられて怪しげな儀式か何かで人身御供とかかも知れない。

どちらにしたって、口クなもんじゃない事だけは確かだ。

人間の想像力と言つものに限界があるのをはじめて知つた。あまりのスケールの大きさに、思考回路は完全に停止。フォリアが話しかけるまでの暫くの間、私は完全に石化していた。

「こちらの世界で最大の宗教が光の教団と言つのは、実は少し語弊がある」

「ごへい・・・ですか?」

「テツラではどうか知らないが、こちらの世界で最も信じられているものといえば、精霊信仰だ。人の力では癒せない傷の治癒や、日照りの解消をするのは5大精霊のお陰だからな。そして5大精霊の仕えている神が天空の神々と言うわけだ。」

ええと?

「つまり精霊信仰が世界最大の宗教・・・と言つことですか?」

「そこは難しい所だな。皆無意識に信じているのが精霊信仰と言うだけであって、光の教団のように教会があつたり教祖がいて、布教活動をしているわけではない。」

ふむふむ

「精霊を操る魔術師が所属している魔術ギルドも、別に宗教団体ではない。学術団体の方が近いしな。・・・つまりは信仰と宗教との

違いか

なるほど。

例えば。日本で一番大きい宗教は?と聞かれたら。

一応「仏教」と答えると思う。

仏壇がある家は少なくないし、お盆やお彼岸にはお墓詣りに行く人も多い。

でも「個人的に」特定の宗教を信仰している人は意外と少ない。それが日本で一番大きな宗教の仏教だとしてもだ。

特に若年層で宗教を信仰している人は、それだけで噂の種になる。

日本人の一般家庭には仏壇も神棚もあるし、勿論お正月には神社、クリスマスは結婚前の大イベントだし、結婚したら今度はお盆が大イベントだ。

私も実家の宗派は?と聞かれたら真言宗だの浄土宗だの仏教の宗派を挙げるけれど、個人的には勿論、無宗教。てか、神様いるなら帰してくれ、日本に。

だけど、日本で一番信じられているものは?と聞かれたら。

「無宗教と言う名の八百万の神信仰」と答えると思う。

無宗教と言つても、神社やお寺で乱暴な事はしたくない、ご飯にお箸は立てたくないし、樹齢数百年の木を見ると何か宿つている気がする。

つまり無宗教と無信仰とは違うという事だ。

だからフォリアが言つた精霊信仰とは、生活に根付いた土着信仰であり、お布施を誰かに渡して神様に理解を求める「宗教」ではないと言いたいのだろう。

日本人が信仰心が薄いのは、それだけ平和だから。爆弾が降つて来るわけでも無し、流行病でバタバタ人が死ぬわけでもない。

重い病にかかったとしても、まずは神より医者に頼る。そして医者から助かるか分からないと言われた時に、初めて神にすがる。ならば魔法が使えるこちらの世界でも同じ感覚なのかもしない。

「あのアランタルの神話の続きは、一般的に二つある。一つは力ケラを渡して母親の病が治ると言つものだな。もう一つはカケラを渡さなかつた子供の村が、はやり病で全滅すると言つものだ。」
全滅。随分過激だ。

「さつきお前は神話の意義を問つたが、この神話の意義は”異世界に触れるな”だ。

「ああ・・・なるほど。ようやく合点がいきました。」

精靈の暴走で世界を震撼させたのは、ここ数十年だとしても、きっと異世界の道具をめぐつてトラブルになつたこともあるのだろう。触らぬ神にたたり無し的な神話や昔語りがあつても不思議じゃない。

そしてそんな一般論に反して、異世界の品物に強い執心を示す世界最大の宗教団体・・・あー、何か絶対、口クなもんじやなさそ。『氣をつけます。係わり合いになります』

小さく手を上げて宣言をすると、口角を軽く上げて同意を示された。

う~む、色男は何やっても様になる。

でも教会には近寄らないとして、光の教団の団員を見分ける方法が判らない。

何か方法があるのか更に尋ねようとした瞬間、部屋に澄んだ鈴の

音が響いた。

「もう少し詳しく話してやりたいが、そろそろ時間が無い。光の教団については、シルヴィアが詳しい。現地で良く聞いておけ。」

強く頷く。避けられるトラブルは避けたい。

用意を始めるとの声に少ない荷物を慌しくまとめ、仕上げとばかりに机の上のクッキーを一つ口に放り込む。

美味しい。

私が外套まで羽織つたのを見てから、フォリアは部屋の明かりに手をかざし消していく。

窓からの明かりが無いせいで、一気に濃くなる闇に気になった様子も無く、次々に明かりを消しながら、フォリアに背を押され先ほどの浴室の扉の前に誘導された。

廊下に出るんじゃないの？？

見上げた顔は、手元にある小さなランプの弱い光が辛うじて届くのみ。

上目で見上げないといけない位、彫りの深い顔が思つたより近くにある事を感じて、なんだか急に闇が重くなつたような感じを受けた。

小さな光る石の輝きをつけて、フォリアの群青の瞳が艶やかに細められる。

「今後、こちらの世界に慣れるまでは対外的には男で通せ。シルヴィアには簡単な事情を話してあるから女性としての作法を学ぶ事はかまわぬが、女だとわかるとトラブルも増える。」

「？こちらの人から見たら結婚適齢前の少女にしか見えなくとも、トラブルなんてあるんですか？」

意外と物騒なの？この世界。

思わず眉をひそめると、なんともいえない顔で軽く苦笑された。
最後の明かりが消される瞬間、背中に置かれていた手が首筋を軽く撫で上げ耳元近くにまわる。

「昨夜のお前の様子を見て、女に見えないと云つものはいないだろう。」

暗闇の中で吐息を感じる位の距離で囁かれて、脳裏に昨夜の情景が一気に駆け巡った。

背筋を駆け上かるぞわそわした感覚を、目の前の装飾壁を軽く叩くことで、無理やり押しどめる。

「・・・い、意外と、意地が悪いですね。フォリア」
呻く様に言うと、小さく声を上げて笑われた。

初めて声を上げて笑ったの聞いたけど、昨夜の事は無かった事にして欲しいと思っているこっちの気持ちを充分わかつた上で、言つてるよね！？

猫だつたら背中逆立てて、顔引っかいてるぞ！

まだ、くつくつと笑っている声が憎らしい。

見て見ぬ振り位しやがれ、
武士の情けを知らんのかつ。

突然の攻撃に、さそかし暗闇の中でもわかりそうなほど、顔が赤

くないでいるだらう

憮然と抗議をしようとした瞬間

またあの鈴の音が、高く、涼やかに部屋中に響いた。

つたない文章を、読んで頂きありがとうございます。
誤字脱字の指摘や、感想などいただけすると励みになりますので、
しよかつたら是非お願ひします。

ナイフで切込みを入れたように、暗闇に一条の光が差し込んだ。それは清らかな鈴の音と共に広がり、暗闇に慣れた私の目を細めさせる。

淡い光は装飾壁を通して、フォリアと私の周囲にアラベスク模様の陰影が浮かび上がらせ、まるで魔方陣の中に入っているみたいに見えた。もしかして、また魔方陣で何処かに飛ばされるの…？

時の館での魔方陣を思い出して、無意識に思わず後ずさりうどじた私の背中を、フォリアの体に抱きとめられる。

魔方陣は痛いわけではないんだけど、言つなれば全く見えないジエットコースターの様に、自分でコントロールできない「圧」を受ける。しかも強烈に。

本音を言えば、一度でこりこりだ。

体に力を入れて、あの重圧を覚悟した私の予想とは別に、体は一向に重くならず、鳴り響く鈴の音と共にみるみる光の帯が太くなつていく。

魔方陣じゃない？

最後に一際高い鈴の音を立てて、二人の前に、レンガ造りの小さな小道が現れた。

「びっくり・・・しました。」

小さく咳いて、そろそろと体から力を抜く。

どうやら飛ばされないですんだらしい。

装飾壁の隠し扉に、レンガの小道って、アルセーヌルパンか？ホームズか？

勝手に進んで良いのかわからず、ぺたぺたとレンガに手を当てる私の背中をフォリアに軽く押され、おそるおそる中に入る。

一体どうこう作りなのか。照明代わりなのだらう、暖かみを帯びた色のレンガが、所々淡く光り、行く先を照らす。

まとわりつく空気は明らかに冷たい湿気を帯びていて、足を勧める方向からは水音が響いてきた。この先に船が待っているのは確実みたい。

緩やかな上り坂になつた小道を足早に進むと、途中からレンガの風合いが安っぽく薄汚れたものに変わり、どんどん道が狭くなる。普通に館から出て船に乗るのかと思つていたけれど、これじゃまるで犯罪者の脱獄シーンだ。

間違つても今、地震とか起きて欲しくない。

途中、鈴の音が後ろから小さく聞こえて、何かが閉じるような音が聞こえたけれど、振り返るのもばかられる位、道は狭く悪路になつていく。

照明代わりの光もどんどん弱くなつていき、これ以上狭くなつたら、長身のフォリアは屈まないと歩けないと程になつて、ようやく水の流れる地下道のようなホールに出た。

「ここは……？」

「地下の上下水道施設への入り口だ。」

さつきまでいた部屋に窓が無い理由は、地下だったからなのか。

妙に納得して、人工的に整備された薄暗い水路に目をやると、幅広の小さい船が一艘泊まっている。

薄く霧がかつていて良くな見えないけれど、ベースのコンドラみたいな細長い船ではないらしい。

近寄つてみると、外の無骨さとは裏腹に、小さな屋根の下は意外と快適そうに見えた。

珍しさも手伝ってキヨロキヨロあわいち動き回る私に、やんわりと注意が飛ぶ。

「霧を発生させるから、中に入つていろ」

？・・・霧？

詳細は良く判らないけれど、恐る恐る船に乗り込む。泊めてあっても小型の船は大分揺れる。

不安定な中、腰を屈めてもぐりこむように屋根の下に入り座ると、狭いとは言え、案の定けつこう快適だった。

まあ・・・どう見ても身分のある人のお忍び用に見えるよね。この船。

船の中には、水面が近い。

何とはなしに、ぱしゃりぱしゃりと動く波を見ていたら、フォリアの合図と共に、急にドライアイスのような煙が船から噴き出しあじめた。

唚然とする私の前で、見る見る霧が濃くなり、船から噴き出す煙がなくなる頃には、あたり一面真っ白になつた。

もはや船の先端部分さえ、かすんでよく見えない。

目立たないようにする為にとは言え、ぞえらぐダイナミックな仕掛けだ。

準備が出来たのか右舷を外から大きく蹴り、離岸させる。

それと同時に、ぎしり大きく船を傾けて、フォリアが隣に滑り込んで来た。

馬車と同じぐらいの空間はあるけれど、やはり長身のフォリアには狭そうだ。

「行くぞ。」

手馴れた手つきで内側から幌を閉めると、地道の照明が殆ど消え、それと同時にどうこう仕組みだか勝手に船が進み始めた。

「おお、真っ暗だ。」

何とは無しにワクワクしてしまつのは、きっと遊園地のアトラクションを思い出すからだろう。

ただ残念ながら如何せん寒すぎる！

深夜の霧がかつた船の上で暖を求めるのは間違つていいのだろうけれど、このままだと風邪をひきそうだ。

雪国育ちだが、寒さに対しても備えが充分出来ていなければ、風邪だつてひく。

こちらの世界は体が資本。半ズボンから伸びた足を抱え込み、羽織っていたマントの前をしつかりとかき合せた。

そんな様子に気がついたのか、言葉と共にふわりとフォリアのマントが上からかけられる。

「すぐに地下道から川に出る。それまでは寒いだろ？ が我慢してくれ。」

「大丈夫です。それよりフォリアの方が風邪をひきますよ。」

慌てて返そとしました私を、大きな手にやんわり押さえられた。

「鍛え方が違う。それにコレもあるからな。」

ちゃぷりと音がする小さな無骨な水筒を手に押し当てられた。

「持つてきたんですね。」

暗くてきちんと見えないけれどコンセプトでも、やつらのお酒だらう。

「基本的に水の上では火精のコントロールが難しいからな。特に今回みたいに霧が発生している場合は嫌がつて出てこない。」
なるほど。便利そうに見えても色々制約があるのはあちらの世界と同じか。

「じゃあ私にも一口下さい。」

ここまで寒い時には飲むに限る。手を伸ばして水筒を受け取り強引にキャップを開ける。

そのまま口に持つていうとした手より先に、フォリアの長い指がストップと言いつぶつに私の唇に押し当てられた。

「・・・コレは強いぞ。お前、その前に酒飲めるのか?」

何故そんなに意外そなのが、逆に聞きたい位だ。

「一応成人してるので。・・・以前は一人で晩酌してましたし、弱くはないんぢやないですかね」

フォリアより強くはないだろうけど。

「晩酌・・・」

ん? こちらでは女性はそんなに飲まないものなのかな?
やや啞然とした風のフォリアは、もう止める気がないらしい。
寒さに耐えかねて、フォリアの様子を気にせず口に含むと、上等な蒸留酒が喉を転がり落ちていく。

流石。味も香りも良い。

人々のアルコールに思わず美味いと呴いてから、もう一口。

日本酒も好きだけど、これもなかなか。

火がともる様に体の中から温まつたのを確認してから、『馳走様

と大きな手に銀色の水筒を返す。

名残惜しいけど飲みすぎては元も子もないし、遠慮して飲んだつもりだ。

まあ、小さいボトルだから結構減つたかもしれないけど。

残量を確かめるようにして、大分軽くなつたボトルを左右に振る
フォリアに気がつかないふりをしながら、背もたれに体を預け、船
の揺れに体をまかせる。

この蒸留酒にはちよつと癖のある濃厚なチーズが合つと思つけど、
そんな事言つたら益々絶句されそうだから黙つていよう。

そんなこんなしていたら、よつやく外から聞こえる水音が変わり
始めた。

黒川の如くの更新に力を入れるため、週一更新キャンペーン実施中。ひじょーに励みになりますので、誤字脱字の指摘などでも結構ですので、感想をいただけると嬉しいです。

低い重低音混じりだった水の音が、船の振動と共に、耳に心地よい波の音に変わる。

どうやら地下道から川に出たらしい。

しばらく息を潜めて外の様子を伺っていたフォリアが、大丈夫そうだと呟いた。

「無事に外に出たな。・・・寒くないなら少し外を見てみるか？」
「見ても大丈夫なら見たいです。」

やはつこちの世界の風景には興味は尽きない。

左に座るフォリアが片手で幌の一部を開けると、隙間からは色とりどりの光が淡く見えた。

大分夜も深まつたという時間なのに、霧の向こうはまだまだ宵の口といわんばかりの雰囲気だ。

流石に全開には出来ないらしく、小さな隙間から覗き込もうとした私を手で制す。

ここからじや見にくいくらいだから。あまり前に出るなって事か？

と、若干不満に思つた瞬間、子供の様に右腕一本ですくい上げられるようにして、いきなりフォリアの膝の上に座らせられた。

「ちよ、ちよっと重いですよー。」

何より近いー。

すぐそばにある顔に抗議すると、静かにと軽くいなされ、外を見るように促される。

「狭いから我慢しろ。・・・今のお前は子供にしか見えん。安心し

ろ。」

文句を言つて良いのか、恐縮して良いのか、安心して良いのか首をかしげながら、しぶしぶ幌の隙間から外を眺める。

地下道から船が出てくるのを見られない為に、一時的に発生させた霧だつたのだろう。

もう地下道から出たせいか、船の周りに異常に霧が立ち込めていることもなく、自然と薄く霧がかつた川の向こうには、色とりどりの光が溢れる町並みが見えた。

視線を後方にやれば、その中でも一つ大きなお屋敷が見える。

「あそこが今いた所ですか？」

「そうだ。この川を下ると大きな貿易港に出る。アンバーはちょうど街道とその貿易港との交流地点の街だ。」

アンバーと言つのか。この街は。

それなりに川幅があるせいで、乗っている船から街行く人の顔が見れる程には川岸近くに無い。

レジデ以外の獣人族や、元の世界ではついぞお目にかかったことが無い様な髪の色の人々を見たい気持ちを諦め、しげしげと町並みを観察する。

低いレンガ造りの町並みは、以前馬車の中から見た無骨な石造りの街よりも、よっぽど生活感を感じさせる造りだ。

写真でしか見たことのない、中世ヨーロッパの町並みに近いんじやないだろうか。

「先ほどの館は随分しつかりした造りでしたが、こちらの世界では男性が女性を快楽の為に購入するのは合法なんですか？」

寒さも気にならないぐらい、夢中で町並みを眺めながら、ずっと気になっていた事を聞くと、座っていたフォリアの体がいきなり揺

れ始めた。

「顔を向けると、秀麗な顔をゆがめ、声を殺しながら笑っている。

「そういうのは、娼館と言うんだ。」

ひとしきり笑った後、新たな単語を教わる。どうやら誤魔化す気は無いらしい。

「レジデとこんな会話をしたことないので、その手の単語は語彙不足なんです。」

幌を閉めて、フォリアの膝の上から体を元の席に戻しながら、軽くふてくされて言つ。

「生活習慣・政治・経済。どれだけの話をレジデとしたか分からない。

博学な彼はあの手この手で色々な話をしてくれた。けれども、大人なら知つて当然の、こんな単語は一度として使う機会がなかつたのは、しううがない。

知りたい事は山ほどあつたし、たとえ時間があつたところで、あの愛らしいレジデとそんな会話をすること自体、想像さえ出来ない。

「非合法ではないな。あの館はこの街一の高級娼館だ。夜を共にする以外にも歌や遊戯を楽しむ場所もあるな。」

キヤバクラと風俗が一緒の場所・・・と考えるよりは、昔の吉原みたいなものだらうか。

最上級遊女である花魁と闇を共にするには、客にもそれなりの格が必要・・・みたいな？

フォリアの言い方だと高級娼館では無い売春宿は、また違うのだろづ。

確かにフィーナが歌と踊りに長けていても、なんら不思議はなさそう。むしろ見てみたい。

「世界最古の職業は、異世界でも同じって事ですね。」

「どういう意味だ？」

「何でそういう様になつたかは知りませんが、私の国で”世界最古の職業”と言つ時は、大概娼婦とスパイの事を指します。」

なるほど、と小さく笑つ。

「人間が社会生活を営めば、自然とそこには発生する”職業”というわけか。」

現在の日本で売春は違法だという話は、あえて割愛する。ではお前の国で合法化されている夜の仕事の具体的な例を挙げる。といわれても困るし。

「実際、フィーナ達は両方兼任しているんじゃないんですか？貿易港と街道の交流地点と言つことは海外や国内の重要な取引がされる場所でしょう？隠し通路や治療結界も、裏口や感染症の治療用なんて可愛いものではなく、明らかにもつと重要度が高いように見受けられましたし。少なくとも、ただの男性用高級娛樂施設じゃないことは確かですよね。」

思いついたままを言葉にのせて話し続けて、ふとフォリアを見れば、面白そうにこちらを覗き込む顔と視線がかち合つた。

「何故そう思つた？お前はこっちの世界をよく知らない。売春宿に目立たない裏口がある事も珍しくないし、裏道もご禁制の品物を扱う為の通路とは考えなかつたのか？」

「人目につかない為の裏口ならば客室の中ではなく、スタッフルームのような場所に出るでしょう？人身売買や密輸入の品物を運ぶ為の通路にしては余りに狭く、悪路ですし、あの道には厚く埃が積も

つっていました。日常的に使う道には到底思えません。「

ますます面白そうに群青の瞳を細め、さらに問われる。

「よく見てるな。・・・ならば何故フイーがスパイをしている可能性があると思つた?」

「あの裏道があつたから勘で・・・というのが正直な所ですが、フイーに抱きしめられた時の力の強さや動きの素早さ、こんな訳ありの裏道を我が物顔で使えるフォリアに何か調達していたところから、ただの高級娼婦では無いんじゃないかなあと。」

なるほどと小さく笑うと、ちいさな子供にする様に頭の上をぽんぽんと撫でられる。

「子どもなんか大人なんか、どんな階級のどんな人間なのか、さつぱり見当がつかない。今のお前は何処に行つても目立つだろうな。」

しみじみと呟かれた。
むう。

「ひざらの常識に疎いのは、努力してこれから覚えます。あと発音も。」

「それだけだつたら簡単だつたがな。上流階級にも見えんが、学が無いにしては目端が利きすぎている。発想自体も空飛だが的を得てゐるし、外見もそこそこの出に見える。・・・正直どの方向に持つていけば良いかとけ込めるのか、皆田検討がつかん。いつそ記憶喪失とかの方が楽に馴染めたるうな。」

そんな都合よく記憶喪失なんかになれるかい。

結局人に混ざつて暮らせるよつになるには、相当な努力と注意が必要らしい。

波の音を聞きながら、小さくため息を一つ波間に落とす。
本当にこの人は真実から目をそらさせない。

レジデが帰路を探し出す時間よりも、私がこちらの世界に馴染む
時間の方が早いと言外に教えていた。

馴染めるようになる事を前提とする会話を続けながら、湧き上が
った元の世界への郷愁の思いを・・・深く暗い心の一番奥に、そつ
と沈めた。

何とか週一更新に漕ぎつけました。次週も更新できるよう頑張ります。

誤字脱字、ご感想など頂けると嬉しいです。

じひらの世界で困った事は沢山あるけれど、その一つに地理があげられる。

測量技術の差のせいで詳細な地図が手に入らないし、距離感が全くわからない。

例えば歩いて20日程かかると言われても、舗装されてない山道を、山歩きに慣れたこちらの世界の人人がどの位一日で歩くのか、全く想像すら出来ない。

舗装されたコンクリートの道路を、普通に歩いて平均時速4キロと言つのは元の世界の話しなわけで。

更にその道のりを馬で走つたら・・・とか、馬車で走つたら・・・とかになると、完全お手上げだ。その前に日本じゃ歩かないし、20日間も。

だから今までの話から判つてゐるのは、今いのファンテール王国が中央大陸の東海岸にある事。

そして、この国の北の国境は長く伸びた山脈で、匿つてもひつシルヴィアの住まいはその山脈の麓にある事のみ。

リバウンドのお陰で馬車で北東に直行する予定が、一旦東に大きく迂回してから、川を伝つて現地まで向かつてゐるせいで、距離感なんぞわかるはずも無い。

判つてゐる事は、私が現地で何かあつた時、魔術学院のあつた街まで自力で行く事は相当難しいと言つ事ぐらいだ。

船が進んだ分だけレジデから離れる。

現地に着けばフォリアも時の館に戻る。

この状況で不安に思わないといつたら、嘘になる。

幌の僅かな隙間から入り込む、凍るような風がまるで今の自分の現状を表しているように感じるのは気弱になつていてるからだろ？やうなきやいけない事、やるべき事がハッキリしているのは、この際非常にありがたい。

余計な事を考えず、それらに埋没すれば良いから。

それに手の中の僅かな慰めのアルコール、心を落ち着ける静かな波音、隣で眠る男の体温と微かな息遣い。目を瞑れば、愛らしく優しげなレジデの笑顔。

まだ大丈夫。まだ頑張れる。

空元氣でも、強がりでも、動けているうちは大丈夫。

目を閉じたまま、誰に言つことなく内なる声で呴き、口角を無理やり上げてみる。

大丈夫。私は、生きていく。

オレンジ色の西口が、近代的なコンクリートの部屋を照らし出す。

「どうしても院には進まないのかね。」

豊かな白髪と同じ色の眉が、少し残念そりて、少し悲しそうに寄せられる。

窓辺に置いた年代物のラジカセが作る長い影と、部屋に似合わない大きな安楽椅子。

遅くに出来た孫娘の写真を研究室に嬉しそうに飾り、教室に出入りしている一人の生徒の行く末にも親身になる。

そんな暖かで、誰よりも尊敬に値する恩師の前に立っているのは、昔の自分だ。

まるで映画を見ているように、2人は私に気がつかない。疑問に思えば波音がかすかに聞こえる。

ああ。これは夢なのだ。

「JUJUは懐かしい大学の研究室なのか。

「君が子供の教育に携わりたくて、保育士資格だけでなく幼稚園教諭や小学校教諭まで取得した事も勿論知っているよ。子供のボランティアにも熱心だし、僕も君みたいな教えがいのある生徒を持ってとても嬉しい。だからこそ、違った形で子ども達の教育や問題点と向き合う方法もあると思うんだ。実際君が任意で出してくれた、児童心理学のレポートはとても見事なものだった。」

机の横にある、レポートを手元に引き寄せてしまいじみ呟く。

「入学当時から成績優秀な君の事だし、大学と同じく奨学金は出し、院では^{補助金}も出るから学費は心配する必要はないよ。資金的な問題で躊躇しているのかい？」

後姿の自分が、小さくかぶりを振る。

そう、あの頃はまだこんなにも髪が短かつた。

「つたない論文を先生にそこまで評価して頂けて嬉しいです。けれ

ども本当は高校を卒業して専門学校で保育士資格を取つたら、すぐにでも働きたかったんです。こちらで沢山の勉強をさせて頂きましたが、これ以上先延ばしにはしたくないんです。」

この時の気持ちは覚えている。

もうこれ以上先延ばしには、どうしても出来なかつた。

早く現場に出たかつた。

切羽詰つた様子の私に、ちょっと困つたように首をかしげると、
「君の気持ちも、もちろん大切だ。では、せめて幼稚園や小学校の勤務にしたらどうだい。それならやり方によつては大学院と併用する事も可能だし、セミナーや勉強会だけでも参加できる。けれども保育士ではそれも難しいだろう。」

私の気持ちを損なわずに、研究の道も残してくれる。

戦時に無くした左膝下の代わりに、誰よりも熱い児童教育への思いを持ち続ける恩師の気持ちが嬉しく、誇らしかつた。

「先生。無くした者こそ、誰よりも与えられる者になる。先生の著書のこの言葉を読んで、この大学に入学しました。私も先生の様に与えられる人になる為に。」

だから止めないで欲しいと、言葉にはしなかつた気持ちを、これ以上代えられないと思つたのだろうか。

ぎしりと大きな安楽椅子に体をあずけながら

「わかつた、もうずっと前から決めていたんだね。君の好きなようになさい。現場に出てから思う事もあるだろう。何かあつたらいつでも遊びにおいで。」
と言つてくれた。

優しく笑つたあの笑顔はもうない。

定年を過ぎてからも教育熱心だった先生は、遊びに夢中になった子どもが車道に出たのを助け、帰らぬ人となつた。

先生。

誰よりも「えられる者になりたかった。

無くした物を埋めるように、がむしゃらに勉強した。働いた。

そして今、また大きなものを失おうとしています。

そんな私に「えられる者になれる日が来るのですか。

問いつても、暗闇から返事は無い。

いつの間にか周囲は懐かしい教室ではなく、荒れ狂う風の海になつている。厚く雲の垂れ込めた空と闇色の海の区切りさえつかない。

生き物のよつよつねる波間に落ちながら、それでも叫び続けた。

先生。私はそれでも生きていって良いのでしょうか。

黙に叶ふる街 10（後書き）

全体のまだ15～20%位しか書けていない現実に途方に暮れます。執筆ペースを上げないと、書き終わる頃にはどの辺になっているのか・・・

恐ろしくて計算できません（＾＾；

また次週に更新できるよう頑張りたいと思こます

6 / 8 再度、加筆修正

いつの間にか眠っていたらしく、アーランと揺り起された、浅い眠りから目を覚ました。

ゆらゆらと船の動きを感じながら、暗闇のつもりで目を開けると、眩いばかりの光が飛び込んできた。

「うわ、まぶしつ！」

あまりに暗闇に慣れた生活を送っていたせいか、目が光に慣れてくるのに時間がかかる。ようやく光に痛みを感じなくなつた頃、恐る恐る目を開けると

その視界の先、まさに世界が一新していた。

空は深い闇色が片隅に退場し、対の空では花が開くように柔らかな東雲色に変わりかけていた。たなびく雲はその絶妙な色合いを、紫紺、薄紫、桃色と映し出す。

両側に高くそびえ立つ崖の上から、色とりどりの紅葉が屋根のように枝を伸ばし、その色合ひを気まぐれに水辺に落としている。薄く靄がかつた川を滑るように進む船が立てる、僅かな水音。夜明けを知らせる鳥の声。冷たくも清涼な朝の空氣。

世界の全でが、この深い渓谷の合間を流れる川を静かに彩つていた。

「・・・綺麗。」

思わず口をついて出た日本語は、刻々と色を変える空にとけて消える。

ああ、世界はこんなにも綺麗だ。

呆けるよつに見上げる幽玄の世界はあまりに現実感が無く、今ま

で見たどんな景色よりも美しく見えた。

「気に入つたか。」

谷間に木靈す鳥の声に傾けていた耳に、割り込むように低い男の声が入り込む。それと同時に大きな暖かいモノが視界を一度遮った。それが大きなフォリアの手だと言うことに気がつくのに一呼吸。幌を全開にして景色が見えるようにしてくれた船の中、自分がフォリアの膝に頭を預け、極上の景色を見上げているんだと気がつくのに、もう一呼吸かかった。

もう一度視界が遮られ、フォリアの手が撫でるように自分の髪を漉いているのだと気がついた瞬間、よつやく本当の意味で目が覚めた。

「す、すみません！」

あちこちにぶつかりながら慌てて体を起こすと、その拍子に大きく船が左右に揺れた。投げ出されるような大きな揺れにバランスを崩して、外側にダイブしそうになつた私の上半身を軽く片手で受け止める。

「寝ても起きてても騒がしいやつだな。」

腰を抱かれた形でそんな事を言われれば、思わず全開になつていた幌をマッハの勢いで閉じたくなる。

ええと、歯軋りでもしましたでしょうか。私。

いびきとか寝言だつたら、真面目に合わせる顔がないにも程がありますよー？

暗闇の中ならともかく、確実に寝不足で腫れぼつたい寝起きの顔は、そもそも人様に会う顔じゃ確実にないし。

しかも至近距離で向き合つ男は睡眠時間だけで言えば同じ位でも、

まったくそのクオリティを損なっていない。体力が違うのか、疲労が蓄積されても色男つぶりが増すだけのは知らないが、その機能は私には搭載されていないらしい。

別に言い寄りたい訳ではないので、綺麗に見られたいなどと可愛らしい事は思わないけど、それにしたって限度がある。

相手が全く気にしていない様なので、ため息をつきながら開き直つておはようございますと挨拶をする。

するとフォリアの濃紺の髪が不思議な動きをしているのに気がついた。左側だけ、何と言つたか人的な動きをしているように見える。まじまじ見つめていると、その視線に気がついたフォリアがちょっと笑んで、左肩を下げるよつに動いた。

ん？ 何？

さらりと濃紺の髪が動き、その向こへ、男の背中から小さな白い塊がぴょこっと姿を現した。可愛らしき大きな目、左右に揺れる長いシッポに赤ちゃんよりも小さな手。全身と同じく真っ白い翼。羽根付きの・・・リスザル！？

「キイ？」

フォリアが手を差し伸べれば、するすると腕によじ登り、好奇心一杯の顔でこちらを見上げる。

何コレ、めちゃくちゃ可愛いぞ！

猿といっても、どこでかい二ホンザルとかとは違つて、小動物特有の何とも言えない愛らしさがある。

触つて良いものか高速で悩んでいると、私のマントの下からも、そもそもと同じ位の子が楽しそうに出てきた。

思わず手を差し伸べると、手のひらに温かな塊が迷わず飛び込んでくる。

「へへー！可愛いーー！」

何だこの可愛らしき生き物は。
よく見れば一匹とも可愛らしき首輪をしている。子猫にするより
にアゴの下をくすぐつてあげると、嬉しそうに身をよじつた。

「到着が遅れたんで、シルヴィアがハピナー達を迎えたよこしたら
しい。」

ハピナーと言つのか、君達は。

フォリアが一匹のハピナーをすくう様にして空に押し上げると、
軽やかに羽を使い舟を先導し始める。

早くおいでと言つように、パタパタと羽を動かしながら、ひびひ
振り返りつつ入り組んだ崖の方に進んでいく。

壁と屋根の部分に当たる幌を取り払つてゐせいで、昨夜と同じ船
とは思えない開放感だ。

清浄な空氣に思わず大きく深呼吸をしてみる。朝日と言つのは何
でこんなに生氣がチャージされるんだろう。時の館を出る事になつ
てから知つた様々な重しが、それだけで少し軽くなる気がした。
ふと振り返ると、こちらを見ているフォリアと目があつた。

「ずっと時の館から出られなかつたらう。仕方がないとは言え、し
かめつ面ばかりでは体にも良くない。」

少しほつとしたような、少しやりきれないような複雑な顔をして
いるのを見て、私の為にわざわざフォリアがこの景色を見せてくれ
たのを知つた。

ぐるりと天を仰ぐ木々を見つめる。

はらりはらりと桜のように水面に落ちる紅葉が、この華やかな舞

台がもう僅かであると告げている。冬の到来は直ぐなのだろう。フオリアの気遣いが嬉しく、また同時に少し悲しくもあった。

「レジーテが迎えに来てくれるのは、思つてゐるより先になりそうなんですね。」

早ければ一月で迎えに行けると言つていたけれど、違うのだろう。きっとリバウンドが起きなくなる一月が過ぎ、冬が来て、春を迎える可能性もあるかもしれない。

「……最近、あいつは殆ど時の館にいたからな。少し世情に疎い。多分今日明日中ででも結界補強の為、他の魔術師達が召集されるだろ。そうなれば半年間拘束される可能性もある。……勿論俺もだ。」

だからお前にこの景色を見せてやりたかった

ため息と共に吐き出された小さな咳きは、静かな川面に落ちひる落ち葉のよじこ、私の心を静かに揺らし続けた。

峡谷の古塔 1（後書き）

すみません。ビーしても、ビーしても区切りが気に入らなくて、2回も加筆修正致してしまいました。

次回の更新は今週末を目指していますが、今回のよつに修正の上重ねをしないよう注意したいと思います。

峡谷の古塔 2（前書き）

先日、前話を大幅に加筆修正致しました。しかも2回も…申し訳も
「ざこません〜〜〜（平身低頭）
話が繋がらない可能性がありますので、もしあ時間あるようでした
ら、是非前話からお読み下さい（Ｔ＿Ｔ）

北の山の麓、ワケあり一人暮らしの女性の家に「厄介になる。そう聞いていて無意識に想像していたのは、緑の森にある丸太小屋。もしくは山の途中にあるアルプスの少女ハイジ生活。

少なくとも、縁の山野の中で生活するもんだとばかり思っていた。

けれどもハピナー達が誘導した先、今まさに船の先端に向かい合わせになっているのは、崖に埋め込まれた巨大な石の扉。

恐る恐る視線を上げれば、川の中央からはあまり目立たないよう力モフラージュされているけれど、それは紛う事なき石の古塔だった。

海辺にある古く朽ちた灯台を縦に半分にして、崖の中に埋め込んだらこんな感じになるんじゃないだろうか。

子どもたちに読んであげた絵本に出てくる、ラブンツェルの塔をも思い出す。

元々は白亜の塔だったのかもしぬいけれど、10年20年の造りではないのだろう。一見すると川と崖に囲まれた牢獄のように見えなくもない。

レジデと何も分からず過ぐしていった時の館を出てから、監禁度というか軟禁度というか、上がつません？

真夜中に来ていたら、ハピナー達はガーゴイルに、この塔は確實にお化け屋敷に見えてたと思う。治療結界なんぞ張つてある所からも、私の中のシルヴィアのイメージは無意識とは言え、もうすっかりクララのような病弱で纖細な女性像だったけれど、どうやら大分違うんじゃないだろうか。

「シルヴィアさんはどんな方なんですか？あと私のする仕事は？…
・今後フォリアとレジデビリヤって連絡取つたら良いんでしょう
？」

到着直前まで聞かなかつた事を、呆然としたまま質問する。どんな相手でもどんな仕事でも選り好みなんて出来る立場ではないので、他の聞きたい事を優先していたんだけれど、あまりにも想像と違う現状に少し不安になつた。

「シルヴィアは魔術具の研究開発をしているが……まあ、色々な意味で天才肌だな。お前の仕事は主に話し相手になつてくれればそれで良い。後は少し家のことを手伝つてやってくれ。」

まずはこひらの世界に慣れるとの言葉に頷きながら、船から降りる準備をするフォリアの手伝いをする。今更じたばたしても仕方ないか。まあ、なるようになるだろ。改めて自分に活を入れると同時に、鈍い重低音を立てながらゆっくりと扉が開き始めた。

サラダ菜を冬の初めの冷たい水で洗い、デザートにする果実の皮をむく。そのままカットしたフルーツは窓辺で冷やしておいたシロップに漬け込んで暫く放置。食べる頃には味が馴染んでいるだろ。

フランスパンに似たバケットはぞつくり切つて、スペイスを混ぜ込んだバターを片面に塗りこみ、奥の鍋でゆで卵を作り始める。

冷蔵室から持つてきた鳥肉は、昨夜の内に皮にフォークで穴を開

け、塩と酒とハーブで下処理済みだ。味の馴染み具合を確かめてから、それを油を敷いた鉄製のフライパンの上に皮のほうから乗せた。耳をそばだてて、油の音がパチパチと小さな音を立て始めるのを確認してから、以前漬けた根野菜のピクルスを付け合せにお皿に出す。

部屋中にフライパンの立てる景気の良い音と、匂いが立ち込める。そろそろ起きてくるかな？

両面焼き上げた鳥肉をスライスして、ソースと絡めてからゆで卵とサラダ菜と一緒に手早くサンドイッチにする、丁度リビングの扉が開く音がした。

「おはようございます、シルヴィア。丁度サンドイッチが出来てますよ。」

後ろを振り返れば、腰より長い銀の髪を幽靈のように前後に垂らし、ふらふらとソファに向かう姿があった。

「。。。。良い匂いがする。」

ソファーにぐつたりと痩せぎすの体を預け、机の上に顎だけ乗せて眠気と格闘しているらしい彼女の前に、出来立てのサンドイッチとピクルス、絞りたてのジュースを置いた。

無言で手を伸ばし、ジュースをあおる。サンドイッチをもふもふと食べ始めるのを確認してから、食後のお茶の準備をしながらキッチンの洗い物を手早く片付けはじめた。

超低血圧のシルヴィアが大分ゆっくりと、朝食と言ひ切る昼食を食べ終わる頃にようやく彼女との一日が始まる。

「お口に含じましたか？」

さわやかな香りのお茶とデザートの果物を持つていくと、今日も美味かつた～と言しながら、皿隠しの布をしていても拘らず、熱々のお茶を器用に口元に持つていく。どうやらようやく覚醒したらしい。

正確に言えば、彼女の皿を覆う厚い布は皿隠し布では無い。眞田の彼女はこの塔の中に限り、自由に歩き本を読むことすら出来るのだ。実際今も、ここ最近開発している魔術具の複雑な仕様書をペラペラと遊ぶようにめくつていてる。

シロップをかけた果物を美味しそうに頬張り終わると、物足りなそうにお皿の中を覗きこむ。

「アーランが来てからホント楽、居なくなつたりひとつよ。」「その内、居なくなりますつてば。」

苦笑しながら彼女のお皿を台所に下げる。綺麗に整えられた台所でお皿を洗いながら、一月前のここに来た頃を思い出した。

古めかしい外觀を裏切らない螺旋階段を登りきると、そこには荷物で塞がれた大きな木の扉が待っていた。

「これは・・・入るなと言う意味じゃないですよね。」

思わず尋ねると、フォリアもつとぎりした顔でそつだらつなどため息をついた。

ここまで登つた階段は、決して狭くはない。しかし飽くまで階段

は階段。物置ではないはずだ。

けれどもここまで辿り着くまでに見たのは、積み重なった大きな木箱、それを支える紙の束、崩れ落ちる書籍たち。半端ではない量の荷物が、所狭しと並んでいた。

火災予防条例違反所の騒ぎじやないぞ、この酷さは。

フォリアと2人、縦に連なるようにして慎重に進んで来たけれど、階を進める毎に酷くなり、目的地の扉は仕上げとばかりに荷物の雪崩によつて塞がれていた。

荷物を違う場所に移そうとしても、そもそも退ける場所がない。自分達が登ってきた獣道のようなスペースを使うしかないだろうが、今度は下れなくなる。

直ぐに取つて返すつもりのフォリアがゲンナリしても、それは仕方がないと言えた。

「シルヴィア！いるのか？！」

扉に向かつて叫ぶ事数回、ようやく扉の向こうから女性の声が聞こえた。

「あ～フォリア？良くなれたね。・・・取りあえず。ソレ、何とかして欲しいんだけど。」

暢気とも取れる間延びした声で、いや～困つてたんだよねえと続く発言に、目を細め深い深いため息をつく。

ええと、これは人海戦術で荷物をどけるしかないですよね？

結局2人で往復すること十数回。扉が開く頃にはすっかり辺りは明るくなつていた。

峡谷の古塔 2（後書き）

週一更新に拘って、推敲しないままひっかかってしまった前話のツケがまわってきました。なるべく早い更新を目指しますが、同じ轍を踏まないよう気をつけたいと思います。涙。

ようやく開けた扉の向こう、予想通り散らかつた部屋の中央に彼女はいた。

20畳はあるうかと言つての部屋は、生活の要の部屋なのだろう。キッキンやダイニングソファーが並んでいるし、何よりも日光が入る。どうやら崖の中にある地中の部屋で無く、崖の上の平野部に少し出でている、・・・つまり半地下の部屋になるようだ。

扉が開いた音は聞こえたはずなのに、何か夢中でソファーの横の机に書きなぐつていて。ここまで既に、フォリアの言つていた色々な意味での天才肌と/or>の意味が何となく実感出来ていた。

だから彼女がスイカ割りをする時のような分厚い目隠しの布をしながら文字を書いているのも、床まで届きそうな長さの銀髪も、多分私が仕事始めに片付けるであろう部屋の惨状に対しても、殆ど驚かないですんだのだろう。

「シルヴィア、流石にこれは無いんじゃないかな。」

フォリアは足の踏み場の無い床の上を、踏んでも大丈夫そうな書籍を瞬時に選んでソファに近づく。慌てて追おうとしても、そもそも足の長さが違うせいで、彼が歩んだ道を辿る事が出来ない。何よりも初対面の人の荷物を踏みつけるのには、流石に抵抗があった。

フォリアと同じ行動をとるのは諦めて、床の荷物を積み重ねて先ほどと同じように道を作り始める。ソファまで3mちょいの距離が激しく遠くに感じるぞ。明日は確実に筋肉痛だ。

「・・・あ～、『じめん』『じめん』いらっしゃ～い。」

よつやくフォリアに気がついて、ぶつぶつと呴きながら書き殴っていた紙から顔をあげる。年の頃は40代半ばだらうか？いやいや、実は20代か？「レバツカリは正直わからない。

痩せぎすの顔は目元の布に半分隠れているし、皺なんか瘦せずぎで頬がこけているのか判別出来ないのも原因だ。何となく、のん気そうな間延びした話し方と、これ以上無いほど散らかつた部屋を全く気にしない様子も年齢不詳に一役買っていた。

「相変わらず良い男つぶりだね～。」

怒りと呆れ果てた様子を隠しもしないフォリアに全く臆せず、にへらつと笑う。こめかみを押さえて怒りを無理やり発散させているフォリアを見て、少し意外に感じた。

何か微妙に彼女に頭が上がらないのだろうか。

「ほら、女の子が来るつて言つてたから、一部屋空けてあげようと思つたんだよ～。試作の自動荷物運搬機を使つてや。」

彼女が指差す方向にワーディングから繋がつている部屋があった。ただし、開いたドアの向こうにはまだ大量に荷物が残っている。

「だつたら無理せず、また部屋を増やせば良かつたらう。なんでこんな惨状になつてるんだ。」

「もつと早くに来ると思つたから、先に階段に荷物をどかしてあげようと思つたんだよ。泊まりに来る女の子つて初めてだしさ、田の当たらない部屋じゃ悪いかな～って思つて、ここにしたの。」

えつへんと、まるで小さな子どもが褒めて…と言つような感じで、

彼女は続ける。

「んで、試作機を超特急で動かしたまま寝ちゃつたら、こいつなってたワケ

「・・・どう考えても、あの部屋にぎっしり詰まっていた荷物が、階段に置ききれる訳無いだろう。それに自動で階段に運ばせたと言うなら、この部屋の惨状は何だ。」

「ん~? 向こう見てないからわからないけど、ハピナー達にも手伝わせてたから、運搬機は階段に置けるだけ置いて、置く所が無くなつてからあの子達がこっちに置いたんじゃない?」

そういうえば扉の前の雪崩荷物の中に、宝石が埋め込まれたボロボロの小さな荷車があつた気がする。まさかあれか?

「で、女の子は?」

最早何も言う気が無くなつたのか、座り込んでいた私をフォリアが無言で指し示す。

会話によつてへたり込んだわけではなく、朝からの荷物運搬に流石に腰が悲鳴を上げ、座り込みながら荷物を移動してたのだ。

丁度ソファの死角に座り込んでいたため、見えなかつたらしい。ソファの背からいきなりシルヴィアが顔を出した。

「あれ?・・・男の子だ。」

濃い紫色の田隠し布が顔の半分を覆つても、非常に感情が素直に外に出るらしい。

やつぱり男の子にしか見えないのかと思いながら、そのまま正座をして頭を下げる。

「はじめまして、アーランです。お世話になります。」

ちょっと変だけど、立つて挨拶する「」ことが出来ないぐら^レい色々な意味で疲れてたので、許してもらおう。

彼女は後ろを振り返り、「」そと机の書きなぐつていた紙をどうかすと、多分メモ用紙にしていたらし^レい紙をひっくり返して読み始める。氣のせい^レでなければ、レジ^レテからの手紙らしい。ちらつと見えた文字に覚えがあつた。

「うおーとか、奇妙な声を上げながら手紙を読み終えた彼女が、呆然としたようにテツラ人・・・と上を見ながら咳く。そして、はつと気がついたようにこちらを見て、でもやつぱり女の子か!と騒ぐのを、フォリアの手が遮る。

「どうしてその文面で、女の子が来る^レとしか覚えていないんだ。」

シルヴィアの手から手紙を取り上げ読んでいたフォリアが、ため息と共に突っ込んでくれる。思わず目をやつたフォリアが、何とも言えない顔で頑張れ。と眩いたのが忘れない。

あれから一月以上経ち、不思議な魔術具で埋め尽くされたこの館での生活も大分慣れた。

レジ^レテ達から何度もまつた連絡で、フォリアの言うとおり長引きそうだと言うのも判っている。シルヴィアも変わった人だけれど、充分良くしてもらつてていると思つ。

だから今感じている不安は一つだ。

私、ここで長期間やつていけると思つけど、外と違つ一般常識を身につけてしま^レいそなんですが・・・。

デザートの器を洗い桶に沈めながら、これぱっかりはどじょ
もない不安をため息と共に振り払つた。

峠谷の古塔 ③（後書き）

珍しく短期間の更新です。
誤字脱字、感想などございましたら一言でも頂けると嬉しいです

ここにきて一月以上。最初の一週間は掃除に明け暮れたけれど、ようやく最近はきちんと毎日のペースが出来てきた気がする。

居候の身としては、動いていた方が気が楽だしね。毎日のリズムが整うと気持ちも少し楽になる気がする。元の世界にいた時は、仕事以外はぐ〜〜たらしてたけど、環境が変われば人も変わるわけだ。

さてさて。まずシルヴィアの寝ている午前中に家事を進めるのが、一日の始まり。

洗濯物を洗い桶に入れつけて置きながら、軽く部屋を片付ける。シルヴィアの家は思ったよりも広く、しかもアリの巣の様に入り組んでいるから、リビングキッチンみたいな主要な部屋しか掃除をしなくとも、結構大変。

一通り洗濯物を干し終えると、次はお昼とお夕飯の下ごしらえ。基本的にシルヴィアは一日二食しか食べないので、同時に作つてしまつ事が多いかな。

巨大な貯蔵庫には、充分な蓄えの食材が新鮮なまま並んでいるので、好きな料理を作ることが出来るし、失敗してもフオローが効きやすくて助かる。

2ヶ月前に貯蔵した生鮮食料品が、何故新鮮なままなのかは不思議だけど、最近はあまり一々驚かなくなってきた。

なんせシルヴィアの家は、不思議な魔術器具のオンパレード。

私がこちらの魔術具を見て驚くのは当然として、こちらの世界の人から見ても驚くような道具が、この家には山ほどあるらしい。

なので最近はこれは何?とか聞かず「あら便利」位の感覚で使わ

せてもらつてている。
人間慣れつて大事だよ。

図書室と言つ名の納戸から料理の本も数冊発見したけれど、基本的に創作料理が多い。なんせ書いてある材料名や調味料名がわからないので、仕方ないと言えば仕方ないのかな。それよりも根菜・葉のもの・白身魚・赤身魚みたいに自分の知つてる分類で分けてみた方が案外美味しい物ができる気がするしね。

折角見つけ出した料理の本は、丁度よかつたので有意義に漬物石代わりに使つてゐる。

太陽が中天を大分過ぎた頃、ようやく彼女が起きてくると午後からは魔術具の作成の手伝いをする。

かといって、私が何を作れるわけでも無く、基本的に彼女からの質問攻撃に答えるのが仕事だ。

レジデは私にこちらの世界で生きていくのに必要な知識、風土、経済、世界情勢、生活習慣を教え込もうとしてくれていたけれど、シルヴィアはあくまでマイペース。

逆に元の世界にはどんな道具があつたか、こっちの世界で不思議に思ったことは何かとという疑問の嵐をぶつけてくる。

実際今も彼女が作つてゐる魔術具は、最初の頃、私が掃除機が欲しいー！と叫んだのを聞きつけて、掃除機とは何だね？と、作り始めた物だ。

彼女の好奇心はそこに留まらず、テツラには他に生活家電にはどんな物があるか、コンセントや電気、電池の仕組みまで話が多岐に渡り、こっちが知恵熱を出しそうだったので、まずは一旦停止。

取りあえず、私がこちらの世界の言葉やここで生活に慣れるまでは、一作目の掃除機作りに専念する事で合意してもらつた。

今も彼女は手元にある、私が描いた掃除機の絵（一般家庭にありそうな掃除機、ステイックタイプの掃除機、円盤型の自動掃除機など）とにらめっこしている真つ最中だ。

「・・・掃除機って面白いよね、風を使って粉塵を一箇所に集めようって考えがダイナミック。」

「私にしてみれば、掃除機を作るのに宝石を加工してしまうシリヴィアの方が、ダイナミックですよ？」

ソファにだらしなく寝そべりながら、書類をめくってるシリヴィアの髪を踏まないよう注意し、隣のソファに腰を下ろした。

ただ話しに付き合うだけでは手持ち無沙汰なので、手に持っていた大きな箱から、幾つもの布袋を机に並べる。

そして最後に箱の底できらめく、まさに玉石混合の石を覗き込んだ。

あまり石の名前に詳しくないけれど、ローズクオーブ・アメジストのような水晶系のものから、その辺に転がつていそうな不透明な石、玉砂利、ルビー・サファイア・イヤのような透明度の高い宝石まで、ありとあらゆるタイプの石がビー玉のように箱の底でひしめきあっている。

相変わらず凄い箱だ・・・。子供ものおもちゃ箱みたいな雑多さだけれど、ジュエリー好きなら卒倒するかもしない。

私達の生活で外せない電力と言うものが無い代わりに、精霊の力を封じ込める鉱石が世界中いたるところで使われているらしい。

以前レジデが見せてくれた魔法は、紙に書いただけで皮紐が新しくなったけど、あれはレジデが魔術師だから出来た事。

普通の人人が使う魔術具は、魔方陣と精霊の力の両方がそろつて初めて動くそうな。

そう言われて、私が毎日お世話になっている台所のホットプレートを見てみると、確かに材質は何かの石で、平べつたい円盤形の石の中央には魔術文字が彫つてあった。

理屈は良くわからなくてもTVは見れるし、電子レンジも使えるつていうのに似てるかもしね。

取りあえず、透明度の高い（多分値段も高いであろう）石を選んで、布袋に分類していく。

レジデとのやり取りで知ったのだけど、シルヴィアの作る魔術具は精度が凄まじく高く、王宮や魔術学院から直に依頼が来る程なんだそうな。

だから彼女はそんじょそいらの貴族が太刀打ち出来ない程のお金持ちらしい。

どう見てもそんな風には見えないのだけれど、彼女の仕事道具であるこの箱も、売れば普通の人が一生遊んで暮らせる額になると言わると、納得するしかない。

・・・だってまだ同じような箱が、床に沢山転がってるし。

それならこんな辺鄙な所に住まなくとも良いんじゃ。と一度本人に聞いてみた所、こんな素敵な場所は無い！…と口角泡を飛ばして力説された。

天才肌の彼女には、海に通じる川が流れ、渓谷をわたる風と火山山脈に通じる鉱石の取れる崖の中と言つのは、絶好の住まいなんだそうな。ここまで濃密に火水風土の精霊たちが遊んでいる場所はそうそう無いらしい。

しかも泥棒も入れないセキュリティの高さ…面白みの無い煩雜な依頼が来ない辺鄙な所も最高…と、歌うように言われた日には、頷くしかない。

「そう言えば、こちらの人は装飾品として宝石を付ける事つて無いんですか？」

元の世界で見たよりも、ずっと甘いカッティングをされた宝石を袋に入れる。

「んー？？？無くはないかな。・・・王侯貴族なんぞになると護身具も兼ねてるし、じゃらじら着けてるねえ。・・・・ただ労働階級の一般家庭の子がつけるかつて言うと、疑問だな。」

集中していると返事が無い事も多いからあまり期待はしていなかつたけど、今はきちんと返事があった。

「・・・だからアーランが普通の階級に見えないのも仕方ないよね」

「だた、返事があつたからといって、理解できるかはまた別の話で。一般階級の子がアクセサリーをつけないって話が、どうして私が一般人に見えないって話になるんだ？」

疑問が顔に出たんだろうか。こっちが聞く前にソファから細い指がによきつと出て「アーラン、耳に穴。」と指摘される。そしてそのまま、指をこちらに向けてトンボでも取るようにぐるぐると回して遊んでいる。

「こつちで一般的の子の装飾品つて言うと、木彫りの花とか貝のネットレスとか多い。耳に装飾品をつける穴を開けてるのは、非労働階級が普通〜〜」

歌うように言われて納得する。なるほど。以前ピアスを指摘されたことがあるのはその為だったのか。

ちなみに塞がないように、ずっと着けてたシンプルなピアスは、時の館を出てから外してある。もう塞がつてもどうでも良いしね。

無意識に耳を触っていると、むづくりとシルヴィアが体を起こし、置いてあつたお茶をぐびぐびと飲む。

ふつは一つと飲み終わったカップを机の上に押しやりながら、「だからトーロは女性として生きてくなら、落ちぶれた貴族の娘とか、閉じ込められて育った上級貴族の妾の娘辺りじゃないと、変」と、嬉しくない事を言い切ってにんまりと笑った。

峡谷の古塔 4（後書き）

なんとか一週間で更新できました。もはやチキンレース。
誤字脱字、感想などございましたら一言でも頂けると嬉しいです

こればかりは性格の問題だと思つ。

私だけ綺麗な洋服やアクセサリーが嫌いな訳ではない。もちろん美味しいレストランだって大好きだ。

休みの日にはマッサージとかで入念に肩とか腰とか揉んでもらつた日には至福だったし、年始年末には、もし宝くじ当たつたら・・・と言つお約束会話も楽しんだ。

それでも自分がこの地で生活をしていくにあたつて、自分の労働対価以上の生活をしたいとは思えない。自分の手で糊口を凌ぐ生活を覚えてから随分たつ。

小さな子供じゃないんだし、自分で手に入れた物で生活を営んでいきたい気持ちが強いんだと思う。

そういうえ、昔付き合つてた彼氏に食事を奢つてもひりつのも苦手だったな。

だからいくらこの世界で一番無難そうな身分が、”ワケアリ上流階級の娘” だとしても、断固として拒否したい。倍の労力をかけてでも、労働階級の人間に擬態したいのだ。

そんな私の気持ちを汲んで貰えるわけも無く。

手にしたソレはさらりと上質な生地で、見た瞬間に非常に高価な物だとわかった。

品の良い淡いクリーム色の上にさりげなく、かつ手の込んでいる

水色の刺繡が要所を飾つている。

本来ならば私に必要のない物であるう箱の中の一揃えを、ため息をつきながら一瞥して、他の箱も勢いで次々開ける。

淡い桃色の豪奢な部屋着、ロリータ服も真つ青なフリフリのドレス、セクシーな真紅の細身のカクテルドレス、光沢のある白いファード付きドレス、足元まである水色のワンピースドレス、揃いの靴やアクセサリー達。

これを・・・着ると？

もはや色んな意味での眩暈がしてゐる私の後ろから、ぺたぺたとシリヴィアの足音が聞こえてくる。重いため息をつきながら振り返ると、通信用の水盆を持ったシリヴィアが機嫌で部屋に入つてくる所だった。

「フォリアに頼んでおいた文物の洋服、ようやく届いたねえ～」
「・・・もう少し、地味な物は・・・なかつたんですかね。」

水盆を受け取りながら呻くように言つと、充分質素だと思つけど？と暢気な答えが返ってきた。机の上に水盆を置き、大量の洋服と一緒に届いた一粒の石を水の中に沈める。

何度もかわらない大きなため息をつくと、水盆の中では淡いピンクの石から小さな気泡が出て水面に波紋を作り出し始めた。

徐々に大きくなるその波紋にあわせるように、お世話になつたけれども今一番文句の言いたい男の声が流れてきた。

「アーラン。いや、アーラか？元氣にしてるようで何よりだ。少し遅れて悪かつたが、シリヴィアから頼まれた品物を幾つか送る。上流階級の女性のドレスと小物類だ。

「うちの世界では兄妹で似た名前をつけることは珍しくないからな。男の時はアーランで女の時はアーラ。良いんじやないか？とつ

さの時でも聞き間違えないだろ？。

ドレスは気に入ったか？・・・きっと今お前は渋い顔をしているんだろうな。喜んでドレスを着るよつとは思えない。

当たりか？まあ、諦めるんだな。確かにシルヴィアの言つ様に、労働階級に紛れ込むには無理が多すぎるとは俺も思つ。

それでも、その塔の中で着れるようにボリュームの無いドレスを店主に選ばせたから、シルヴィアのリクエストよりは、大分地味な物を選んだつもりだ。

その内慣れたら、俺の趣味のドレスも贈つてやるよ。・・・絶対着そうに無いがな。

それと流行の読み本や戯曲の声石を手に入れた。

若い男女の声が入っているものを中心に選んだから、これもイントネーションや聞き取りの勉強に良いはずだ。

レジデは子どもが聞くような物語の声石を送れと言つていたが、戯曲の方がより生活に近い口調で話すからな。こっちの方が参考になるだろ。

・・・あ、レジデと言えば、既に聞いてるかもしけんが、あいつは外側からの結界強化の為に西へ旅立つた。時間結界を張れる魔導師が他にも何人か同行してるから、長くても一ヶ月位で戻れるだろう。

俺も内部結界の強化と教団の調査が終わつたら、一度そちらに顔を出すつもりだが、いつになるとは今の段階では言えんな。・・・まあまた連絡する。

・・・他に何か言う事あつたか？・・・一通り伝えたか。・・・あー、そろそろリバウンドも無くなる時期だろうが、トネリ山脈は間違つても越すなよ。隣国のクリストファレスは光の教団の本拠地

だ。大人しくしておくよつに。この位か。

お前が一番着たくないであろう洋服の下に、一枚、上級女官服を入れておいた。一番地味だが一応着衣や女性の所作の練習にはなるだろう。・・・まあそれでシルヴィアが納得すれば、だがな。

健闘を祈る。」

相変わらず皮肉屋な彼も元気そうで何よりだ。忙しいであろうこと、2人ともいじりやつて時々連絡をくれる。申し訳ないやら、ありがたいやうだ。

大量のドレスに少し憂鬱かつ恨みに思つていた気持ちも、やはり声を聞けば安心と嬉しさが先にたつ。

まあドレスの事は半分自業自得だしな・・・。

声が終わると共に動かなくなつた水面を覗き込み、ただの灰色の石に転じた石を拾い上げ、いつもの箱にしまった。

そもそもなんでドレスが送られてきたのか。

いつもは夕飯の時間が終わるこの時間は、読み書きの練習をしたり文法の間違いを復習したりと主に語学の練習に費やしてる。なのに何で今日は大量のドレスの前でため息をついていたかと言うと、やっぱり私が悪いのだと思う。

私がもう少し年相応に見られるよつになりたいと拘つたのが原因だからだ。

アーランの時、つまり男装している時は別に良いんだ、子供に見られても、だつてまさか20代後半の男性に見られるのは無理だし、男子として誤魔化していく分には10代前半と言つるのは・・・まあ仕方ないのだと思う。

でも女性としては20代・・・駄目ならせめて18前後に見られ

たい！とシルヴィアに切に訴えたのが失敗だった。

フィーナやシルヴィアの様な成人女性の発音を覚えようとしたら、男性よりも女性は年齢や階級で言葉遣いや発音が明確に違うと指摘され、そもそもどんな年齢のどんな階級の人間をイメージしてのかと、聞き返されてしまった。

考えたら日本語だつて「マジ社長ウザインんだけど。株主総会とかつて、ぶっちゃけアリエナイ。」なんて言う社会人女性はいないし、「明日の部活が終わりましたら、大変申し訳ありませんが同級生一同、体育館に」足労願えますでしょうか。」なんて言ひ中学生もいたら不気味だもんね。

で、結局一通り私の話を聞いたシルヴィアは、いきなりフォリアにドレスを注文し始めたのだ。慌てて止めた私に「非労働階級の成人女性の発音を覚えるなら、服を着たほうが絶対早い。あと労働階級の成人女性は無理があるから駄目……。」と聞く耳を持つてもらえず、今に至る。「うう。

「女官服なんて頼んでないのに。アーラ、この服以外でどれが着たい？」

がさごそとドレスの山の前で遊んでいたシルヴィアが、濃紺のシンプルかつ厚手のワンピースを端にのけて聞いてきた。

「その女官服が一番無難そうに見えるので、ぜひそれが良いんですが。そして今更なんですが、やっぱりドレス着ないでも発音練習出来そうなので・・・着なくとも良いですかね。」

駄目だらうなあと思いながらも、最後の抵抗を試みる。シルヴィアの着せ替え人形になる時間があるなら、普通の語学練習に努めたほうが良いと思うのだけど・・・。

「一度着てみればわかる。取りあえず着てみ」

一番最初に開けた箱・・・ランジェリーが入っていた箱を私に押し付けながら、ソファにどっかりと座り込んだ。

峠谷の古塔 5（後書き）

書いてあつたのにひらするのを忘れていました。
暑さか？歳か？両方なのか？

氣を引き締めて頑張ります。

シルヴィアの指導の下、何とか最低限の下着を着け終わった段階で既に幾つも分かつた事がある。

まことにかく苦しい。それに凄まじく動きが非常に制限されるが、このコルセット。

友人の結婚式に呼ばれて着た着物を思い出すけど、こちらも同じくらい辛い。腕もろくに上げられない。

ウエディングドレスの下に着るビスチェのような、ぴったりとしたコルセットに締め上げられているのだから当然と言えば当然だけど、これじゃあ間違つても大声なんて上げられない。酸欠で死ぬほんと。

どうやらシルヴィアの言っていた「着ればわかる」と言つのは、このコルセットをして美しく発声出来るようになつてているのが、こちらの世界の上流成人女性の言葉遣いという意味なのだろう。このコルセットをして食事をしたり日常生活をおくれるのか、こちらの女性は。

立つてるだけで眩暈がしそうだ。

しかもこのコルセットは、中世のドレスのよつてウエストを細く見せる為に締め上げられているのではなく、なんと胸を寄せて上げてテコルテを綺麗に見せる事のみに意識をおいているらしい。

だからビスチェの胸の部分は下半分は堅い素材で出来ていて、上半分は無い。胸の頂が隠せてないなら下着の意味が無いんじゃないかと叫ぶ私に、上半分はシースルーの布で胸の形をドレスに合わせて微調整すると云つるのが一般的だと返された。

マジですか。どんなエロ下着ですか。

「胸元の開いて無い服を着るのは5歳ぐらいまでで、10歳にもなれば普通に胸元の開いている服しか着ない」。非労働階級で胸元を隠すのは喪中か再婚拒否の未亡人ぐらい。後は身分が高くて、王宮に仕官していると胸元は隠す。」

すごい執念に感じるのは気のせいか？

確かにさ、日本の流行のメイクだつて、目ばかりぱっちり大きくする事に重点が置かれててアイプチ、付け睫毛、頭切開まであって他国から見たら充分不自然だし、歴史を遡つて世界各地を見ればベルサイユ宮殿では1mを超す巨大カラツラが女性の頭を飾り、中國の纏足てんそくにいたつては異常の一言だ。

だからデコルテ部分が顔と同じ位大切っていうのは、美意識の観点からしたら、わかるっちゃーわかるんだけど・・・真冬でもデコルテの開いた服しか着ないって言つのも凄い。

床に並べられたドレスは確かに全部胸元が開いている。セクシーナカクテルドレスはともかく、ロリータ服までもだ。

ソファにふんぞり返つていたシリヴィアが、後に隠していた濃紺のワンピースを広げて見せると、胸元から首の所までは白い生地がデコルテを隠している。

どう考へてもこのくそ寒い中、ハイネックの温かなドレスに手が伸びるのは当然だと思うんだけど、お貴族令嬢は寒くないんですかね。

こままで風邪を引きそなので、ボリュームの少ない水色のワンピースドレスを着る事にする。カシュクールみたいになつていい部分に少し手間取つたけど、とりあえず無事着られたらしい。靴だのアクセサリーは勘弁してもらおう。だって小物までそろえた

所でスッピンほさほさですよ？鏡の前に立つ魔氣はこれっぽっちも無い。

なのに

「それにも予想通りアーラはドレスが映えるね～。社交界デビュー出来る勢いだ。」

と嬉しそうに言われても、胡乱な視線しか返せない。

「信じてない顔だ。でもさ、子供の頃から胸元開けて金粉だの真珠粉だの撒き散らしてるわけでしょ？10歳にもなれば胸元まで化粧して香水つけて毎日やつてるからねえ。そこまで綺麗な肌つて中々いない。」

「そ、そこまで子供の頃から色々やつたら荒れてて当然の気がしますが・・・。取りあえず話を聞くにテコルテを隠すつて事は”女”を放棄しているつていう宣言みたいなモノなんですかね。」

「上手いこと言つ。たしかに胸元を隠してるのは女を放棄している立場の人間だ。だから歴代の神子姫も首元まで隠してハズだよ」「神子姫？」

「そう。隣国クリストファレスの国教である”光の教団”の巫女頭の神子姫はアラン・タトルの化身とされているからね。巫女姫つて位だから女性がなるものだけど、対外的には”女”じゃないんだよ。」

「

そう言えばフォリアもクリストファレスに近寄るなって言つてたな。脳裏に改めてクリストファレスと言う國を刻み込む。そう言えばたしかシルヴィアが光の教団に詳しいとも言つてた氣がするし、こちらに来てからは日常を回すことで手一杯だつたけれど、きちんと聞くべきだよね。

「シルヴィア、光の教団とクリストファレスの事を・・・」

「教えてあげてもいいけど、もう少し上手に女言葉を話せるように

なつたらね。今ままだと女装した男の子にしか見えないから。
・そういう性癖の男性にもてたくないでしょ？」

遮られた質問に対する返答にどんな性癖だと心中で突っ込みながらも、それ以上追及出来そうもなかつた。

なんせ、そろそろ真面目に息切れと眩暈がしてきたし。

こちらの世界に来てから体重計なんて乗つていなければ、痩せただけは確実。だけど締め上げているのはウエストではなく、ハイウエストだから真面目に息苦しい。

どれだけ痩せていようが、ここを締められたら息が出来ないのは当然だと思つんだけ、慣れるんでしようか？この「ルセット。

私はこの塔からずつと出ないし、寝巻き＆起き巻きになつている長いガウンに似た洋服を着て『シルヴィア』にも、是非この一式を付けてもらいたい。

それともシルヴィアは、この拷問具をつけても普通に動き回れるのだろうか……。

訽然としないながらも、いつしてシルヴィアの思惑通り毎夜ドレスを着て女性の所作と发声練習に明け暮れる事になつた。

成人女性に見られたいなんて言わなきや良かつたと、毎晩後悔しながらも。

「おいらの世界に来てから初めての冬になつた。

異世界でも元の世界でも雪だけは変わらない。静寂と安寧と無慈悲さで、全ての物を閉じ込める。

リバウンドの危険性がある期間が終わるに伴って深い雪に閉じ込められてしまえば、一步も外に出られない。軟禁延長となんら変わりないけど、やる事も覚える事も沢山ありますたし、自分の状態に不満を持ったことは殆ど無かつた。こちらの世界に来て半年弱、相変わらず私の世界はレジテとフオリアそしてシルヴィアのみ構築されていた。

アーヴィングの批評です。

「あ”――もう最悪~~~~~。」

シルヴィアの作つた掃除機試作品2号「吸い取るちゃん」を使つてリビングを掃除をしていた私の目の前に彼女が現れたのは、なんとまだ午前中の事だった。

「おせちりやが二種類ある。どうしたんですか、こんな朝早く。」

本当に朝早い時間じゃなければ、ここに来て早三月。シルヴィアがこんな時間に自主的に起きてきたことなんて一度も無い。眉間にしわを深くして、む~~~~~と呻あながらいつものソファーに向かう。

彼女にとつての冬服なのか、何枚も重ねたガウンを十一単のようにするすると引きずりながら歩くその姿は、何か新種の生き物のようだ。

時々物が見つからない時は彼女のガウンの間を調べると挟まつて

いたりするから、どちらかと云つとブルドーザーに近いのかかもしれない。

掃除機を置いて、お湯を沸かしてお茶の準備をする。まだ朝ご飯も食べていなければ、煮詰まつてゐる時にいつも出す甘いお茶菓子とお茶を用意した。

「王宮から人が来る。」

台所にいた私の背中に、呻くような一言が飛んできた。

えつと？ オウキユウカラヒトガクル？ つて何だ？

あまりに意外な言葉に、とつさにシルヴィアの眩いた短い言葉が理解出来ない。

最近ではあまり彼女の言つてゐる言葉が分からぬ事は無くなつたのだけど、オウキ

ユウカラヒトガクルつて何だらう？

台所からお茶を運び彼女の前に置く、もう一度台所にお茶菓子を取りに戻つた頃、ようやくその意味が頭に浸透してきた。

「王宮から人が来る・・・・つて、何処にですか？」

我ながら間抜けな質問だけど、この際仕方ない。何故なら今現在、この地は名実共に陸の孤島になつてゐるからだ。

元々辺鄙な所にあつた上に、降り積もる雪はとどまる所を知らず、ごく一部を除けば窓すら開かない。たとえこの塔から出たとしても、あるのは道すらない雪山か、水かさが減り益々険しくなつた峡谷の合間に流れる川のみだ。

無理やり船で来たとしても、下の船着場の扉は開かないだらうし、一体どうやって？

「うーん。今日の面過ぎには着くみたい。」

心底嫌そうに顔を顰めたまま、彼女はお茶をする。

生活必需品調達以外の来客なんて数年に一度だと言っていたシルヴィアの言葉を信じるなら、こんな真冬に、しかもいきなり王宮から人が来るなんて・・・どう考へても徒事ではないだろう。じわりじわりと背中を不安が駆け上る。

もしかして何処からか私という不審人物の情報が漏れて、調査に来るのだろうか。レジデやフォリア、そしてシルヴィアに今以上の多大な迷惑をかけると?

不安が顔に出ていたらしい。思わず立ち竦む私を見て、手に持つた紙の束を机に置きながら

「アーランの事が原因じゃないよ。私の仕事関係」。

と安心させるように笑ってくれた。

そのまま促されるように横のソファに座ると、厚い紙束を渡される。この茶色がかつた紙とそこに踊る濃紺の文字には見覚えがあつた。

「これ、通信室にあつた手紙ですね?似たような物をシルヴィアの部屋に何度か届けた気がします。」

この家には通信室と私が勝手に呼んでいる小さな部屋がある。

こんな辺鄙な所に通常の郵便配達は勿論来ないので、日常の細々とした手紙は通信室にある大きな本に勝手に書かれしていく。

何も書いてないページは何をやつても切り取れないのに、一度文字が浮かんだページは触ると勝手に本から離れ、こんな紙束になるのだ。

最初は触った瞬間に本が壊れたのかと戦々恐々としたつけ。

「この本には誰でも通信出来て書き込める訳では無く、シルヴィアがコードを教えた幾人かからのみ連絡が来るらしい。手軽な気もするけど、見ていると不精なシルヴィアはそれすら田を通すのがめんどくさいらしい。

たまりにたまつた手紙を定期的にシルヴィアの部屋においておくのも私の仕事の一つだ。

早い話、FAXみたいな通信道具だと認識しているけれど、値段においてはFAXのようにお手軽にどの家にもあるような品物ではないらしい。

むしろ王宮とのやり取りに使っている位だ、非常に高価なのだろう。

「幾つかね、王宮から何度も催促されたけど断っていた仕事があるんだよねー。それについて話があるみたい。つたく何度も何度もしつこいー」

手紙の束の何箇所かを指し示して、子供の様に嫌そうな顔をする。ぱらぱらとめぐってみると、確かに再三の依頼書及び催促状に見受けられた。

彼女と手紙の様子からして一度断りの手紙を出してから、ずっとほつといたんじゃないだろうか？

手紙も後半になるにつれて、せつしまつた様子が見て取れる。そして最後の数枚では、ついに業を煮やして、魔術学院のお偉いさんと共に本日こちらに押しかけるという旨が記載されていた。
「の雪山に出向いてでも直に話さなくてはいけないと言つなら、彼女が断っていた仕事というのはかなり大きな仕事なのだろう。けれどそれはそれで疑問がわいた。

「シルヴィア、掃除機を始めとする試作品を作つてる時間があんなにあつたのですから、こちらの依頼をこなしても良かつたのでは？」

彼女はいつも何かを夢中で作っていたけれど、私が来てから作っているものは全部仕事ではなくて、試作品。

掃除機だつたり、食器洗浄機だつたり、小さな動く電車の模型だつたりと、テツラにあって面白そうな物を片つ端から仕様書を作り、同時に幾つも試作品を作っていた。

逆に言えば二月、彼女が他の仕事をしているのを見た事が無いとも言えた。

「へんな事言つね? だって王宮からの依頼はただの魔術増幅器だよ? ! そんなの今まで何回も作ったし、他の人だつて作れる。一度断りの返事は入れたんだし、向こうだつて意図はわかるはずなのに。けど今アーランと作ってる子達はまったく新しい魔術具でしょ? どっちを取るかなんて比べるまでも無いよ。」

でもまさか押しかけてくるとはなあ~と憂鬱そうに落ち込む彼女を見ながら、とりあえず微妙に自業自得らしこと結論付けて、安心する。

彼女の仕事の事で来るならば、私は何処かの部屋に隠れて過[.]せば良いだけの話だらう。

まさか私が応対しなくてはいけないなんて事はありえないだらうから。

今思えばこの時点では手を打つていれば、未来は変わっていたかもしない。

もしくは、リバウンドの恐れが無くなつた時に、何か策を取るべきだったのかも知れない。

けれども私はあまりに無知すぎた。

「ごく少数の人間に守られた小さな異世界の中で、どう上手く誤魔

化して生きていくかを考えている事 자체が甘かつたのだ。

ナチスから逃れる為に小さくなつて生きていたアンネフランクの様に、異端者が隠れて生きていく事を本氣で考へるべきだったのだ。

必死で元の世界に戻る方法を考へてくれていたレジーヌの手伝いがしたかった。

長々フォリアやシルヴィアの迷惑になりたくなかつた。こちらの世界でも自分で自分の糊口をしのぎたかった。その為にも非労働階級の成人女性と見られる必要があつた。

けれどもそんな「自立」を考へていた事 자체が、間違いだつた事をこの時の私は気がつく事が出来なかつた。

砂時計の砂が自然と下に落ちるように、私と言う秘密はレジーヌの手をこぼれ、フォリアとシルヴィアの手の上に零れ落ち、今までにシルヴィアの手の上からも溢れ出そうとしていた。

その溢れ出た先に何が待ち受けているかも知らないまま。

朝から降つていた雪は毎を過ぎても止まず、それどころか次第に強い風も出てきたようだ。

広い豪奢な応接室の窓は、そんな風の力にもびくともしないけれど、音を聞けばだいぶ吹雪いてきたのが分かる。

そろそろ終わりにしようかな。

腰を伸ばしながらぐるりと部屋を見渡し、一通りの掃除が終わつたかの点検を始めた。

もう半刻もすれば、王宮からの使者が来るから急いだ方が良いだ

らひ。

一体この古塔の何処に来客を招くのだらうかと不思議に思つていただけれど、シルヴィアの住まいは広くて深い。

崖の中を蟻の巣状に広がる住処の中には、きちんと来客用の応接室が用意されていた。

いつも過ごすリビングからもつとも距離が離れている半地下の部屋で、むしろこちらが正面玄関にあたるらしい。

大きな玄関ホールから続く応接室には中央に円を描くように応接セットが置かれ、シャンデリアや大きな額縁に収まつた絵が重厚感を与えている。

華美まで行かず、地味でもない。かといつて重厚感からくる重苦しさも無い、非常に居心地の良い洗練された応接室だ。

隣にお茶を入れる為の小さなキッチンと控えの間まである。

どうやら私は勝手口からいきなり台所に上げられたような感じだったみたい。

シルヴィアの散らかりまくつた生活スペースと違い、きちんとソ

ファには埃除けの白布がかけられていたし、探ししたら来客用のティーセットもそろっている。

江戸の長屋の一角に、中世ヨーロッパの応接室がくついているような凄まじい違和感。

この家でこんな場所があるなんて想像すらしなかったよ。

壁にかかつたランプだけでなく、卓上ランプにも明かりをいれ、最後に暖炉に火を入れた。既に部屋は快適な温度になっているけれど、この吹雪の中に入る人たちには暖炉は必要だろう。

豊んだ埃除けのカバーと掃除道具を控え室に片付けて、複雑な長い廊下を戻るとちょうどドリビングに身支度が終わったシルヴィアが部屋から現れた所だった。

「…シルヴィア？」

否、シルヴィアの面影を少しだけ残した女性が現れた、と言つのが正解だろう。

その細い肢体は鈍い光沢のある葡萄色の長着で包み込まれ、白銀の飾り紐が腰の所で帯代わりのように重い長着を留めている。

裾には同じく銀色の刺繡が細かくなされ、本来なら暗くなりがちの色味を実に品良く引き立てていた。

長い銀糸の様な髪は丁寧に梳られ、綺麗な三つ編みにして前に流しているが、いつそ腰の飾り紐と対の意匠のようにすら見え、美しい。

顔にはいつもの目元を隠す布の代わりに、目元が開いていない白い仮面を着け、その仮面も大きな紫色の石や細く碎いた白い螺鈿が埋め込まれるなど、趣味の良い細かい細工がされていた。

凜とした立ち姿。決して絶世の美女ではないけれど、目を離せない

い威厳とオーラ。

いつもの背を丸め、振りの無い着物のようなガウンを何枚も着込み、あまつさえ長すぎる髪で掃除をしてしまつ、the干物女代表のシルヴィアと同一人物と断定するこはあまりにも違ひすぎた。

「掃除ありがとうね。アーランは」うちに届てくれれば大丈夫。後は私がするからゆづくつして」と。

さすがに声は一緒だけど、口調まで違うし。てか、普通の速度で話せるよー?」

姿形の印象が変わった事よりも、妙なところに感心してしまひ。こちらを振り向きながら、微笑むようにして話す彼女を初口に見ていたら凄い印象違つたろ?。ここまで変わると軽く詐欺だ。

年齢不詳のカリスマ占い師とか出来るんじゃないだろうか。色々な事を突っ込みたいけど突っ込めなくて、口をパクパクさせる私の前で、彼女は台所の棚を「こそ」漁り始める。

「・・・えっと、何をお探しで?」

お高そうな服が汚れるといけないので、恐る恐る申し出る。代わりに探そうと台所に行くと、小皿の上に干からびた梅干のような物を見せられた。

何だろ?これ。

「ようやく発見できた口紅、10年近く前のだけど食用油かなんか混ぜたらまだ使えるよね?」

どんなに姿は変わつても、やつぱりシルヴィアはシルヴィアだと確信する一言に、何故か心から安堵しながら、口紅に混ぜる蜂蜜を

湯煎にかけはじめた。

* * *

「ええと？・・・私が顔を出すんですか？」

シルヴィアが応接室へ消えてから随分長い時間が経つた。
どうせ込み入った話なのだろうからといつもより時間をかけて作
つた夕飯の支度も終わり、ハピナー達にご飯を上げていた所だった。

凄まじく不機嫌な彼女が戻ってきたのは、

いつも外にいるハピナー達も今日の様にあまりに凄い吹雪の日には、こうやってご飯をもらいに遊びに来てくれる。

一人が充分楽しいシルヴィアでも、たまには人恋しくなるらしい。ハピナーの為に、わざわざ雪が積もっても開けられる窓を用意してあつた位だ。

時に小さな羽根をパタパタと動かして、一生懸命手の上のリンゴを食べる小猿達の姿は何とも言えず愛らしい。私にとつても唯一の癒しの時間だ。

さつきの口紅に混ぜる為に出した蜂蜜を田代とく見つけ、きりきらした田で見つめられたら、も～適わない。

いつもより贅沢な薄い蜂蜜がけのリンゴは、ハピナー達の心をがつちり掴んだようだ。

通常なら遊びながら食べる事が多いのに、今は3匹で一心不乱に食べている。

「・・・王宮の人たちは帰られたんじゃないですか？」

第三者がすぐ傍まで来ている不安をハピナー達に解消して貰つていたのは良いけれど、癒されまくつて、頭の螺子が少し緩んでいたらしい。

不機嫌な顔つきのシルヴィアとは反対に、緊張感が戻つてこない。そもそも何で私がここにいる事をわざわざ伝えたのだろう? とほんやりと思つ。

「まだ。あいつら勝手に助手候補だつて言つて、3人もぞろぞろ連れて來たのよ。王宮の仕事を断る位だから人手が足りてないのだろうつて。アーランのことを出さなかつたら、このまま最低限一人は置いていくつて言つから、ビうじょうもなかつたの。」

イライラと軽くテーブルの足を蹴る。
なるほど。王宮と繋がりの強い人物を置いてかれたら、さすがに不味いというのはわかる。

「でもなんで私が顔を出す必要があるんですか? 助手は今いるからいらないって言うんじゃ駄目だつたんですか?」

「今まで散々助手をとらないで断つてきたからね。そんな人間いないと向こうは思つてる。ハッタリだと。だから話さないで良いから後ろについてしてくれる? 顔さえ見せれば、そのまま大人しく帰るという条件をつけたから。」

ハピナーの頭を軽く撫でて、小さな声で「めんと謝れられれば、私に出来ることなど限られている。

この長い時間の殆どは、私を彼らの前に出さないですむように、彼女なりに悪戦苦闘したあとなのだろう。どちらにしろ逃げ隠れ出

来る場所は無い。

「わかりました。なるべく話さないで、後ろに立っているだけで良いんでしたら顔を出します。」

厚い冬服の下のサラシが引き締まっているかの確認をして、心を落ち着ける為に一呼吸。

相手が欲しいのは私の情報ではなく、シルヴィアの知識。よほど悪目立ちしなければ、顔さえ見せれば全て丸く収まるはず。不必要に怯える必要は無いはずだ。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。

覚悟を決めて、シルヴィアと共に長い廊下に足を踏み出した。

峠谷の古塔 8（後書き）

拙く進めてきた物語を読んで頂きありがとうございます。
誤字脱字のご指摘含め、感想など頂けると嬉しいです。
がんばつて週一更新、なんとか守っていきたいです（半死

「わざわざ、すまないね。」

「いるなら、さつさと最初から出せば話が早かつたものを。」

にこにこと笑う裏の見えない好々爺と、吐き捨てるよつに話す力マキリ男。
応接ソファの座る二人の人間に対する第一印象はそんな所だらうか。

部屋に入るなり掛けられた声をシルヴィアはさらりと無視しながら嫣然と向かいに座り、後ろに立つ私を紹介した。

「ゴッドフィール殿、ロワン、こちらが再三お尋ねの助手アーランです。」

幾分皮肉が入った紹介を受け、軽く目を伏せたまま会釈を返す。笑っているけどすさまじく機嫌が悪いシルヴィアから事前に聞いた二人の人物のプロフィールを思い出しながら、そつと顔を上げた。掃除の時には広く感じた応接室も、ずらりと並ぶ男性達を見れば、なるほど最低限の広さだったのかと納得がいく。ソファの後ろに立つ幾人かの男性は取りあえずおいておき、最重要人物であるソファの一人に意識をやつた。

白く長い髪を蓄えた柔軟な顔立ちの老人がロワン、魔術ギルドのお偉いさんでシルヴィアとも顔なじみ。

こちらの魔術師の正装らしく、着ている物もたしかにシルヴィアと似ているデザインだ。重い灰色の長着を黒い飾り紐で締め、袖と裾には金糸で彼女と同じような刺繡が施されている。もしかしたらこの色合いや刺繡の内容で、魔術師としての格や立場を表している

のかもしない。

ぱつと見は温和な老人にしか見えない人物をシルヴィアは「変人奇人ばかりの魔術学院一の大狸」と評していたつけ。

縁側で猫でもかまつているのが似合いそうな風貌だけど、なかなか食えないお人らしい。

そして血色の悪い目だけギラギラしている中年男が、王宮からの使者コツドフイール。シルヴィアとは初対面らしいけど、彼女曰く「使いっぱなしをしないと生きていけない中低級貴族」だそうだ。まあ真冬のこんな所にお使いに来る位だから、大公爵とかで無いのは確かだらうなあ。

似合っていない大仰な意匠の貴族服は彼の貧相な体つきを殊更目立たせ、こちらを不躾に眺める視線と相まって爬虫類を思い出させた。

なんつーか・・・間違つても仲良くしたいタイプじゃなさそう。

「シルヴィア殿。人嫌いで有名な貴殿が大して役にも立ちそつもない、こんな若輩な助手を使つていてる理由をお聞かせ願おう。」

人のことを物を見る目つきで見やつてから、上から目線でシルヴィアに問う。

「魔術器具を作ることは鍛冶や宝飾工房等と違い年齢経験は関係ありません。それを専門外である王宮の方に理解して頂こうとは思いませんが、アーランは非常に得がたい助手。手放すつもりはありません。」

笑顔で話しているけど意訳すれば、部外者はすつこんでる。って感じでしょうかね。

さつさと帰れという雰囲気を最大限に出しながらも、丁寧な言葉使いと笑顔を駆使する・・・これが上流階級のテクニックだとした

ら、本当にシルヴィアの変わりようは大した物だ。

それに対しても苦々しげに舌打ちをするカマキリ男は、感情が外に駄々漏れで出世出来そうもないタイプ・・・はつきり言えば小物に見えた。

厄介だな。

どう考へても王宮の使者よりシルヴィアが圧勝しているのに、ここまで会合が長引いた原因は一つだろう。

更に置みかけようとしたシルヴィアの言葉より先に、絶妙のタイミングでやんわりとした声が入り込んだ。

「それにしてもシルヴィ。君がようやく助手を使う気になったのは学院としては非常に歓迎したい。なら何故他の助手を使うのが嫌なんだい？ 助手が多いほうが良いだろ？」

魔術師ロワソ。やはり思つたとおり、今回の裏ボスは彼らしい。ソファの後ろに控える私と同じく、それぞれ彼らも幾人かを後ろに控えさせている。

カマキリ男の後ろには帶剣している護衛が2人。大猩の後ろには助手候補と見られる3人の若い男性がそれだ。

「長い事一人で生活していたので、大仰なのは嫌いです。私は彼らの世話をする気はないし、師事するつもりもない。私の所で時間を無駄にする事は彼らの為にもならないでしょう。」

「それは本人たちが決めることだよ。どんなに辺鄙な所でもかまわない。天才と謳われる君の傍で学びたいと思う魔術師は少なくないはずだ。それに師事するつもりは無いとは言つても、アーラン君には作業を手伝わせているんだろ？」

にこにこと笑いながらも、ちらりと狸の片鱗を見せる。

肯定すればシルヴィアは助手を取り師事をするという前科を作られるし、否定すれば引き続き3人を置いていく理由になる。

アーランだから教えているのだと答えるには、私達には後ろ暗いところが多すぎた。

何が何でもシルヴィアに目的の物を作らせたいのが王宮だとしたら、口ワンの狙いはシルヴィアの技術の獲得と拡大と言つ所なんだろ？

王宮から頼まれてついて来た形をとりながら、今がチャンスと助手を置いていき既成事実化させるつもりらしい。

むしろそれさえ出来れば、王宮の目的など知った事ではない感じさえ受けるし。

昔こんな素敵な土地は無い！と歌うように話していたシルヴィアは、こないうやりとりが嫌いでこんな山奥に引っ込んだのか・・・としみじみ実感した。

そう思つて後ろに立つ3人をこつそり見てみれば、赤毛の素直そな少年、涼しげな目元の知的な青年、しなやかな体つきの猫目の男性、どれもタイプは違えど眉目秀麗。

きっと助手としての能力も魔術師としての能力も高い彼らは、前々からこの日の為に用意された人員なのだろう。

「約束が違いますよ。こちらに助手がいるならば、彼らを連れて帰るというお約束を守つて頂けないなら、こちらもそれ相応に対応させて貰います。」

あくまで笑顔のシルヴィアの態度が気に食わなかつたらしい。不機嫌そうに何か言い募らうとしたコッドフィールをやんわりと制して、口ワンは口髭を撫でながら驚いたような困つたような顔を作つ

た。

「そう不機嫌になることは無いだろう、シルヴィ。君が今回やりたくないと思つてゐる王宮の仕事を受けてくれる御礼に、少しでも君の作業を樂にする人員を連れてきたんだ。もし君の時間が取られるのが嫌なら、アーラン君の下に付ければ良い。君の仕事のサポートを一人でするには彼もまだ幼いだろう? そんなに一人きりの助手に負担をかける物ではないよ。」

丁寧に、けれども確實にコッドフィールの神経を逆撫として交渉決裂に持つて行きたいシルヴィアと、間に仲裁する形で入り込み、自分の要求を突きつけるロワン。

私の顔を殊更につこり見つめる瞳が悔れない。やはり彼はシルヴィアの弱点が私だと判つていて。

何か後ろ暗いところがあると判つた上で、下手に突っぱねるとコッドフィールの前で私の素性を確かめると、首元に見えない白刃を突きつけてきていいるのか。

これ何時間もやつていたんぢや、シルヴィアも不機嫌にもなるわ。シルヴィアとロワンのすさまじいタフネゴシエーション力に密かに感心しつつ、そろそろ潮時かなと身構える。

「・・・わかりました。それでは私にとつて役に立つ助手であるか試験を受けて貰います。それに受かれば一人と言わず三人の面倒を見ます。その代わり、駄目だった場合は今度こそお帰り下さい。これが最後の譲歩です。」

一人と言わず三人全員の面倒を。と言つ部分に心引かれたらしい。にっこり笑いながらロワンが頷けば、主導権を握りたいコッドフィールも慌てて大仰に、許そう。と言い放つ。

やぱりいつなつたか。

「アーラン、用意を。」

シルヴィアが溜息をつきながら合図をする。

小さく頷いてから、どうしても帰らなかつた時に備えて即席でシリヴィアと作つておいたテストの準備を始めた。

緊張した面持ちの助手候補の3人に手伝つてもらい、応接セツトの横に隣の部屋から大きめの机を運び込む。

更に備え付けのキッチンから大小幾つかの純銀のトレイを運び、机の上に並べ、最後に一番大きなトレイの上に少し大きめの布袋を出して、そつと乗せた。

「まったく。助手ぐらい素直に増やせば良いものを。方式によってはそちらに有利すぎないか。」

「コッソーフール殿にも納得して頂けるよつ、公平に致しますよ。」

無造作に立ち上がつたシリヴィアが布袋を緩め、全員に見せ付けるようにトレイの上にぶちまける。

「課題は簡単。これを分類して下さー。私が使いやすいよう

顔が映るぐらい磨かれた銀盆の上、流れ出した色とりどりの宝石の山に全員が息を呑んだ。

「ハ、これは……。」

思わず呟いたのは誰だったのか。

無造作に出された両手から溢れんばかりの宝石の山は、お貴族様であるうつコッドフィールですら息を呑み、驚愕のあまり皿を見張っている。

一番年下であろう赤毛の少年なんて、オロオロしながら顔色が赤くなったり白くなったりしているので、見ていて可愛らしくやら心配になるやう。

「ハハハまで見事な鉱石をそろえてこむとは……。」

真っ黒な鉱石を慎重に手に取り、うめくように呟いた老魔術師の発言にシルヴィアは軽く肩をすくめる。

物の価値が判らないと言つのは、ある意味幸せなのかもしれない。精靈の力をこめる、魔石としての価値が判らない私からすれば、見て綺麗かどうかの判断基準しかないわけで。

そういう意味ではこちらの世界の鉱石は、元の世界の宝石に審美的には確実に劣る。

美術館で見た昔の宝石のように全体的にカットが甘く、多分スワロフスキービーズの方がよっぽど綺麗で見た目も美しい。プラスチックの指輪・・・とまでは言わないけど、綺麗なビー玉やおはじき位の感覚だなあ。

魔石としての価値が高く、装飾用の宝石としては低級の石をそろえてあるんだと思っていたけど、専門外のコッドフィールが食い入るようになっている位だから、これがこちらの標準っぽい。

そんな空氣を物ともせず、キャンディボックスをぶちまけたような宝石の小山をざつくり4等分すると、シルヴィアは4分の一を布袋に戻し私に渡した。

「これから助手候補の3名にそれこの石を分類して頂きます。私が使いやすいと思う方法に分けて下さい。公平に保つために、アーランに先に分類させて布で隠しておきます。彼と同じ、もしくはそれ以上に使いやすい方法で分類できたら、彼らを受け入れましょう。」

ぎこちなく頷く彼らを尻目に一礼し、布袋を持ってさっさと備え付けのキッチンに隠れる。布袋の中から出した30個ほどしかない鉱石を、銀盆の上にひょいひょいと並べた。

時間掛けてやっても良い事無いし、早く帰って欲しいし。

どうしても他人と接触する時間が長ければ長いほど、ボロが出る気がしてしまう。少しの緊張は王宮の使者に対しての緊張と捉えられるだらうけど、度を越せば不審者になりかねないもんね。

仕事をしている時は「我慢言つなー！」と子供達に怒鳴りたいのを抑えてにっこり笑うテクニックを散々磨いたし、大丈夫。大丈夫。感情を顔に出さないのも仕事のうちだ。

最初はともかく、ロワンとコッドフィールの興味はシルヴィアに向いているし、後ろに控えている3人が失礼にならないように”助手アーラン”を探っているけれど、それは予想の範疇内。

小さく深呼吸を一つ。並べ終わった宝石達見えないよう銀盆の上に厚手の布をかけ、応接室と言つ名の戦場に戻った。

「それでは始めて下さい。」

応接セツトの横に運ばれた大きなテーブルの前に動いた3人は、その言葉に緊張の面持ちで頷いた。

シルヴィアとロワーンはそれぞれの動きを興味深く見ているけれど、専門外のコッソードフィールは手持ち無沙汰だつたらしい。

そもそもこんな山奥に来た事、長丁場になつた事、自分が主導権を握れてい無い事、全てが面白くないらしいカマキリ男は、不満そうに部屋を行つたり来たり歩いている。

王宮の使者つて、日本で言つたら皇族の使者なわけで。

今いるファンデール王国つて、確か大陸の東の方では有数の大國で先進国だつて聞いたけど、なんか目の前にいる爬虫類中年男からはそんな威厳がまったく感じられない。

大丈夫なのかな？この国。

そんな事をぼんやり思いながら見ていたら、どうやら皿をつけられてしまつたらしい。

助手がいるなら、ぬるくなつた茶を淹れなおせと命令され、淹れてみたらマナーがなつてないと言われ、何故始めから出てこなかつたんだ、玄関前の雪を掃つておかなかつたんだと、ねちねちと嫁イビリの様に鬱憤をぶつけられる。

尊大な物言いのわりに、シルヴィアやロワーンに見えない様に文句を言う所なんかも、嫁イビリっぽい。

このタイプは無視すると逆上するので、とりあえず恐縮した風を装つて謝罪する。

「私のような未熟者が王宮の使者様に満足のいくお茶など出せるはずも無く、申し訳もございません。王宮の方々の御前に出ます事は、かえつてお汚しになると思いました。」

人間何が役に立つか判らない。

スラスラこんな言葉遣いが出るのは、実はフォリアのお陰。

大量のドレスと共に送られてきた声石（こちらの世界の音声記憶媒体。CDやカセットテープみたいな物）には貴族のお姫様と従者の恋物語なんぞも入っていた。

恋愛ものが多かつた気がするのは何かの嫌がらせかとも思つたけれど、確かに色々な身分の人の話し方の参考にはなつたし、この際ほんとにありがたい。

カマキリ男はぶちぶち文句を言いながらも少し溜飲が下がつたのか、うろうろ歩くのをやめてソファに戻る。

王室の威儀とか尊厳とかそういうものを大事にしたいなら、躰になつていなか中低流貴族なんぞより、もう少しまナーをわきまえている王宮下士官とかを伝令係にした方が良かつたんじゃないのかな。

心の中で軽口をたたきながらも、実際はそんな単純なものではないのだろうと思つ。

身分制度が希薄な日本で生まれ育つたせいで、カマキリ男も「取引先の駄目上司」程度の感覚でとらえてしまつてゐるけれど、身より不確かな人間一人、簡単に殺してしまえるだけの権力を持つてもおかしくは無い。

レジデから聞いた話だと殆どの国は王政、もしくはそれに近しい政治制度で成り立つてゐるらしいし、世の中の主軸となつてゐる考え方を軽視するのはトラブルの元だ。

あのシルヴィアの変わりつぱりから見ても、それは感じ取れた。

労働階級の人間に擬態したいなら、もっと「身分」とそれに伴う常識を学ぶべきだと決意を新たにしたといひで、シルヴィア達に動きがあつた。

どうやら終わつたらしい。

3人のうち誰か1人でもお眼鏡に適えば良いのだから他人と同じ分類法にする意味はまったく無いし、カンニング不可とも言つていなかつたから、互いに横目で確認するのは当然なわけで。

3人の手元をちらりと見る。シルヴィアの予想通り私と同じ分類法は、無い。

「ふむ、終わったようだね。それでは年の若い順から発表させるんでいいかい？」

シルヴィアと共にソファに戻ったロワン老の言葉に、赤毛の少年は緊張のあまり泣きそうな顔で立ち尽くす。

私の実年齢の半分もいつてないであろう少年は、あまりにも素直な性格なのだろう。さつきから赤くなったり青くなったり白くなったり大忙しだ。

頑張れ、ワンコ！

まるで授業参観日の母親のような気持ちで応援してしまつ。

「お、お初にお目にかかります！僕・・・いえ、私は、まずそれぞれ4大精霊が宿りやすい魔石を選び、分類しました。」

銀盆の上で火水風土と言いながら、大小さまざまな石を振り分けていく。

「ここまでは確かに非常に基本的な分類法です。そこで更に補助的な役割に向く魔石を、別グループにして合計で5つのグループに分類してみました。」

以上です！とペニリとお辞儀を一つ。自分の名前を言い忘れたことを除けば、よく出来ました。あと挨拶をしながら机の角にぶつかったたけれど大丈夫だろ？

「非常にわかりやすい分類だけれど、残念ながら私はエルガイアの魔水石に水の精靈を宿して使う事はありません。私は他にも一般的には使われない方式で魔石を使う事の方が多いですし、合格点はあげられません。・・・基本も大切だけれど基本に捕らわれないようになります。」

シルヴィアが表情の読めない仮面のまま評価を下す。けれども最後は彼へのエールだつたんじゃないだろうか。少しだけ声が優しかった気がする。

緊張のあまり涙目になっているワン口は、最後の一言に感極まつたように深々とお辞儀をした。・・・また机にぶつかる音がしたけど、気がついてもいられないみたいだ。

次に出てきたのは涼しげな田元の青年。

白皙の美青年と言うやつだろ？ そんじょそこらの女性なんて全員惱殺されそうな容姿だけれど、どちらかと言うとあまり感情を表面に出さないタイプに見える。知的な雰囲気は、ともすれば近寄りがたいとも取れるかもしない。

彼は軽く会釈をすると、迷う事無く大きく5つのブロックに分類した。

「シルヴィア殿のお目にかかるて光榮です。魔術学院所属のクロムと申します。お見知りおきを・・・私が致しました分類は産地別に近しい分類法です。これらの魔石の中には遠方の物もあり、欠損した時に直ぐに手には入りません。」

低い声で朗々と語る彼の声には、何ともいえない不思議な説得力がある。

専門外の私には分からなければ、更に細かく地名や魔石の生産地の話に及んでいて、専門知識も深そうだ。

辺鄙な所に住んでいる事を上手くついた分類法だと思つ。けれども

「私は魔石を購入していません。」

根底を覆すシルヴィアの一言に、流石に啞然とした表情を返す。

「私は仕事の報酬を全て魔石で貰っています。それに所持している魔石は欠損を心配するよつた量ではありません。」

嫣然と微笑むシルヴィアに不合格を突きつけられ、美青年退場。どれだけ大量の魔石を所持しているかと、ソファの上でカマキリ男がブツブツ呟きながら目を白黒させている。・・・この人もなんだかなあ。

そして、最後が猫目の男性。

小さな銀盆の上に与えられた石を乗せたまま、足取りも軽やかにシルヴィア達に見やすいようにソファ前のテーブルに置いた。

「最後になりましたが、ティファーンと申します。孤高のシルヴィア殿のご尊顔を拝しまして恐悦至極に存じます。」

先程の美青年の雰囲気を陰とするならば、明らかに陽の雰囲気を背負つた男性だ。同じく眉田秀麗だが、先程の近寄りがたいクロムと違つて人の輪の中心にいそう。言葉だけを聽けば非常に堅苦しい挨拶も、につこり笑いながら彼が言えば嫌味が無い。

ほんとに美形男、揃いも揃つたりつて感じだな。『馳走様。

「シルヴィア殿の作品を幾つか拝見致しましたが、その発想もさる事ながら、精緻かつ大胆な石使いは類を見ません。そこで少々変則的ではありますが、魔石の分類を価格帯毎に大別してみました。」

銀盆の上で白く長い指が手品のように翻る。

「シルヴィア殿の所持している魔石の量は、通常の魔術師が持つている物とは比べ物にならないと考えました。また報酬が安価であるのに高価な魔石を使うことはありえません。しかし逆はあります。安価な魔石だとしても組み合わせ方によつては非常に強い効果を示す物もあるからです。」

ほ〜〜つ。魔石＝乾電池位に考えていたんだけど、先程から聞いていると石の種類によって随分個性があるらしい。

銀盆の上に並べられた石の配置で、ルビー や サファイア のような透明度の高い色の綺麗な石がこちらでも高価なものであると判る。ただ一番値段が高い石の位置に、艶すらない真っ黒い石が置かれているのが意外と言えば意外だ。

「ティファーンと言いましたか。あなたは何処かの工房に勤めたことがありますね？」

「はい。2年前まで蒼の工房で指導を受けておりました。」

「あまり一般的でないタロウスの縁石を見抜いたのは大した眼力です。ですが私は報酬を提示されてから品物を作ることは殆どありません。今回の王宮の仕事のように依頼を受ける事自体が稀なので、この分類では使いやすいとは言えませんね。」

半場予想していた答えたのか、猫目の中は何ともいえない溜息を一つついた後、真顔で一礼し、優雅に後ろに下がった。

やはり皆さん優秀。さて、ここからが問題だ。

ソファの3人に目をやれば、何か言いたそうなロワン老とゴッド
フィールを制して、私が用意した銀盆を全員に良く見える位置に移
動させるシルヴィアと目が合った。

「私の元で助手を務めることが、他の人にとつてどれだけメリット
が無い事なのか。お見せいたしましょう」

掛け声と共に、有無を言わさず布を取り払った。

かなり久々の更新です。

これを機にもう少し更新ペースを戻していきたいです（汗

布を取り払つた瞬間、幾人もが息を呑む声が聞こえた。赤・朱・橙・山吹・黄色・・・と少しづつ虹の配色になるように並べられた私のトレイの上は他の誰よりも美しく、色鮮やかだった。そう、それはまるで買つたばかりの色鉛筆のようだ。

「！」これはどう言う事だ！」

思わず立ち上がりてカマキリ男が叫んだ。

「・・・これは分類をしたとは言わないんじゃないかい？シルヴィ。」

グラデーション状態に置かれている石を見ながら、流石にロワン老人の言葉も困惑氣味だ。

彼らの言い分は、もっともある。

例えるならば、図書館の本がジャンルを無視して、全部サイズ別や背表紙の色身別に並んでいるような感じだろうし、私だって黄色い洗剤ボトルの横にレモンとバナナを置いて、更にその横に黄色いポテトチップスの袋が並んでいるような、色彩重視のスーパーに入りたくない。

だから私の弟子になつても意味が無いと言つたんです。と、そ知らぬ顔のシルヴィアの涼やかな声が響く。

「私は”私が使いやすい方法に分けて欲しい”と言いました。私は所持している魔石は全て覚えていています。膨大にある魔石をすぐに使うにはこれが一番楽なのです。」

本当は知識の無い私にはこの分類方法しか出来なかつたと言つのが事実だし、それが「見える所に無いと探すのが面倒」という、T

「片付けられない女のシルヴィアのツボに嵌つただけの話なんだ
けど、思わぬ副産物もあつたようだ。」

「ここの分類にしてから気がついた事ですが、例えば同じ青銀水晶でも大きさや純度だけでなく色味の深さによって動作にクセの様なものを感じました。現在色彩における魔石のクセを研究中です。・・・けれどもそれは市場では意味の無いこと。」

シルヴィア？

どこか虚ろな感じをさせる忍び笑いと共に、シルヴィアはカチンと紅茶のカップを爪ではじく。

「外の世界の人人が求めているものは、市場で生産できる目新しい魔術具、他に見ない高精度の魔術具、高価な魔術具を安価に作る方法などです。・・・言い換えれば、誰かが豊かになる仕組み。・・・けれども私は見る事の出来ない外の世界に興味がありません。」

声を荒げてている訳でもないのに、激昂しかけたコッソリードフィールですら一瞬息を呑むほどの感情の見えない冷たい声。

その場にいた誰もが、彼女からゆらりと立ち上る暗い炎を見た気がした。

二重人格者かと思うほどの彼女の変貌ぶりが、急に腑に落ちる。
ああ、貴女もだつたのか。貴女も自分の中に埋められない、心の闇と呼ぶにはあまりにも大き過ぎる虚無を宿して生きているのか。

「人は生きる為に息を吸う。私も私である為に魔術具を作っているだけの事。誰かが豊かになるためだけの魔術具を作ると言う事は、ただ息を吸うために生存している、もはや人間と呼べない存在に成り下がると同じなのです。」

だから、そもそも私から何かを学ぼうと囁つのが間違っているのです。

仮面の下から密やかに零れ落ちた言葉は、そのまま荒れ狂う吹雪夜に落ちて消えた。

時が止まつているかのように誰も動かない部屋の中で、暖炉と窓を揺らす音だけが聞こえる。

パチンと一際大きく薪のはぜる音が部屋に響いた。

それではと、やはり最初に口を開いたのは老齢の魔術師だった。

「吹雪も弱まつてきたみたいだね。そろそろお暇するとしようか。」

まるで呪縛が解けたかのように、時がゆるゆると動き出す。

吹雪は弱まつてきたとは言え、もう闇が広がる時間だらう。

それぞれが外套を羽織るのを横目で見ながら、底冷えする玄関にすり抜ける。大きく開けた玄関扉の外に暖炉から移した火を灯した。ようやく帰ってくれる・・・との安堵感から小さくため息をつくと、風の音に紛れてしまう位の呼び声が聞こえた。

振り返ると、玄関ホールの傍にオロオロと銀のトレイを持つた赤毛の少年が佇んでいる。

どうしたワソコ。

「すみません。大事な高価な品物なので、しまつて頂いた方が良いと思うのですが・・・」

ああ、確かに。

にっこり笑つてトレイを受け取ると、明らかにほつとした満面の笑顔でお礼を言われる。

良いな~少年。大人になつてもそのままの君でいて欲しいよ。うんうん。

応接室に戻ると、依頼された魔術具の期限を最終確認している。

カマキリ男には一番大事な話だろう。話が終わるのを見計らって、布袋の中に色とりどりの魔石を納めてシルヴィアに渡していると、先程のワンコが寄ってきた。

私に話そうか、シルヴィアに直接話そうか悩んでいる素振りを見せてから、意を決したようにシルヴィアに問いかける。

「先程のお話ですが、魔石の色味によつて癖があるならば、もしかしたら従来使えないと言っていた肩石でも使える可能性はありますでしょうか？」

その問いに、玄関口まで出ていた助手候補の一人びといふかロワン老もコツドフィールも動きを止めこちらを覗き込む。
無表情な仮面に隠されていない、紅をさした口元が面白そうに歪んだ。

「あるかもしませんね。でも簡単に見つかるような物なら既に実案化されていはるはず。利益を求める探究心を持ち続けられるなら、答えは必ずと見つかるでしょ。」

今までと違う方法で使用出来るなら、魔石市場に新たな市場が開けるが、色味による癖を見出すにはそれだけのサンプル数がいる。膨大な時間とお金をかけて、見つかる結論が有用なものとは限らない。

利益を求めずあくまで学術的な研究として、それが出来るのかと説くシルヴィアは、まるで世界を呪つているかのようにすら思えた。

比類ない発想力と膨大な資金、搖ぎ無い技術力を持ち、権力者達が喉から手が出るほど自分の物にしたいと思っている彼女の闇は深い。

自分たちの望む仕事をさせようとも、権力にも金にも名声にも興

味が無い。監禁しても意味は無く、無理やり外に連れ出せば、唯の盲目の人間になる。

故に不可侵。故に”孤高”的シルヴィアの二つの名を持つ。

「それでは王宮からの仕事は確かに承りました。一月後、雪解けの頃にお待ちしております。」

嫣然と微笑んだ仮面の女は、あの瞬間、確かにこの地の女王であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5524m/>

世界のカケラ

2011年11月20日16時25分発行